
竜の人～伊地知竜右衛門異聞～

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の人〜伊地知竜右衛門異聞〜

【Nコード】

N6841X

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

明治初期、大阪にて政務を執る大村益次郎は、なんととはなしに昔の雑記帳を広げる。そこには、かつて共に戊辰戦争を戦った薩摩の伊地知竜右衛門の姿があった。伊地知を懐かしく思った益次郎は、伊地知を大阪にまで呼び出す。久々に現れた伊地知はかつての名将・伊地知のままで現れた。しかし、大村はどことなく違和感を感じていた。その違和感の理由を探るうち、二人の会話は戊辰戦争の分水嶺、白河戦争へと至るのだった――。

【1】

風が部屋に吹き込んでくる。梅雨も明けてしばらく経つ。いつしか風から湿気が消え、夏の匂いが代わりに混じっていた。

畳の上に絨毯を敷きその上に洋机や椅子を置いた、急ごしらえの執務室。東京から運ばれてくる様々な書類、そして洋書の山が部屋の隅に溜まっている。だが、風はその紙の山をあざ笑うかのように、パラパラと弄ぶ。風にいたずらされた書類たちは机の上で盛大に広がる。

明治新政府の兵部省兵部大輔・大村益次郎は、風に遊ばれてしまった机の上の書類をまとめ直し、また思い出したかのように目を通し始めた。

芳しくないようだな。

広い額の汗を払いながら、大村は一人ため息をついた。

その書類は大村の意を受けた部下の報告だった。部下の伝える東京の明治政府の内情は好ましい状況とはいえない。どうやら、薩摩の大久保利通が日増しに発言力を強めているようだった。わずか半年ほど前の戊辰戦争の際にはまったく武働きがなかった男だが、何せ政治が上手い。いや、謀略と言い換えてもいい。気づけば明治政府内に隠然たる影響力を敷こうとしている。

まあ、いい。

大村は机の上に報告を投げ遣る。

大久保の肚は分からない。もしかしたら、明治政府を私物化せんとする算段があるのかもしれない。だが、あの男はそこまでの男だ。明治政府を支配こそすれ、明治政府そのものを否定するような輩ではない。

大村は椅子を立った。開け放たれた障子から縁側に出て、夏色の深い空を見上げた。少し遠くに蝉の声が聞こえる。ジワジワと鳴く

蝉たち。思えば、一年前、奥州で戦をしていた頃にも同じく蝉が鳴いていた。蝉からすれば、人間の戦など知ったことではないのだろう。そう思うと、今の憂慮が取るに足らないものに思えてくるから不思議だった。

ある意味で、俺も同じようなものだ。俺は俺で、東京の事など知ったことではない。

大村は我が身を嗤う。

大村益次郎。後に明治維新の立役者と謳われる四雄藩、長州の出身。長州派志士の維新における勲等一位が桂小五郎だとするなら、大村は第二位に位置するだろう。

元は蘭学を学んだ長州の村医者であった。が、蘭学の心得があることから西洋の兵学に触れるようになり、いつしか医者としての働きよりも、西洋兵法家としての名が知られるに至る。その大村を見出したのが桂小五郎である。長州藩の重鎮・桂の信任を受けた大村は奇兵隊を始めとした長州藩兵たちに西洋兵法を教え込む。大村は学者としての才を見込まれた。

普通学者という生き物は机上の空論ばかりで実際には役に立たないというのが相場だが、大村益次郎はむしろ実際の現場で輝いた学者であった。大村が指揮を執った戦には負けがない。必ずしも優勢だった戦いばかりではない。だが、その戦のどれも、まるで千里眼のごとき先読みと神がかりめいた軍略で対する敵を破ってきた。その功が買われ、戊辰戦争の折には事実上、官軍の総督となった。西洋諸国が目を光らせる中、長引かせるわけにはいかない戦争だったが、二年弱で全てを収めてしまった。

「その才気、鬼の如し」

大村と同郷の蘭学者の言葉である。

そのような大村に、明治政府が文官としての道を用意するはずもなかった。

兵部省兵部大輔。兵部省とはその名の通り、日本の軍を司る省として発足した省である。そして兵部大輔とは兵部省のトップである

兵部卿の下で実務を行なう次官に当たる職である。だが、大村の上に立つ兵部卿は親王であった。つまるところ、名目だけの兵部卿。事実上、大村が兵部省の最高責任者であった。

ともかく、ずっと武働きの中に身を置き、軍の帳の中で心算を磨いてきた大村とすれば、大久保など大した問題ではなかった。

あれは、文官だ。

そんな意識がある。

俺は武官だ。大久保とは関係ない。よしんば大久保に何を言われたとしても関係ない。大久保が政府で力を持つとが、武官である俺には関係がない。

大村は今、大阪にいる。

「大阪の軍備を増強すべし——」。そう大村は発言した。日本のほぼ中心に立地する大阪。そこに軍の本営や軍の工廠を置く。未だ国力はついておらず、当面日本は専守防衛に努めなくてはならないが、そのためにも大阪に大隊を置きたい。大阪は陸運においても海運においても他の都市に比べ優位がある。大阪を日本防衛の一大拠点としたい——。

まごうことない正論、まったく破綻のない理屈である。自分を見出した同郷・木戸孝允（桂小五郎より改名）の支持も取り付け、その準備の為に一人大阪で兵部大輔としての任についている。

だが、これは大村の言い訳だった。

色々と理屈は付けてみたが、結局のところは中央政府の文官連中と関わるのが面倒だった。戦を知らない文官が、こちらのやることに口を出してくるのが我慢ならなかったのだ。しかも、文官どもの言うことは常に「予算」だの「実現可能性」だのといった軍事とは関係のない話題だ。軍事、殊に防衛に関しては、実現可能性がどうの、メンツがどうのなど、発言すること自体が馬鹿馬鹿しい。武器を持った暴漢が目の前に現れたとき、メンツが潰れないようにと刀を抜かないバカがどこにいる？ 防衛は、少ない予算をどうにかやりくりしながら、なんとか実現しなくてはならないものなのだ。

だが、文官どもはあれこれと注文を付けてくる。

馬鹿馬鹿しいにも程がある。

そんな文官どもから離れる意味もあり、大村は大阪行きを主張したのであった。

空の向こうに、立ち上る入道雲が見える。

真つ白な入道雲を見上げつつ、大村は苦々しげに呟く。

「戦を知らぬ馬鹿が、軍事を語るな」

くるりと踵を返した大村は、まだどつかりと椅子に腰をかけた。そしてまた部下の報告に目を通そうとしたが止めた。どうせ文官どもの狭い見が命令という形で書かれているだけなのだろう。見る価値など無かった。ふと、部屋の隅に掛けられていた鏡に目を向ける。そこには自分の真つ赤な顔が映っていた。つながっている太い眉毛、広い額。

この異相のせいで、長州時代には「火噴き達磨」とあだ名を付けられた。特に、興奮して顔を真つ赤にして檄を飛ばすさまが「火噴き達磨」だったのだろう。

懐かしかった。思わず大村は噴き出した。

だが、そのあだ名をつけてくれた男ももうこの世の人ではない。気づけば本当に戦・軍がなんたるかを知っていた者たちは早々に逝ってしまった。特に、長州の人士たちは。維新を見た者たちも、気づけば軍事から足を洗い、文官として政府に奉仕していた。今に思えば大村を火噴き達磨と呼んだ男も、いけ好かない男ではあったが戦のなんたるかを知っていた。

皆、行き詰ってしまった日本の天を回すために戦い、死んでいった。そして維新回天の後、天下には武に生きる者がすっかりいなくなってしまった。

あの頃はよかった。

報告書から目を外した大村は、その横に置いてある和綴じの冊子をぱらぱらとめくった。公的なものではない。大村がことあるごとに書き遺している雑記のために使っているものだ。未だ維新が成る

前、米国人のヘボンという人に師事していた頃、そのヘボンから最初に教わったことだった。「日本では公の為に日記を残しているよ
うだが、私の為に雑記を残すべし」と。その理由についてヘボンは、
母国の言葉である英語にてこう続けた。「君たちはいつか責任ある
役職につくようになる。その際に、自分の発した言葉にも逐一責任
が降りかかる。自分のすべての言動を記録しておきたまえ」。実に
その通りだ。大村が頷く横で、なぜか悪戯っぽく相好を崩したこの
米国人はさらに続けた。「それに、日記は君たちの人生の財産にな
る」と。

大村はその師・ヘボンの教えを半分守った。

それ以来、確かに雑記を付けるようになった。ことあるごとに自
分や相手の発言を書き留めるようになった。だが、その発言たちを
体系的に保存する事をしなかった。別に特段の理由はない。他意も
ない。

だが、大村は時折、ヘボンに感謝することがある。

雑記帳には自分の忘れていた事実が並んでいる。自分はそんなこ
とを言ったか？ あの時、あの人はあんなことを言ったのか。雑記
帳を開く度に新たな発見がある。そしてそれは、こうして執務のほ
んの一時に、僅かながらの潤いを与えてくれる。ヘボン師の口にし
た「財産」とはこういうことなのだろうか。大村は時折考える。

雑記帳には様々な言葉が並んでいる。数年前からつけている言葉
たち。ありありと昔を思い出す。そうやって文字になってみると無
味乾燥なものだが、読み返してみると往時の思いが蘇る。

柄にもなく頬を緩めながら何とはなしにページをめくっていく。

と――。

「む？」

大村の手が止まった。

「なんだ、これは」

思わず一人ごつ。

雑記帳の中、色々な人物の発言たち。そのどれもありありと思

い出すことが出来る。元々が俊英・記憶力はいいのだ。文字として残っていればすぐに思い出せることばかりだ。

にも拘らず、雑記帳の上に踊るその言葉について、まるで何も思い出せなかった。

雑記帳には、こう書かれていた。

“ 敵の弾丸 まるで当たらぬ達磨殿。じゃっどん味方の弾丸は容易く当たりもす 伊 ”

【2】

誰かの発言のようだ。それに、前後に書かれている他の人物たちの発言からして、一年前の戊辰戦争の緒戦、鳥羽伏見の戦いの際の物であることは容易に分かった。それに、“じゃっどん”という薩摩言葉からして、発言者が薩摩の人間だということも分かった。そこまで分かっているながら、さっぱり状況を思い出せない。

うむ？

小首をかしげても思い出せない。

言葉の末期にあった「伊」という一文字、これだけで思い出すことになりそうだった。この末尾の一文字は、時折大村が残すもので、発言者の頭文字を取っていることが多い。

その伊の字を見てもなお、思い出せない。

「誰だ？ これは」

だが、分からないままというのも気持ちが悪い。執務そっちのけで、戊辰戦争当時の資料を漁り始める。部屋の間山積みになっている書類の山。未だ戦後処理中の為、戊辰戦争の資料は比較的に取りやすい処に山のようになっていた。その書類をひっくり返してすぐ、伊の頭文字を持つ男の名前が目にとまった。そして、その発言を取り巻く状況もまた芋づる式に思い出した。

。

時は約一年前、戊辰戦争の緒戦・鳥羽伏見の戦いにまで遡る。

その前年、慶応三年に徳川幕府は朝廷に大政奉還を行なった。かねてより朝廷に働きかけ、武力倒幕を画策していた薩摩の動きを掣肘するための措置であった。事実薩摩はこの大政奉還を受けて、一時は武力倒幕を諦めたほどだった。が、結局朝廷に対する徳川の影響力を排除できないとして、薩摩は朝廷から倒幕の密勅を引き出すことに成功する。

そして、慶応四年正月、遂に薩摩と旧幕府軍の間で戦端が開かれ

たのだった。

この鳥羽伏見の戦いに、大村は――長州は――、殆ど参加していない。というのも、戦端が開かれた当初、朝廷内部にさえ、この戦いをどう扱うべきか紛糾があった。あくまで薩摩と旧幕府軍の私的な戦闘であるとする意見もあり、一方で薩摩による徳川討伐を承認する意見もあった。そのゴタゴタの為に、結局長州が戦闘に参加したのは鳥羽伏見の緒戦の大勢が決まり、朝廷として正式に徳川慶喜を朝敵として認定した、一月七日以降だった。

それは、一月の八日のことだった。

大村益次郎は一隊を率い、大坂城に向かっていった。数は五百。その前日、大坂城に居たはずの徳川慶喜はわずかな側近を引き連れて大坂を脱出し、海路江戸に向かっていった。それを受け、旧幕府軍の士気は大幅に落ち、旧幕府軍の士卒たちは江戸や自分たちの国へ退却を始めていた。徳川慶喜が陣を張っていた大坂城でも例外ではなく、七日の段階で殆どの旧幕府軍は大坂から離れようとしていた。大村に任せられた任務は、殆ど空城同然の大坂城を占領することだった。

確かに、大勢は決まった。だが、指揮系統が崩壊し、統制の効かないこういう時こそ小競り合いがある。行軍の途上、丁度鳥羽伏見の戦いで激戦だった辺りで、大村率いる長州軍はたまたま退却するところであつた旧幕府軍の一団と出くわした。距離は四半里ほど先、せいぜい数は五十。大勢の決した戦、その敗残兵。別に長州軍が構うべき相手ではなかった。追撃などする気はさらさらなかった。将のいない敗残兵を追うことほど馬鹿げたことはない。弾丸の無駄遣いだ。

だが、戦というものはままたらないものだ。

長州側の兵が、発砲してしまったのだった。

行軍中、出会いがしらに敵を見つけてしまい、軍が浮足立ってしまふことがある。将が命令を下す前に士卒が行動してしまい、思いもよらぬ戦闘になることがある。この状況はまさにその典型だった。

戦う意味もない、無駄弾丸むだだま食いの小競り合いが始まってしまった。使われたまま所々に放置されている防塁に身を隠して指示するのが精いっぱいだった。突然敵と出くわして浮足立っている兵たちは、その防塁に身を隠しながらも命令も統制もなく弾丸を撃ち始めた。それに応じる形で、旧幕府軍の兵たちも発砲を始めた。弾丸の風切り音、発射の間隔からして、相手の兵器は火縄銃、あるいは旧式のゲーベル銃であることは見え見えだった。こちらの兵装はミニエー銃。ゲーベル銃と比べてはるかに命中率に優れる。数でも勝っている状況、負けるはずがない。

だが、如何にせん統率がとれない状況。皆突然現れた敵を過大に恐れている。あまりにまづかった。

ち、仕方あるまい――。

防塁に身を隠していた大村は、ひよいとその上に立った。弾丸が飛び交う小競り合いの中、である。周りの制止も聞かずに。

長州藩兵たちは一瞬撃ち方をやめた。皆の視線が大村に集まる。

大村は叫んだ。

「安心しろ！ 弾丸になどそうは当たらん！ それに怖いのは相手も一緒だ！ 慌てずに事に当たれ！」

これには大村の読みがあつた。四半里も離れている状況で、旧式のゲーベル銃に狙撃される確率などほとんど零だ。流れ弾すら当たることはあるまい。だが、この場面でそれを説明したところで分かりはしないだろう。そう判断した大村は、我が身を実例にして防塁の上に立ったのだ。

自軍に向いていた大村は相手を睨んだ。四半里先にて展開する、わずか五十の敗残兵。

そして。

「恐れず、果敢に撃て！」

采配代わりに刀を抜いて前を指した。

大村益次郎にはそういうところがあつた。学者にはない豪胆さと苛烈さが、ある意味でこの男の強みだった。

と――。

不意に、歌のように節のついた言葉が大村の耳に入った。

「敵の弾丸、まるで当たらぬ達磨殿」

がちゃ。背中に冷たいものを突き付けられているような感覚に襲われる大村。

「じゃっどん、味方の弾丸は容易く当たりもす」

聞いたことのない声色だった。とても軍中で聞くとは思えないほど、穏やかな声音。少なくとも、自軍の者たちではない。しかも、その独特の訛り、これは薩摩の言葉だ。自軍に薩摩の者はいない。皆長州の者たちだ。

なに？

思わず振り返る。

防塁の下には、見慣れない風体をした男が立っていた。

背の高さは五尺ほど。痩せこけた犬のような手足をしている。薩摩軍揃いの黒い軍服を身にまとっているが、その左腰には短身瘦軀に不似合いの豪壮な大小を差していた。いわゆる、薩摩拵の刀だ。肌の艶や皺の数からして、殆ど大村と年齢が変わるまい。

だが、大村の目に留まったのはそんな些細なところではなかった。その男は左目に眼帯をはめていた。さながら講談で語られる柳生十兵衛のように、刀の鰐で左目を隠し紐で結んで眼帯を為していた。右手にて杖をついてその場に立っていた。どうやら伊達や酔狂で杖をついているわけではなさそうだった。その男の体重は、確かにその太い杖によって支えられていた。

そして、何より――。その男は、残った左手にミニエー銃を持ち、その銃口を大村の背中に突き付けていたのだった。

その眼帯男はつまらなそうに口を開いた。

「浮足立った軍を身一つで鎮めるその才気、お見事にござす。じゃっどん、お前は^まはんはこの軍の指揮官でござはんか？ 大事な御身、せいぜい大事にするが良かど。さっさとその壘から降りるが良かど」
薩摩の連中とは何度も話したことがある。薩摩の言葉は崩れに崩

れていて意味が取れないことも多い。だが、耳で聞いた言葉はたとえ聞き取れないところがあつたとしてもどうにか意思の疎通がはかれる場合がある。正直、あまり薩摩言葉に慣れておらず意味のほとんど分からなかった大村ではあつたが、その言葉に善意めいたものを感じた大村は、唯一聞き取れた言葉に従い防塁から降りた。

「……あなたは一体何者だ」

大村の言葉を塞いで、眼帯男は笑う。

「敵に見えもすか？ 俺は味方おいでござす」

その眼帯男は大村に打ち方をやめるように言った。なぜ？ 大村が訊くと、眼帯男はまた笑った。「同志討ちは禍根を残しもす」と言われた通りに打ち方をやめさせた瞬間、眼帯男はコツコツと杖をついて何歩か歩を進め、左手のミニエー銃を天に向かって打ち放った。

と――。

その瞬間、左翼で鬨の聲が上がった。

なんだ！？ 大村は左翼を睨む。

そこには、薩軍の旗を躍らせた一軍が控えていた。数は百ほど。だが、竜がいないでいるが如きその音声おんじょうが、辺りの空気を揺らした。

天に向けていた銃口を敵軍に向けた眼帯男。

ふん、と息を吐いた。

「地軸の底まで叩つ斬りもせ！」

眼帯男が叫んだ瞬間、離れたところにいた薩軍が動いた。男の聲が届いているわけではない。だが、まるで眼帯男の命を受けたかのようになにに動く。獣のような声を上げて殺到する一団五十。そしてその援護射撃に回る後方支援五十。援護射撃の弾幕は収まりそうもない。もしかすると、長州と同じ最新型の元込式連発銃を装備しているのかもしれない。

だが、何より目を引くのは呐喊とっかんする歩兵の方だ。

銃口を前にして、まるで恐れるところを知らない。別に呐喊兵た

ちは鎧に身をまとっているわけではない。恐らくは眼帯男と同じく揃いの軍服に違いない。

【3】

にも拘らずああして蛮に呐喊できるということは、よっぽど自分の腕を恃みにしているか、あるいは後方の支援隊を信頼しているかそのどちらかだ。いや、あるいは両方か。

たかが百。だが、明らかに孕む空気に暴が混じっている。

その空気に圧されたのか、敵軍は恐慌をきたしたようだった。最初は多少の反撃を見せていたものの、呐喊兵たちが近づくにつれ、一人、また一人と持ち場から離れていく。遂には敵軍全員がまさに蜘蛛の子を散らすようにして退散していった。

どうやら薩軍に損害はない。それどころか、敵軍にさえ損害はない。

呐喊兵たちは逃げていく兵たちを追わない。総員が去つたのを見届けるや、さつきまでの怒涛のような進軍を止め、後方支援隊に合流していった。わずか百人。だが、一糸乱れぬ用兵。何より、司令官の意思を見事に体現した用兵と言える。

犬の喧嘩で言えば、牙を突き立てるまでもなく、吠え合いだけで勝負が決したと言ってもいい。

ふう。一人満足げにため息をついた眼帯男は四散していく敵軍を眺めながら頷いた。

「何処の家中の者かは知りもはんが、生きて帰るのが何よりでござす」

大村が茶々を入れる。

「ほう、武人が敗残兵の心配とはな」

「その口ぶり、心配してはまずいような言い方でござすな」

眼帯男の言葉の響きには、豪壮な薩摩訛りには似合わない哀調があった。この男の独眼には、大村に映らない何かが見えるようだった。

まあ、いい。俺には関係のないことだ。

大村は頭を振った。

「お恥ずかしいところをお見せした」

「うむ？ 何がでこわすか」

「敵に接遇し統率が乱れるなど、三流のやることだ」

大村の本心だ。そもそも戦というのは相手と戦闘をする行為である。如何に勝ち戦であれ、行軍中であれ、戦の最中ということはいつかなる場面においても戦闘状態になる可能性があるということだ。「突然敵が現れたから」などという言い訳は通用しない。軍略家、しかも家中随一の用兵天才の名を欲しいがままにした大村からすれば、この失敗は恥辱でしかない。結局のところ、一軍の失敗は司令官の失敗なのだ。

だが、眼帯男はその大村の言葉を笑った。

「真面目なお方でこわすなあ。まあ、この状況で気が緩まんほうがどうかしていると俺は思いもすが」

不思議な男だ。大村は思う。

普通一軍を率いる将はどこか野蛮な空気を孕んでいるものだ。軍を動かす人間は、常に味方の士気を高めるために居丈高な態度を取る。そうして軍人は野蛮に磨きがかかってくるものだが、この男にはその色がまったくくない。むしろ、どこか学者然とした雰囲気さえある。

だが、眼帯男は次の言葉で大村の持った印象をひっくり返した。

「じゃっどん、お前は^まん、少々軽率なところがあり申す。罍の上に立つあれなんざは、まさにその典型でこわす」

思わず反論しようとしたが、大村は口をつぐまずには居られなかった。目の前にいる眼帯男は、味方であるはずの大村に対して殺気にも似た気を放っていた。まるで獰猛な獣が獲物の喉首を狙っているかのような独眼。短身痩躯、独眼、杖について足を引いている男から発される威圧。ふと、大村は額に汗をかいていることに気付いた。一月、冬に。

「戦というのは何が起こるか分かりもはん。じゃからこそ、軍略家

がおるのではござはんか？ その軍略家が、鉄砲の弾丸が飛び交うところに飛び出すというのは、職務の放棄ではござはんか？」

「……相手の銃はゲーベル銃。あの距離ならば当たる確率は一分にも満たん」

「が、当たる確率はあるいうことでござす。自分の命を大事になされた方が良かど」

目の前の眼帯男は一步も引く気がない。滲み出る威圧が全てを物語っていた。

こちらが折れるしかなさそうだった。

仕方なく、大村は頭を下げた。すると眼帯男はニツと相好を崩した。

「おっと、軍略の事となると、どうも熱くなりもしていかん。あまりお気を悪くなされんでくれもんぞ」

そのどこか人懐っこい笑みに、さきまでの厳しい表情が消え去ってしまった。軍を自在に操るのみならず、この独眼の戦略家は自分の感情さえ自在に操るらしい。

どこかその笑顔にほだされながらも、大村は口を開いた。

「申し遅れた。拙者は長州軍——」

「ああ、そげんな紹介は要りもはん。お前はんが誰か、知っておりもす。長州の大村益次郎殿。いや、火噴き達磨殿とお呼び申した方が良かど？」

なぜ俺の名を？ だが、その問いを聞く前に、眼帯男はのっそりと踵を返した。足のせいだろうか。

「俺はもう行きもす。旧幕府軍の追討がありもすよつて。——これからの戦、よろしく頼みもす」

コッ、コッ。

右手にある杖をつきながら、眼帯男は一步一步と歩を進めた。右足を引いてはいるが、その歩みにさえどこか近寄りがたい威圧を放っているのがあまりに不思議だった。

「ちよつと待たれよ！」

呼び止めると、眼帯男はゆっくりと振り返る。

「何でござすか」

「御家名と御尊名を賜りたく」

しばらくの間、沈黙。眼帯男は不思議そうに首をかしげるばかりだった。だが、ふう、とため息をついたのをきっかけにして、眼帯男は口を開いた。

「俺か？ 俺は、薩摩家中・軍奉行の、伊——」

。

ああ、なぜ忘れていたのだろう。

雑記帳を見つめながら、大村は一人呟いた。

なぜ俺は、あれほどの男を忘れていたのだろう。いくら考えても分らない。

あの男はまごうことなき戊辰戦争の勲一等だ。無論、自分も明治政府の総督、つまりは政府軍の最高責任者として様々な戦に参戦した。中には自ら計画を立てて一日のうちに終結させた戦いもあった。勲一等は自分だという意識が益次郎にないと言えばそれは嘘になる。だが、もしあの男が明治政府側にいなかったならば戊辰戦争はまた別の様相を呈していただろう。勝つには勝っていただろうが、恐らくは明治政府側の犠牲者がさらに増えていたことだろう。内戦状態が長引けば長引くほど、他国から内政干渉を受ける可能性があった。開戦の際、列強各国は傍観の構えを取ったが、それとていつ翻るかには誰にもわからなかった。恐らく、慶応四年／明治元年ほど、綱渡りな年はなかっただろう。

あの男は薩摩閥だ。

薩摩の巨魁・西郷隆盛や大久保利通、小松帯刀といった曲者たちに列する男である。

が、最近とんとその名前を聞かなかった。

薩摩に限らず、先の戊辰戦争で名だたる功績を上げた將軍や士卒たちは兵部省に入った。あの男とて例外ではないはずだった。だが、いくら兵部省の名簿をひっくり返してもあの男の名前はない。あれ

だけ功績を上げたにも関わらず、かの男には未だ役目が下されていないようだった。

それを知った大村は、東京の部下に向け危急の手紙をしたためた。普段ならばこまごまとした命令を紙にして何十枚にもして下す大村だったが、この時ばかりは僅か紙ぺら一枚の命令であった。

その命令書を書き終えた大村は、一人執務室で、あの男の名前を呼んだ。あの、薩摩の独眼竜の名前を。

「伊地知竜右衛門いちぢりゆうえもん」

その顔は火噴き達磨のあだ名の通りすっかり赤く染まっていた。だが、大村がそれに気づく由もなかった。

夏は暑い。去年、戊辰の夏と同じく。人の営みなど関係ない。

命令書を発してから二週間。

大阪の兵部省兵部大輔・大村益次郎の執務室を訪ねる者の姿があった。

その日も大村は執務室にて東京から届く書類の整理を行っていた。東京でやればいい執務をわざわざ大阪でやるということは、それだけ気苦労も多い。送られてくる重要な案件書類も一週間遅れてやってくる。如何に文官どもと距離を置きたいからとはいえ、一週間前の政府内の紛議を見せつけられるのにはさすがに辟易としていた。書類の一枚一枚に目を通してはサインを書いていく単調な作業に倦み始めていた頃、その来客は執務室の戸を開いた。

何の声もかけられずに開かれた戸を、書類から目を離さずに大村が咎めた。

「おい、挨拶もなしに入ってくる奴があるか」

「はっは」大仰な笑い声。「じゃっどん、いきなり“大阪に来い”と催促するは、いくら天下の兵部大輔殿と雖も無礼じゃなかど？」

懐かしい声だった。勇壮で豪放な響きをする薩摩訛りであっても、その奥の方に感じる優しげな声。

「うむ？」

思わず大村は顔を上げた。

その大村の視線の先、執務室の戸の前には、あの男が立っていた。和装だった。茶色の上着に黒い袴姿が、細身の体によく似合う。やはり以前と同じく、その左腰には薩摩拵の大小が差してあった。一年前に顔を合わせた時と同じく総髪。さすがに眼帯は鰐のものでなく、黒布のものに替わってはいた。やはり右手には杖がある。何も変わってはいなかった。

【4】

だが、大村は目の前に立つ男の変化を、過敏に感じ取っていた。だがその正体が分からない。今目の前にいる男は、あの男によく似た人形なのではないか、そう思ってしまうほどに、その男をその男たらしむ何かが抜け落ちていくように思えた。

大村は椅子から立ち上がり、男の前に立った。

すると、眼帯男はゆっくりと頭を下げた。

「はは、先般のご無礼、平にお許しくれもんせ。じゃっどん、はるばる東京から大阪まで参りもした。ちつと位は愚痴の一つや二つは言わせてくれもんせ、総督殿」

はは。さすがの大村といえど、この言葉には笑うしかない。無理を承知で大阪まで来て欲しいと要請したのは大村の側なのだ。

「いやいや、あなたの無礼には慣れているし、そもそもあなたを大阪に呼んだのは俺だ。それに俺はもう総督ではない。気を遣う必要などない」

大村は頭を振った。この眼帯男の言う“総督”というのは、先の戊辰戦争における大村の肩書である。もう数ヶ月前に戊辰戦争は終結し、大村の両肩にかかっていた総督の肩書は消滅している。

だが、男は笑う。

「俺にとつては、大村殿はいつまで経っても総督殿でござす」

なぜだろう、この男にそう言われてしまうと普段ならおべっかだと割り切ってしまう言葉がいやに嬉しく響く。だが、心の底に響く思いを無理矢理封じて、大村は男を迎えた。

「ようこそ。伊地知竜右衛門殿」

すると、伊地知はぽりぽりと後ろ頭を掻いた。

「ああ、実は俺、その通称はもう捨てました。今は、正治と名乗っております」

「シヨウジ？」

「国を正しく治めるで正治。まあ、昔からこの名前でもしたんど」

伊地知正治。身勝手な言い分だが、その名前はあまりにも目の前の男に不似合いだった。大村にとって、伊地知はやはり“竜右衛門”だった。飛ぶが如くに戦場を渡り、敵軍の腹を爪で裂き、腸をその顎で引きずり出す。伊地知の操る軍はさながら竜のようだった。

だが、こんな個人的な感傷を面と向かって伝えるわけにもいかず、大村は伊地知に椅子を勧めた。すると伊地知は嬉しげに相好を崩し、大村の勧めのままに椅子に座った。大小の刀を帯から引き抜きながら穏やかな笑みを浮かべる。

「総督殿、お変わりないようで何よりでござすな」

「伊地知殿こそお変わりなく」

「いやいや」伊地知は手をひらひらと振る。「このところ、どうも体がなまって仕方なか。戦のなか時代に槍は不要。戦のなか時代に軍師は不要。俺のように武働き以外に得手のなか人間は、ただ腐りゆくのみござす」

それが伊地知一流の冗句なのか、それとも本音なのかは大村には分かりかねた。自分の椅子に腰かけた大村は、ただ机越しに対坐する伊地知の顔を見つめた。その表情にはまるで曇りがない。だが、なぜこんなにも晴れやかな顔を浮かべることが出来るのか、大村には分かりかねた。

何も言えずにいると、不意に伊地知はその顔を大村に寄せた。

「しかし、こうして暇なおかげで、総督殿とこげんとお話できるんじゃないから、感謝せんといかんのじゃつども」

伊地知殿、官職が決まっておられぬのか？　そう訊くと、伊地知は「ああ、大久保さんと西郷さんが官職を紹介してくれもはんからなあ」と冗談とも本音とも取れないことを言った。それに加えて「まあ、これまでが忙し過ぎもした故、丁度いい休みでござす」と言い訳じみた言葉を重ねるのを忘れなかった。

「で」

不意に、冗談混じりだった伊地知の言葉に真面目な色が入り込ん

だ。

瞬間、大村は悟った。

この男は何も変わっていない。

伊地知竜右衛門は正治と名を改め、明治を生きている。一年ぶりに大村に顔を見せた伊地知からは、昔の伊地知に在ったはずの何かがこそげ落ちていたように思えた。だが、それは錯覚に過ぎなかった。ただ単に、伊地知は己の中に飼っている“獣”を隠すのが上手くなったただだった。才気とも言え換えてもいい。ともかく、伊地知を竜たらしめている狂おしいほどの“何か”は、未だに伊地知の中でとぐるを巻いていた。

大村に対する伊地知は、実に涼やかな顔をしていた。優しげに細めていた独眼をいつの間にか大きく見開き、大村を捉えていた。

「何用でござるか。兵部省兵部大輔殿のお召しの理由は」

恐ろしい。大村は心からそう思った。

この男は独眼でしかこの世を見渡していないはずだった。だが、その独眼が恐ろしい。伊地知の問いはもはや問いではない。恐らく伊地知は、全てを見渡した上でこの問いを発している。つまり、この問答すらも伊地知の打った布石ということだ。

その布石をかわす意味もあって、大村はあえて本題に入らなかった。

「はっは、ただ単に、ちょっとお聞きしたかったことがあるだけだ」

「聞いたかった、こと？ 如何なことでござるか」

「先の戦について」

先の戦。つまりは戊辰戦争の事だ。

その言葉を聞いた瞬間、伊地知の表情が凍った。だが、それは一瞬の事に過ぎなかった。ふうとため息をついて表情を解冻させた伊地知は、穏やかな笑みを無理矢理その顔に張り付けた。

「おや、面妖なことをおっしゃりもすな？ 俺が担当した戦については、既に報告を上げちよる筈でござす」

「いや、申し訳ないな」大村は頭を掻いて見せた。「どうも俺は文

章で往時の状況を理解できるほど頭が良くないらしいのだ。あなたの報告、確かに読ませて頂いたが、読んで納得したふりをするよりも、実際に本人の口から聞いてみたくなつたのだ」

「ほう、それだけの為に、俺は大阪くん^{おい}だりまでお呼ばれにあつたということでごわすか」

「はつは、それはないだろう伊地知殿。伊地知殿程の方ならお分かりのはず。実際にあつた戦を研究する事は、兵法の基本。たとえ日本の兵法であろうが西洋流の兵法であろうがそれは同じことだろう」
結局のところ、軍事学というのは実際にあつた戦から勝利に寄与したのであるう様々な条件を拾い上げ、それをデータ化した学問だ。であるからには、様々な実例が欲しい。大村の言わんとすることはすなわちそういうことだ。

しばらくそつぽを向きながら顎のあたりを撫でまわしていた伊地知だったが、恐らくは言い訳の言葉が見つからなかつたのだろう、渋々といった体でこくりと一つ頷いた。笑みの表情は崩さなかつた。
「まったく、総督殿には恐れ入ります。で、何を聞きたいのでございすか。何を聞いても良かど」

すると、大村は指を一本立てた。

「白河での攻防戦。あの戦をお聞きしたい」

「白河」

伊地知は大村の言葉を鸚鵡返しにした。だが、その鸚鵡返しには焰のような熱が確かに籠っていた。僅か一年前の戦。その熱気がここに蘇っているかのようにだった。

その伊地知の心のさざなみを感知しつつも、あえて大村は知らぬふりをとった。

「あの戦は見事だった。恐らく、あの城はあなただから落とすことが出来たのだろう。もしもあの場面で早期に白河が落ちていなければ、もっと戊辰戦争の終結が遅れたはずだ」

伊地知は曖昧に頷いた。

「まあ、俺の独眼に大局を見る力はありません。じゃっどん、恐ら

くはあの戦いが俺にとって畢生ひっせいの戦となるのではなかか？」

畢生、か。心の隅で大村は呟く。

その言葉にさえ、伊地知の張った布石の影を感じる。かつて長州は、伊地知率いる薩摩軍と一戦交えたことがあったが、その時に見えず本当に良かったと心から思った。ちなみにその時、長州軍は伊地知の采配により総崩れといっても差し支えないほどの大損害を負っている。たかが言葉を交わすだけだが、この男との会話は気を抜けない。向こうを張って戦陣を構えているような錯覚に陥る。

恐ろしい男だ。

大村が心の隅で呟く前で、不意に伊地知は「ただし」と声を上げた。

「お答えしても良かけど、その代わり、総督殿、お一つお聞きしたいことがあります。それに赤心をもってお答えくれいうなら、俺も先の戦について話します」

交換条件。

飯にもかつての上官に対して交換条件を突きつけるとは大した肝である。だが、伊地知のこの態度の裏には圧倒的な自信と大村に対するある種の信頼が控えている。つまり、「自分がこの男に負けるはずがない」という自信と、「大村益次郎ともあろう方が、交換条件程度のことで尻込みするはずはない」という肚が混在しているのだ。何にせよ、一筋縄ではいかない男だ。微笑の裏に、途轍もないものを隠している。

つまり、大村に否の選択肢はない。否の選択肢という退路は既に塞がれている。

とんだタヌキだな。

苦笑いを浮かべつつ、大村は頷いた。

「いいだろう。約束しよう。ただし、質問の内容によっては他言無用とさせていただくが、それでもよろしいか？ 国の方針に関してのことならば、時として秘密にせねばならぬこともある」

伊地知は不満げに少し眉を吊り上げた。だが、仕方がないことと

割り切ったのか、眉根の困惑を振り払って頷いた。

【5】

「元々俺の胸にのみ留めておくつもりでもした。俺の質問は、あくまで俺が疑問に思っていることでござす。俺の意思で総督殿にお聞きしたいだけ。了解致しました」

「では、交換条件成立、だな」

「うむ。で、どちらから話しますか」

「ならば、西洋流の決め方をしよう」

大村は内ポケットからコインを取り出した。イギリス帰りの同郷・井上聞多から貰ったものだ。

大村は説明した。市井で行なわれる西洋将棋やサッカーとかいう玉蹴り遊びの際、先攻後攻を決めたり陣地を決めたりする時に公平を期すために行なう。コインを投げる者とそれを見守る者に分かれ、まずコインを空中に投げてそれを誰にも見えないように空中で取る。そして見守る者が、コインの表か裏を宣言する。その宣言が合っていれば見守っている人間の勝ち、逆ならばコインを投げた方が勝ち。現代でいう、コイントスだ。

「ふむ……？ どうも想像が出来もはん」

「まあ、やってみればわかる」

大村はコインの表と裏を伊地知に示し、それからコインを親指ではじいた。くるくると回るコインは大村の眼前あたりで放物線運動の頂点を描いた。回転は止まらない。だが、ゆっくりと上昇から下降に転じたコインは大村の手の中に向かって落ちていく。

そのコインを空中で取り、手で隠した大村は伊地知に向いた。

「さて。伊地知殿。表か裏か」

「なるほど、こういう趣向でござすか。まるで丁半博打でござすな」と笑った伊地知は、眼帯によって隠れぬ目を細めながら、口を開いた。この男らしく、即断だった。

「裏」

大村はコインを隠す手をどけた。大村の手の中にあつたコインは裏を示していた。

この勝負、伊地知の勝ち。

敵わんな。一人大村はため息をつく。伊地知には鬼謀のみならず、運まで味方についている将なのか。強いはずだ。

呆れ半分ながらも、大村は口を開いた。

「では、伊地知殿、あなたは選択が出来る。あなたから先に話すか？ それとも、俺が先に話すか？ この賭けに勝ったあなたはそれを選択することが出来る」

しばらく、伊地知は何も言葉を発さなかった。机の上に頬杖をついて、大村の顔をボケっと見つめるばかりだった。だが、光を宿さぬ眼帯の奥の脳は、確かに鋭く回転している。対する大村には分かる。この男が黙して語らない時、それは鬼謀を巡らしている時だ。その大村の視線をかわすように、不意に伊地知は笑みを浮かべて、つまらなそうに口を開いた。

「俺の質問は後にしてくれもんせ。先に、総督殿の質問にお答えしもんぞ」

「そうか」

大村は息を吐いた。

そして、この頃になると、大村の胸中にはある覚悟が芽生えていた。

この男を前に謀略など無駄にも程がある。結局のところ、この男との勝負は鬼謀や深謀のぶつけ合いでは決まらない。結局のところは器の比べ合いだろう、と。

面白い。

久々に、大村益次郎の胸中に狂おしく揺らぐ焰が灯った。

何としても、この男には勝たねばならん。

己の中にある修羅の心を将としての理で隠し、大村は続けた。

「では、お聞きしよう。慶応四年四月末から行なわれた、白河城の攻防戦について」

「お答えしもんそ」

その瞬間、二人の間に戊辰の夏が蘇ってきた。

あれは暑い夏だった。恐らくあれ以上に暑い夏はもうやってこない。大村にせよ伊地知にせよ、立場は違えど同様だった。

大村益次郎の心は戊辰の夏へと向かった。

恐らくそれは伊地知も同様だったろう。

「どこから、お話しもんせばよろしか」

伊地知はゆつくりと、慶応四年の春先の風景を語り出した。

2

慶応四年正月、薩摩と旧幕府軍との衝突から始まった鳥羽伏見の戦いは拡大の方向に向かった。最初は“薩摩家中と旧幕府軍との私的な小競り合い”との観測すら存在した鳥羽伏見の戦いであったが、かねてより討幕を主張していた公卿・岩倉具視や薩摩の思惑により、その戦の意味合いがすり替えられてしまった。薩摩軍と旧幕府軍の戦、しかも何の大義名分のないままに始まってしまったはずの戦争が「朝敵・徳川慶喜を追討する戦」へと大義名分を与えられ、旧幕府軍は朝敵と見なされた。徳川家は最後の最後で政治的な駆け引きに失敗してしまったのであった。

ともかく、鳥羽伏見の戦いを始めとする緒戦により、薩長土肥を中心とする朝廷軍は一月中に西日本をほぼ手中に収める。堰を切ったかのように飛び出した時代のうねりは止まらなかったためであろう。そして、その時代の濁流は西日本を飲み込んだくらいではそうそう止まらなかった。

正月に出された徳川慶喜追討の詔が朝廷軍に大義名分を与えた。関東に戻り朝廷に対し恭順の姿勢を見せた徳川慶喜だったが、そんなことで朝廷軍は止まらなかった。東海道・中山道に分かれ朝廷軍は江戸に進んだ。そしてその年の三月には朝廷軍は江戸の喉元にまで迫った。江戸を焦土とする全面戦争の様相さえ呈し始めたが、徳川慶喜が徹底して恭順の姿勢を見せたこと、また慶喜の意を受けた

勝海舟・山岡鉄舟ら幕臣による徳川家の助命嘆願・江戸城無血開城の働きかけにより、百万都市・江戸が戦場になることはなかった。徳川慶喜は蟄居処分、徳川家の所領は大幅没収。徳川家は家名を繋いだ。慶応四年三月末の事である。

これを以って、薩長土肥による対徳川家との戦争は大勢を決した。徳川家の処分が決まった以上、徳川家を追討する名分であったはずのこの戦は終結すべきだった。だが、歴史のうねりは予想だにしない事態を生む。

目を奥州に向けよう。

本来、奥州はこの戦とは関係のない地域であった。関東よりも東に立地する奥州は、物理的に戦場となるはずもなかった。また、奥州には親藩・譜代家の大名もあつたが、奥州を治める大名の多くが外様大名である。そもそも、あまり徳川家に対して帰属意識を持っていたわけではない。京都守護職を務めた会津や徳川恩顧の庄内、旧老中・安藤信正の治める磐城平など、幕府に近い立場にある家中もあるにはあつたが、扱いさえ間違えなければ奥州はなんの障壁にもならないはずであつた。

結果から言えば、朝廷は奥州の懷柔に失敗したのであつた。いや、そもそも懷柔する気すらなかったのかもしれない。

朝廷側は、会津と庄内を追討する肚であつた。事実、鳥羽伏見の戦いが終わってすぐ、会津を徳川慶喜と共に朝敵とする詔を発している。

会津の藩主松平容保はすぐに恭順の意を表した。だが、それを朝廷側は認めず、仙台・伊達や米沢・上杉といった外様の大名家に会津追討の命令を下した。

だが、仙台や米沢としてみれば、会津を攻める理由などなかった。攻める利益もない。仙台も米沢も戦国の昔から天下にあつた名家である。天皇の意思として発されている会津追討の命令だったが、その背後にある島津や毛利の下級武士どもの命令に従うのが癪だった部分もある。それに、仙台や米沢は、薩長首魁による新政府のこ

とを信じていなかった。

“ 会津ほどの名家、しかも先帝の覚えもめでたかった会津公を虫でも潰すかのように消そうとしている。かの政府に従ってよいものか？ ”

恐らくは同情もあつたのだろう。仙台は朝廷と会津の間に立ち、何とか中を取り持とうと画策した。会津はもとより恭順の意を示している。松平容保公は既に家督を譲り蟄居している。あとは会津に下される罰の軽重のみだった。

だが、朝廷側は頑として会津出兵を督促してくる。結局渋々ながら、仙台は会津へと兵を進めざるを得なかった。その中でも仙台は会津の助命嘆願を模索していた。

その頃には恭順の意を示していた前將軍・徳川慶喜の処分が決まっている。すなわち、恭順の意を汲み、家名の存続と助命を許したのである。この前例は会津と仙台を大いに勇気づけた。だが、会津に対して、朝廷は恭順の意を汲むことはなかった。

そして、四月の半ば、奥州仙台に派遣されていた奥州鎮撫の責任者であり、強硬に会津派兵を仙台に迫っていた世良修蔵という男が仙台兵により捕えられ斬首された。何とか会津の助命嘆願を進めたかった仙台にとって、会津攻めをしきりに命じてくる世良は目の上の瘤だった。その上、疑心を持った仙台が取り上げた世良が朝廷に送っていた密書には、奥州にさらなる派兵を要請すること、そして奥州の連中は会津攻めに対して消極的であり、奥州は皆敵である、とまで書いてあった。この世良の密書の内容が知れ渡った末の措置であった。

だが、仮にも世良修蔵は朝廷の目代である。

これを以って、仙台は朝廷と対立することになってしまったのだった。

かくて、この事件をきっかけにして奥州諸家中は糾合し、薩長政府に対抗するべく同盟を組むに至る。これがいわゆる、奥羽越列藩同盟である。

そして、戊辰戦争は“新政府対徳川の戦争”から、また違うべく
トルにシフトチェンジして展開されることとなる。

すなわち、明治政府と明治政府のやり方に対し疑念を抱く奥羽越
諸藩との戦いへと――。

【6】

慶応四年四月二二日。

その日、大村益次郎は江戸にいた。

徳川との全面戦争は既に回避される運びとなっていた。徳川家の武装解除は徐々に進んではいたが、数々の不穏分子や各戦闘での敗残兵が関東中に散らばっており、未だに予断を許さない状況には違いなかった。政府軍と敗残兵たちによる散発的な戦闘はそこかしこで起こっていた。

だが、それもあと数日で収まるはずだった。

東海道と中山道を通して関東に入った政府軍に疲弊はない。それもそのはず、中山道の板垣退助軍が甲州城奪取のために小規模な戦闘を行なった他には、まったく戦闘めいた戦闘はなかった。行軍に無理はさせていない。

不安といえば、政府軍の士気のよりどころであった“徳川家の殲滅”が回避されてしまい肩すかしを食ってしまった感があること、仮にこの出兵が長期化した時に兵たちの士気が保てるか、それ程度だ。

大机を置いた部屋の真ん中で、大村は地図を広げた。大村が注意を払っているのは関東・徳川家の御領知だった。関東一帯は元々譜代大名家や旗本、あるいは徳川宗家の領地がある地域である。民百姓に至るまで、「将軍様のお膝元」の意識が強い。そういった民たちを頼り、未だに徳川敗残兵たちが関東一帯をうろついている。

だからこそ、大村は諸隊に関東一帯の鎮撫を命じている。

その成果は着実に上がってきている。

例えば、甲州で板垣退助と戦った、新撰組の局長・近藤勇もこの鎮撫の際に捕まった。さんざん新撰組に煮え湯を飲まされてきた長州、土佐の士卒たちの士気は随分と上がったという。

あと、残すは――。

大村は地図上で江戸を指した。
と――。

「おお、大村どん。勉強熱心でござすなあ」

何の声かけもなく部屋に大男が入ってきた。でっぷりと太った体に、特注であろう大きな軍服をまとっている。中肉中背の大村より、二回りも大きな男。刀は差していない。小耳に挟んだ話だと、随分昔に怪我を負ってしまい、既に刀を握れる体ではないという。

地図から顔を上げた大村は、その大男に声を掛けた。

「ああ、西郷殿」

大村の前に現れたのは、薩摩の首魁・西郷吉之助であった。

名を呼ばれると、西郷はいやに嬉しそうに顔を歪めて鷹揚に笑う。
「お前様も随分と仕事熱心な方ぞ。地図とにらめっこして、何をしておられたのでござすか？」

「兵站へいたんの計算です。飢えては戦は出来ません。それに弾丸がなくて
は戦は出来ません」

戦というのは極めて複合的な事業である。軍を動かすための兵糧や資金の確保、その分配。兵站線の構築。その上行軍や戦闘行為が存在する。戦の華は戦闘行為には違いないが、それを支えるためにも兵站は重要な意味を持っている。

ふむ。

西郷はその巨体を揺らした。

「兵站でござすか。これだから、総司令官というのはつまらないものでござすな？　総司令官殿？」

「総司令官はあなたもでしょう、西郷殿」

この戦争は、かなり特殊な戦争と言えた。薩摩長州土佐肥後。また後に参加した諸家中たちが寄り合って一つの所帯となったのが新政府軍である。本来近代的な軍制において、最高責任者は一人と相場が決まっている。責任の所在が不明となるからだ。だが、今回の戦争はそうはいかなかった。薩摩にも長州にもメンツがある。どち

ら出身の総司令官が立つても角が立つ。そのため、薩摩から一人、長州から一人総司令官を出すことになった。結果、薩摩からは西郷吉之助が、長州からは大村益次郎が選出されたのであった。

とはいっても、さらにその上に親王が君臨したので、名目上最高司令官は一人だった。とはいっても、まさか作戦失敗によって親王に責任を負わせるわけにもいかない。

ともかく、事実上の司令官が二人いるのである。

「うーむ、じゃっどん、総司令官になどなるものではありもはんな？ 暇で暇で困ります」

何を言う。思わず反発しそうになるが、心中で抑え込む。

こうやって俺たちが地図を眺めている間にも、兵卒たちは戦を展開している。中には怪我をしたり死んだりする者がある。当り前の事だ。戦争とは相手の兵力を損なう行為である。どんな戦争にだって死は付きものである。事実、各参謀から上げられる報告の中には、戦死者の名前もある。書類の中に在る戦死者の名前はなんの重みももたない。だが、いや、だからこそ司令官は必死で戦の図を描かねばならぬはずだ。

のっそりと大村の前に立つ西郷は、そうやって自分の中の声と戦う大村に向かって笑いかけた。

「ははあ、大村総司令官殿。お前様は潔癖ごわすな」

「何？」

「思っただまのことを言っただまでのことごわす。戦いうのは、汚い事、残酷な事を裏に隠しめす。清濁併せ吞まぬ限り、お前様は一国の将の器ごわす」

「……戯言をおっしゃりたいだけならば、申し訳ありませんが御退室願いたいのですが。兵站の遅滞は即戦の結果に障りますもので」

「おや、虎の尾を踏んでしまいしたか」

西郷の顔にはまるで反省の色がない。さっきまでと変わらぬ顔色を浮かべたまま、大村を見据えている。大村には分かっている。西郷のこの顔は見くびりの顔だ。この男は常に「良きに計らえ」の姿

勢を取っているが、その底で部下や仲間たちの事を冷徹に観察している。

「聞こえませんでしたか？」大村は言葉を重ねた。「御用がないなら、御退室ください」

「おつとつと、忘れるところでござした」

大村の怒気など知ったことではないかのように満面の笑みを浮かべる西郷は、地図の上に踊る関東平野を指した。

「ちよいとこれからの戦略について相談させてくれもんせ」

戦略？ 大村は首をかしげた。

だが、その大村を無視する形で、西郷は日本地図の各点を指でなぞった。関東一帯を制圧しきった後、政府軍は幾手かに分かれ奥州に侵攻する。そして、会津・庄内を叩く。その余勢を駆って蝦夷地まで侵攻し、以て日本全土を政府の管轄下に置く――。

「ちよつと待たれよ」大村は口を挟む。「なぜ会津・庄内を？」

聞いた話だと、会津・庄内は仙台・米沢に叩かせる予定になっているという。尤も、あまり仙台が会津侵攻に積極的ではないらしい。それは当然の事だ。兵を動かすとなれば相当の資金がいる。それをこれまで何の後ろ盾もないぱつと出の“新政府”なる権力に命令されたところで、即断で行動できるはずもない。しかし、何とか仙台を懐柔してしまえば、奥州の大勢は決まる。政府軍が出張るまでもなく奥州は収まる。

大村としても、会津攻めは仙台にやらせる肚だった。はつきり言つて、徳川家の打倒が今回の戦の目的であり、大義名分であった。その徳川家討伐は既に終わっている。ならば、あとは終息へと手を打つのが司令官としての役割だ。

にも拘らず、西郷は会津を直接政府軍で攻めようと言っている。

西郷は言った。

「会津は恐ろしかところでござす。幕府に近い立場に在りながら、先帝の覚えがめでたいところござす。長らく共に朝廷に出仕しておりもしたから分かりもすが、会津の朝廷への影響力は看過できもは

ん」

会津公・松平容保はかつて、徳川幕府から京都守護職を拝命していた。かつて尊王攘夷思想が日本中を駆け巡っていた頃、京都の治安が悪化した。それに伴い新設された役職であった。火中の栗を拾うが如き苛烈な職だったが、松平容保は至誠を以って京都守護職を務め上げた。その至誠ぶりに、先帝孝明天皇は分を超えた待遇を用意して応えた。

確かに現在は薩長によって朝廷は固められている。だが、それはあくまで理と利による結束でしかない。未だ朝廷内には会津に対する親愛の情がある。これから帝を中心とした新国家を打ち立てるに当たり、朝廷内に未だくすぶるそれらの情はなんとしても挫かなくてはならない。そのようなことを西郷は言った。

「西郷殿、あと、もう一つ理由がありでしょう」

「ほう？」

頓狂な声を上げる西郷に向かい、大村は言った。

「西郷殿は、会津を見せしめにする心づもりなのでしょう？ 今般の戦において、国そのものが滅ぼされた例はありません。本来なら徳川家をそうするおつもりだった。徳川慶喜の首を刎ねて徳川家の血を絶やし、その城下である江戸を火の海にすることで、反乱を志向する者たちの意気を削ぐおつもりだったのでしょうか？」

西郷は何も答えなかった。

「が、どこかの誰かさんが勝手に“徳川は攻めぬ”と約束してしまったがためにそれが頓挫し、その矛先を会津に転じた。そんなところでしょ？」

痛烈な西郷批判である。勝海舟と会談し、江戸城無血開城を決めたのは西郷吉之助その人だった。つまり、この発言は西郷の江戸城無血開城の決断に対する当てこすりなのである。

が、西郷は言い訳一つしなかった。それどころか眉根一つ動かさない。鷹揚な笑みを崩さないまま、その場に立ち尽くしていた。大きな目だけが黒く輝く。

立ち込める不穏な空気。

だが、西郷はその空気の中でもなお、口を開いた。

「そんなところでござす」

居直った。しかも、笑顔のままで。醜惡な笑みを浮かべたままで。

西郷の低い声が辺りに反響する。

【7】

居直り。これほどやりにくいことはない。特に、大村のように理屈を武器として生きる人間であればなおさらだ。居直りというのは、理屈や道理から目をつぶる行為に他ならない。つまり、どんなに理屈や道理を説いたところで意味がない。理屈を積み上げて勝利図を描き、道理を貫いて将士を展開する大村益次郎にとって、居直られた相手に対してはまるで抗する手段が存在しない。

また一つ、西郷の強さを見たような気がした。

大村は話の方向を少し変えることしかできなかった。

「ま、それもこれも、“目の上のたんこぶ”を取り除いた後のことでしょうかね」

“目の上のたんこぶ”？ ああ、彰義隊のことでごわすか」

ち、とぼけたふりをしているくせに随分と分かっているじゃないか。肚の底で舌打ちをする。

西郷の話に出た“彰義隊”というのは、徳川家旗本の一部によって結成された武装集団である。徳川家による公的な集団ではない。旗本たちの有志によって作られた、表向きは上野寛永寺に蟄居していた徳川慶喜の警護を担っていた一団である。だが、徳川慶喜が蟄居の為に水戸に移ってもなお、彰義隊は上野の山に留まり続けた。

しかも、最近は江戸近辺の敗残兵や徳川家寄りの志士たちが参加し、既に隊は二千人を超えた。彰義隊は敗残兵たちの受け皿となつてしまったのである。

徳川慶喜の警護という目的を奪われた、数千人もの一団。しかも、敗残兵たちによって、旧式とはいえ銃などの武器も集まりつつある。その一団がどう行動するのか、誰にも分からない。どうやら徳川家旗本・勝海舟によって彰義隊への解散勧告が発せられているらしいが、その命に従う様子はないらしい。

「戦の準備をしもんぞ？」

「ええ」

十分あり得る。しかも、もし彰義隊と戦ということになれば面倒なことになる。もしも彰義隊が上野山から降りて江戸の町に火を放ったりしたら……被害は甚大なものになる。もしかしたら、江戸という一大拠点を失うという憂き目に遭う可能性すらある。そのようなことを許してしまえば人心が一気に離れる。それに、それではわざわざ無血開城にまで持ち込んだ意味まで無くなってしまう。もしも彰義隊を叩くのならばそれなりに準備が必要だった。江戸の町に被害を与えず、かつ彰義隊のみを叩く手が――。

「その際には、ご協力願います。総司令官殿」

「承知いたしました」

と――。

突然声もかからないままに部屋の戸が開け放たれた。

「馬鹿者！ 部屋に入る時は声くらい――」

「ご無礼失礼いたします！ 急告にございます！」

大村の言葉は入ってきた伝令によって阻まれた。伝令はその場に跪いて、大村に頭を垂れている。すまぬ、続けよ。そう促すと、伝令は顔を上げて怒鳴り散らすかのように言葉を放った。

「奥州鎮撫総督府下参謀の世良修蔵様、四月二十日、仙台兵により
おつしゅうちんぶそうとくふしもさたんぼう せいらしゅうざう せいらしゅうざう
拿捕！」

「な、なんだと!？」

大村は思わず机を叩く。

世良修蔵は、奥州鎮撫総督府における参謀役である。何より、世良は大村の旧知である。元々奇兵隊上がりである世良は、大村の兵法の薫陶を受けたと言ってもいい。それを抜きにしても世良は良い戦をする。奥州鎮撫総督府の同格に薩摩の大山格之助おおやま かくのすけなる者がいるが、これは大した男ではない。一度大村は大山格之助と話をしたことがあったが、もしも時代の乱気流によってここまで上ってきていなかったならば、恐らく一生を下級武士で終えているような男でしかなかった。事実、仙台での行軍の途上、軍を統率しきれずに自軍

兵卒たちの略奪・強姦といった乱暴狼藉を黙認しているらしい。そのような男が軍を率いている状況なのである。そういう意味でも、戦を良く知り軍略を知る世良は奥州鎮撫総督府になくてはならない存在であつた。

だが、その世良が仙台によつて拿捕された――？

何度も考えた。だが、何度頭を巡らしても、出る答えは一つだつた。

「仙台が、新政府に反旗を翻した――？」

奥州鎮撫総督府の参謀。つまりそれは新政府の、つまりは帝の代弁者に他ならない。その世良を拿捕したということはつまり、仙台が新政府に対し二心があるということだ。

「何と、ちよつしもた」

西郷も声を上げた。

その声が上がった頃に、また伝令が部屋になだれ込んできた。それから一刻ほどの間に、矢継ぎ早に何人も何人も伝令が入ってきた。細切れにやってくる情報たちは、緊迫する奥州情勢を語り出していた。

「二十日仙台兵により拿捕された奥州総督府下参謀・世良修蔵殿、拿捕の際に旅籠の二階から飛び降り、瀕死の重傷を負われた模様！
現在生死不明！」

「二十日仙台兵により拿捕された奥州総督府下参謀・世良修蔵殿、同日仙台・阿武隈川河川敷にて斬首！」

「奥州総督府下参謀大山格之助殿、仙台にて孤立！」

「奥州総督府下参謀大山格之助殿、仙台兵と戦闘！」

「奥州総督府総督・副総督・参謀三名、仙台兵に拿捕！ 軟禁の由！」

世良が死んだ。しかも、瀕死の大怪我を負っていたにも拘らず、あえて殺を下した。ただ殺すのならば、手当をやめればそれで死ぬはずにも関わらず。まるで弁明の機会も与えないまま問答無用に同日処刑。しかも、武士に与えられるべき名誉刑・切腹ではなく、斬

首。犬猫を殺すかのように。

未だ、世良が捕まった段階では状況が分からなかった。だが、仙台伊達家中による世良の処遇を仔細に検討すればするほど、事態が重大かつ深刻であることが鮮明になってくる。

仙台は、新政府に明らかな対決姿勢を示したのだ。

「なんということだ」

大村は頭を抱えた。

「ちつと、厄介なことになりもしたな」と西郷も口にした。「仙台といえば伊達政宗公以来の大家中。確か、石高は六十万石でございましたか？」

「ならば、実高は百万石を超えているでしょうな」

確かに伊達政宗公が神君家康公より知行を賜った頃には六十万石であつたろう。だが、それ以降も開墾に開墾を重ね、実際にはもつと田畑地は多いことだろう。基本的に農本社会である当時、石高はそのまま国力を指し示す指標となる。

「しかも」大村は続ける。「今、仙台は奥州の家中と盟約を組んでいるようです。元々は会津公の助命嘆願のための盟約らしいですがね。が、仙台が新政府に対して対決姿勢を露わにした。ということは」

「脅かしっこはなかど」悪戯っぽく口にしたつもりだったろうが、さすがの西郷も口のあたりが少し震えていた。「まさか総督殿、その盟約が、そのまま俺^{おい}どんの障害になると？ 他の奥州家中たちが俺どんに宣戦布告してくると言いもすか？」

「充分過ぎるほど考えられますね」

さすがに眩暈がしてきた。事がここに及んで、仙台家中を向こうに回す。しかも、他の奥州家中たちもそれに呼応しそうな雲行き。会津攻めどころの話ではない。新政府軍はこれより奥州を相手に戦わなくてはならない。

「しかも」大村は言った。「さらに事態は暗転するでしょうな」

その瞬間、また伝令が部屋に飛び込んできた。

その伝令の持ってきた情報は、決定打だった。

「奥州白河城、二十日夜までに会津により奇襲！ 同日会津軍により奪われました！」

「な……！？」

いかに西郷と雖も、驚愕の顔を隠せなかった。

だが、仙台が反旗を翻した時点で大村には成り行きの予想はついていた。

奥州白河。磐城国にある地域で、奥州街道沿いに立地する城下町である。古来より、奥州における守りの要として機能してきた。江戸時代には仙台の雄・伊達家や米沢の上杉の南下を警戒する幕府の思惑によって、譜代大名や親藩大名が白河を管理していた。慶応四年時点では白河城に城主はおらず、徳川家の直轄地となっていた。奥州街道に接している。その上、立地的に考えると白河は奥州の入り口であり、関東との境として機能してきた。奥州に攻め上ろうとするのなら白河は必ず通過せねばならない地である。そして奥州を防衛しようとするれば、接收・封鎖できればほぼ確実に敵の進軍を阻むことが出来る地である。新政府にとっても奥羽越の国々にとっても白河は要衝の地であった。奥州の喉元であると同時に、関東の急所にもなりうる。それが白河なのである。

だからこそ、奥州鎮撫総督府はいち早く白河城を接收した。

だが、その下参謀・世良が拿捕・処刑されたことにより、奥州鎮撫総督府の機能が麻痺した。その間隙を縫って、会津は白河を奪取し返したのであった。

「なかなか、面倒なことになりましたな」

大村の呟きに西郷は同意した。

「まこと面倒なことになりました。じゃっち、世良が殺されたのと同じ日に奇襲攻撃とは。仙台と会津が一脈通じていたとは思えもはんな」

「しかも、さらに面倒なのは」

大村は地図の上に指を踊らせた。その指先は奥州・白河を指す。

「もしも、奥州が旧幕府軍の残党どもと呼応し始めたらどうなるか。例えば、江戸の彰義隊と奥州の諸家中が同時に蜂起などしたら」

【8】

新政府軍は二正面作戦を展開するしか手がなくなる。無論、彰義隊と奥州各家中だけが相手ならば現在の兵力でも何とかなるう。がこの様を見た日本中の家中がどう行動するかは誰にも分からない。確かに新政府軍は西日本を既に支配下に置いている。だがそれは、新政府軍に風ありと踏んだ諸家中がこちらになびいているだけの事だ。もし風向きが変わったと踏まれれば、一気に情勢が変わる。

負けることはあるまい。が、この戦争が泥沼化することになる。泥沼化すれば、今は傍観に回っている西洋列強がどう動くか――。

二人して、固唾をのむ。本当に唾が固い。

「……大村どん、どうするべきでござすか」

「決まっています。白河を即刻奪い返すしかないでしょう」

「じゃっどん大村どん、現在各軍は関東の残党狩りに手を焼いている状況にござす」

それは大村にも分かっていた。敗残兵狩り。これほど神経を遣う戦闘はない。いついかなる状況で小競り合いが起こるかも分からない。ゲリラ戦のような様相すら呈するようになる。将の心算は鈍り、卒たちの士気は落ちる。現場から聞こえてくるのは、少しずつ、けれど確実にヒビの入っていく諸隊の様だった。そのような隊に、これ以上の命令を下すのは酷と言えた。

「ならば、江戸にいる控えの隊を分離して派遣するは如何でござすか」

「いや、いけません」

江戸には彰義隊がいる。千単位の隊。一個の家中並の兵力を有しているのだ。もちろん兵器においては雲泥の差はある。だが、数はそれだけで脅威となる。

それに、江戸は新政府軍の本営である。迂闊に兵を動かすわけにはいかない。護衛軍を空にしてしまい、結果として謀叛の遠因を作

つてしまった織田信長の例を引くまでもない。派兵して手薄になつてしまったところにどこかの家中が攻め込まれたりでもしたらひとたまりもない。

出来ることならば。

大村は齒噛みした。俺が行きたい。

要衝の戦ほど難しいものはない。必ずや激戦が予想される。凡将を派遣するわけにはいかない。いや、大村からすれば、どの将とて凡将でしかない。自分以上に信頼に足る将はいない。それに、関東中にいる敗残兵たちの処理に追われているこの状況では追加派兵も難しい。戦力の逐次投入の愚は避けたい。だからこそ、自分の目で白河を見、自分の軍略で白河を奪い返し、自分の手で奥州軍を駆逐したかった。

だが、それは状況が許さない。

あくまで大村は新政府軍の総司令官なのだ。おいそれと最前線に立つてはならない。それは大村の本分から外れる。大村の役目は各戦線の兵站の確保にあり、そしてその兵站確保の為の江戸防衛にある。そして、戦を大局的、総合的に判断する任務がある。

ならば。

西郷は言った。

「あの男に動いてもらうしかない」

「あの男？」

頷いた西郷は、地図の上の一点を指した。

「あの男は今、宇都宮を落としたところと聞きもす。白河からも近か。とりあえず、あの男を向かわせるが良かど」

宇都宮を攻めている男？

にわかには思い出せなかった大村は、机の上に山積みになっている紙束を拾い上げた。現場から寄越される報告だ。一枚一枚めくり、宇都宮方面の報告を探す。

「あの男は」西郷は言った。「俺が一番戦で頼みにしている男でござす。いや、薩摩の戦において、これまで何度も薩摩を勝ちに導い

てきた男でござす」

薩摩の巨魁・西郷をして、「一番頼みにしている」「薩摩を勝ちに導いてきた」と言わしめる男。

不意に大村の手が止まった。宇都宮の報告にまで行き着いたのだった。

そして、その報告に書かれていた参謀の名前を、大村は読み上げた。

「伊地知竜右衛門」

ああ。

大村は思い出した。鳥羽伏見の時に会った、独眼で短身痩躯、杖をついて歩く男。目の前で見せられたあの素晴らしい用兵。あの軍はまるで伊地知の手足のようだった。そして、死を恐れぬが如き呐喊兵と正確無比な鉄砲隊。長州の奇兵隊とはまた違う強さを持つ軍の主。

「しかし――。伊地知軍も宇都宮を陥落したばかり。疲弊しているのでは？」

「心配ありもはん」西郷は言い放った。「薩摩兵は疲れを知りもはん。それに、宇都宮の城を落としたばかり。恐らく士気も上がつておいもそう」

薩摩の大將・西郷吉之助が問題ないと言ったのだから、問題あるまい。

ならば。

大村と西郷の肚は決まった。

伊地知竜右衛門の率いる一軍を、白河に派兵する。

最善の手だろう。大村は何度も自分に言い聞かせた。

そうして自分を納得させながら、大村は自分の目の前にいる敵の事を考えた。

上野寛永寺に潜んでいる、幕府の残党ども。

そして、英雄面をして今この場に立っている、俗悪なる巨魁を。

「おや、如何し申した大村どん。怖か顔をして」

「いえ。彰義隊をどう始末しようか考えていたところです」

大村は今居る江戸城から、上野の山を望んだ。そして、さらに向こうに控えている白河の地を睨んだ。

宇都宮に本営を構える伊地知軍に、江戸からの命令が届いたのは慶応四年、四月の二十四日のことであつた。

その日は雨であつた。この時期には珍しい、しとしとと長く降る雨。その雨に身を濡らしながら宇都宮城に入る伝令は、司令官への取次を望んだ。「江戸からの命令！」　そう伝令は叫んだ。

伊地知軍副官の一人・川村与十郎は、その江戸からの命令に接した瞬間、我が身の血が全て逆流したような錯覚に襲われた。それだけ、その命令に含まれている情勢が深刻だということだった。

その命令書に曰く――。

“仙台家中が我々に反旗を翻し”

“会津家中、仙台家中と協調を取りたる由。他奥州家中も会津、

仙台に同調せし可能性”

“会津・白河を落とす候”

これは――。

元々長崎にあつた幕府の海兵養成機関・長崎海軍伝習所にて諸学を学んだ経験がある上に薩摩という戦慣れた家中にその身を置いていた川村からすれば、その命令書に書かれていた内容が痛いほど分かつた。

これは、とてつもないことにござす。

伝令兵から命令書を受け取つた川村は、鬼の形相で宇都宮城の二の丸御殿内を駆けた。通りすぎる士卒たちの会釈に応えもせず、眉を吊り上げてドスドスと歩く川村与十郎に声を掛けることが出来る者などいなかった。

ドスドスと歩きながら、川村は己の上官を探す。
と――。

キエエエエエエ！

猿のような絶叫が庭の方から響き、川村の耳に至る。

この声に聞き覚えがあった。これは薩摩に伝わる剛剣・野太刀自顕流に独特の掛け声だ。ひととき大きな甲高い声を上げて太刀を振り下ろして敵を打つを極意とする、あまりに粗野である当流は島津家当主にさえ疎まれていたこともあった。だが、その野太刀自顕流に育てられた川村からすれば、その声は子守唄のようなものだ。

誰か、自顕流の鍛錬をしちよつか。こん雨の中に。

感心なことと思いながらも、川村は歩みを止めない。

やがて川村の足は表の庭が見える廊下にまで達していた。南向きの廊下からはどんよりと雲の広がる良く見えた。手入れの行き届き白砂が敷き詰められた庭が、少しくすんだ空の色を写して目の前に広がっていた。

だが、その庭に、明らかにその雰囲気から浮いている異物が置かれていた。

巻き藁。しかも、一般に使うものよりも太めに作られている。普通巻き藁は人の腕くらいの太さで作るのを基本とする。だが、そこに置かれていた巻き藁は人の胴くらいの太さはある。しかも、その巻き藁は一つや二つではない。既に斬り伏せられているものも含めれば、十はある。立っている巻き藁は二つ。それ以外は真つ二つにされて地面に転がっていた。

そして、転がる巻き藁たちに埋もれるようにして、男が一人立っていた。

短身痩躯だとばかり思っていたが、それは川村の勘違いだった。背は低い。だが、上着をはだけて立ち尽くすその男には肩から上腕にかけて隆々とした筋骨が認められた。無駄のない筋骨。そして、隙のない立ち姿。

思わず川村は足を止めた。声を掛けようかとも考えたが、そんなことはとてもできなかった。あまりに男の放つ気が恐ろしすぎて、声を掛けることさえ叶わない。

自然体で立ち尽くしていながら、巻き藁の前に立つ男は実に鋭い

殺気を放っていた。

そして、ある刹那、男は動いた。

キエエエエエエ！

えんきよう

猿叫。そしてそれと共に腰の刀から刀が伸びた。一步も踏み出すことなく腰にあった刀を引き抜いた男は、そのまま巻き藁に向かつて繰り出した。下から上へと伸びる剣閃。その技の形を知らなければ、川村もその剣閃を目に捉える事が出来なかっただろう。

あれは“抜き”ではなかか？

川村は心の中で叫ぶ。

“抜き”とは野太刀自顕流に伝わる抜刀術である。刃を上にして差している刀を左手の手内で逆転させ、鞘から抜き放つや下から上へと振り払う技である。本来ならば右足を強く踏み出したうえで背中の筋肉から足の筋肉までを一体にして抜き放つ。野太刀自顕流において、熟練者のみが学ぶことのできる技である。

だが、今、川村の目の前にいる男の“抜き”には右の踏み出しがない。足を一切踏み出さず、背中の筋肉のみを刃に乗せているようであった。野太刀自顕流を知っているものからすれば、とんだ修行不足の剣である。

だが――。

男の目の前にあった巻き藁にピツと髪の毛のような筋が入った。その一瞬後に、その筋を境にして巻き藁の上半分がズズと滑った。ぼろっと巻き藁の上半分が地面に落ちた。そして巻き藁が音を立てて地面に落ちた頃には、男の刀は既に鞘に収められていた。そして、もう一つの巻き藁も、雨に濡れた地面にどさりと落ちた。

何度見ても、恐ろしか腕じゃ。

川村の言葉にならない言葉が心中にこだまする。

そうやって何も言えずその場に立ちつくす川村を嘲笑うように、巻き藁を切り伏せた男はのっそりと振り返った。

「おお、与十郎。俺の太刀筋を見ちよったんか」

左目に眼帯をはめるその男。西洋風の軍服を支給されているとい

うのに、この男は実際の戦場以外では和服を身につける。この時もそうだった。はだけさせていた袖に腕を通しながら、その男、伊地知竜右衛門は言葉を重ねた。

「どうも戦の指揮ばかりじゃと、腕がなまりもす。薩摩隼人たるもの、将帥と雖も一兵卒ではなか？」

「実に、その通りにござす。——と、伊地知どん」

「ん、何やあつたんか？ 言うてみせ」

「大変なことになりもしたんでござす、伊地知どん！ 実は」

川村与十郎は江戸からの伝令を読み上げた。奥州鎮撫総督府の事実上の長・世良修蔵が仙台によって処刑されたこと。これを以って、奥州鎮撫総督府は事実上その命令系統が破綻してしまったこと。仙台が新政府に対して対立姿勢を露わにしたこと。会津が白河城を占領したこと。これらの情報から、奥州全体が新政府の敵に回ってしまったこと……。

面倒な状況には違いなかった。もともと関東の鎮撫だけでも苦戦しているところだというのに、ここにきて奥州まで反旗を翻したとなれば、北関東・宇都宮にとりあえず本営を敷いている伊地知軍は敵の目と鼻の先に陣を置いていることになる。しかも、江戸の大本営はさらに伊地知軍にさらなる命令を下してきた——。

「しかも、俺どんに白河城の奪回を命じて来ておいもす。江戸の本営は何を考えとうでしようか？」

その川村の言葉には明らかに怒気がこもっていた。当然だ。ようやく数日前、宇都宮城を奪回したばかりなのだ。その軍に対し、さらなる転戦を命じるなど——。

だが、伊地知は朗らかにその川村の怒りを笑い飛ばした。

「面白かちゅう事じゃなかか？」

お、面白か事？ 思わず川村は耳を疑った。今の状況はとても面白いなどと形容できる状況ではない。難しい戦がさらに難しくなったようにしか思えない。

だが、伊地知は笑みを浮かべたままで聞く。

「そんな命令は誰のもんだ？」

「西郷さん、大村益次郎二人の名前になっておいもす」

「ほう、西郷さん、大村どの……」

【9】

「大村益次郎ちゅうと、この前の大坂城ん時、しくじっちゃった奴じゃあ……？ あんの戦下手に何が分かるちゅうんです！」

川村与十郎はかつて大村と邂逅している。大坂城接収の途上に大村率いる長州軍が敗残兵と小競り合いを起こしていた時、川村は伊地知軍の副将として大村軍の助太刀に入っている。あの無様な戦振りを見ている川村としては、大村が西郷吉之助と並び総司令官などという大役についていることからして到底納得できなかった。

だが、伊地知は言った。

「そやア、違うな」

「へ？」

“大村どんが戦下手”というところだ。あの時大村どんは確かに無様な戦をしちよった。じゃっどん、戦ちゅうのは何が起こるか分からん。もしあれが俺だとしても、同じこつになっちゃった」

「そいどん、伊地知どんは違いもす！ 伊地知どんは薩摩が誇る名軍師でござす！ あんなことにはなりもはん」

川村の熱っぽい言葉に、伊地知は呆れ半分に頬を掻いた。

薩摩の中で、伊地知竜右衛門はかなり特殊な立場を有していた。

元々伊地知竜右衛門は神童として知られていた。曰く、三歳のころに漢文を読み上げることが出来たという。後々の成長が大いに期待されていたが、子供の頃に罹った流行病によって左目失明、右足の不随という後遺症を負ってしまった。だが、その逆境が伊地知の智の刃をさらに鋭いものにした。薩摩に伝わる兵法、合伝流の門をたたき、師匠より奥義を伝授されるまでに学んだ。そして、この男は剣の修行も怠ることはなかった。動かぬ足を引きずりながらも立ち木に刀を振り続けるうち、薩摩の剛剣・野太刀自顕流さえも自分のものとした。だが、伊地知が輝いたのは己の智を用いた場であった。

生まれた時代が良かったとも言える。平時には何の役にもたたない兵法の奥義を極めた伊地知。まさに乱世向きの男であった。幕末という乱世の中で、薩摩は何度も戦場に登場した。そしてそれらの戦の殆どに、参謀として伊地知は参加していた。合伝流お家芸の鉄砲隊を中心とした戦立ては、外国から輸入された新式銃と相性が良かった。

そんな伊地知に用意されていたのは、薩摩の巨魁・西郷吉之助の軍事的な右腕という役割と、薩摩の将帥たちへの教育だった。伊地知の手ほどきによって兵法を学んだ者は多かった。川村与十郎とその一人である。後の事になるが、後に勃発する日清戦争・日露戦争で活躍する薩摩系の司令官たちのほとんどは、伊地知の兵法によって育っている。

まあ、良か。

そう呟いた伊地知は言った。

「なるほどなあ、道理で大田原で旧幕府軍が悪戯をしじあと思っていた」

大田原とは宇都宮の北に位置する都市で、奥州に隣接する地域である。奥州街道沿いにあり、丁度奥州と接している。つまり、奥州が敵に回った現在、敵との“国境線”に当たる地域である。

数日前より、旧幕府軍が大田原にて示威活動を重ねていた。とりあえず一軍を派兵して鎮圧に当たらせていたところであった。伝え聞くところだと、いやがらせのように挑発してきては小競り合いを起こしているらしい。もっとも、この段階ではほとんどその軍は追い払っていたが。

「新政府軍に対する掣肘せいちゅうのつもりでもんそ」

履物を脱いで廊下にあがった伊地知はふう、とため息をついた。

「それに、実は世良殿から救援要請がきちよった。まあ、断つてしまたが」

そう、数日前に世良から奥州への救援要請があった。だが、当時伊地知軍は宇都宮城を奪った直後であり動くに動けなかった。つま

り、伊地知軍は事実上世良を見殺しにしてしまったということになる。

雨雲の垂れこめる空を見上げた伊地知はぼつりと呟いた。

「また、あの着馴れん洋装に身を包まなくてはならん」

洋装に？ それはつまり――。

川村の予想は的中した。

「兵を進めもんそ、与十郎」

味方。そして軍学の先生。それどころかこの軍の最高責任者。その伊地知竜右衛門が、なぜか川村の心胆を寒からしめている。辺りの空気がビリビリと揺れる。まるで伊地知の言葉は竜のいななきのようだった。

その日のうちに、伊地知竜右衛門は動いた。

一大拠点・宇都宮を失うわけにはいかない。全軍を出撃させるわけにはいかなかった。そこで軍を分割することにした。薩摩のほかには他家中からの兵による混成。主将伊地知竜右衛門、副将川村与十郎。宇都宮に主戦力を残し、わずか二五〇の兵が奥州街道を上り、北に控える白河を目指した。

雨の中の進軍であった。

雨の進軍はどうしても士気に障る。

しとしとと降り続く雨は元々軍から士気を奪う。その上、突然決まった進軍である。その上様々な家中の者が混じった混成兵团である。そもそも、意思の疎通さえ怪しい。見るに見かねた川村が「トントコやれ節」の音頭を取っても、まばらな歌声しか返ってこない。だが、その中でも伊地知はなぜか楽しげだった。

ずっと続く田。その真ん中に奥州街道がまっすぐ伸びている。少し西日本よりも田植えが遅いようで、植えられている稲は未だ背丈が低い。が、雨が田に張られている水に無数の波紋を作っていた。その様を見つめながら、伊地知はゲコゲコと蛙の鳴き真似をしていた。そのしじまに、「いやあ、綺麗な水田でこわすなあ」と緊張

感の欠片もないことを言い放っている。

川村は横の伊地知に困惑顔を向けた。

「い、伊地知どん、こんなんで戦が出来もそうか？」

この言葉には、緊張感の感じられない伊地知に向けた皮肉もあった。

だが、伊地知はその問いに答えなかった。「うむう、やはり洋服は性に合わんな」などと、薩摩揃いの軍服の袖をつかみながらぶつぶつと言っている。ちなみに伊地知は長い距離を歩けない。そのため馬にまたがっている。あまり歩けないのにどうして馬に乗れるのか、川村にはその理由が分からない。

伊地知どん！ もう一度声を掛けてようやく伊地知は川村に向いた。

「ああ、聞こえとうよ。お前はんの問いに応えてやりもんぞ。……まあ、無理だろうな」

「な、戦う前から何をおっしゃりもんそか！」

じゃあなぜ江戸からの命令に対してその日のうちに行動したのか分からない。こんな強行軍を組んで進軍することなどないではないか。

「不思議そうな顔をしじあなあ、与十郎」

「当り前にござす！」

この出撃の命令を聞いた瞬間、川村の胸に掠めたのは“奇襲攻撃”という策だった。白河城が陥落したのが四月の二十日。つまり、まだ四日しか経っていない。もちろん既に会津兵が白河城に入城しているだろうが、効果的な防衛陣は構築できていないだろう。

それに、白河城は南からの攻撃に弱い作りになっていると聞く。

元々白河城は、南下してくると想定された東北諸家中を睨んで構築された城である。それがために、味方を引き入れやすいように南から入城しやすいようになっていると聞く。逆に、北側に幾重にも防御線を敷いている。そして、今回の伊地知軍は南から白河城を攻める形となる。

さらに言えば、白河城は平山城だ。山の上に築かれた山城とは違い、主要部分しか丘の上に築かれていない平山城は鉄砲や大砲にすこぶる弱い。これまでは太平の世であつたがために露呈していなかったが、日本にあつた城のほとんどはこの時代には殆ど無力化していたと言つても過言ではない。いくら門を堅牢に閉ざし、火縄銃を狭間から突き出したところで、その頭上を飛び越えて銃撃の嵐や砲弾の雨あられを降らせることが出来るのだ。

それらの状況が示すのは――。

白河に敵方の人員が補充される前に奇襲攻撃を仕掛ける。数では劣るだろうが、最新鋭の銃砲、そして精強なる新政府軍で叩けば撃破出来ない相手ではない。むしろ、攻撃を延期すれば、交通の要衝白河の重要性ゆえに奥州の兵たちが集まってしまう。

それに、そもそも一度こちらが獲つた城を奪われてむざむざ首をくわえて待つているなど、薩摩隼人の端くれである川村には承服しかねることだった。

「与十郎、ちつと考えてみい。たかだか二五〇で戦は出来ん」

「じゃつどん伊地知どん。そげなこつでは……」

「与十郎」

伊地知は涼しげな顔を川村に向けた。武骨な顴で左目を隠す独眼竜は、その片目に川村の事を捉えていた。決して睨みつけているわけではない。だが、いつも伊地知にこうして見つめられてしまうと何も言葉を返すことが出来なくなる。蛇に睨まれた蛙の如く。

「こん戦、一筋縄ではいかん」

「い、いけんいう意味でござすか」

だが、伊地知は多くを語らなかつた。代わりに、青々とした苗が続く田んぼを指しながら一言こう言つのみだった。

「田ンボは怖かところぞ」

「怖かところ？」

首をかしげる川村。延々と続く田園風景の何が怖いというのか。
「それに」

「それに？」

伊地知は思い出し笑いのように、肩を少し震わせながら口を開いた。

「この戦、面白か戦ぞ」

その言葉の意味を聞こうとした川村だったが、問いを重ねようとした前に伊地知を呼ぶ声が二人の間に割り込んだ。

川村と伊地知の前に現れたのは斥候兵であつた。

その斥候兵は軽く頭を下げて伊地知に報告した。

「白河の民たちの協力が得られませぬ！ 皆先導を断つて参るありさまで！」

「そいか。下がつて良か」

斥候兵は頭を下げて二人の前から姿を消し、二五〇人の中に紛れていった。

こういつた遠征軍の場合、何とかして地元民の協力を得るのが基本である。どの地域にも機を見るに敏な者はいるし、あるいは現行の政治に文句がある者もいる。そういつた、敵方からすれば“不穏分子”でしかない連中を上手く用い、先導役とするのである。

伊地知はため息をついた。

「まあ、強行軍では先導役の確保が難しかこつは分かちよつたが……」

「まったく、なんと無明^{むみょう}な連中！」川村は語尾を荒げた。「朝廷の御威光に従わぬとは何たるこつ！」

不意に伊地知は鼻を鳴らした。

「そげなもん、腹の足しにもならんからなあ」

「じゃつどん、伊地知どん！ おいたちは天下最強の薩摩軍にござす。如何に敵が多かるうが、おいたちの武は負けもはん！」

「その“天下最強の薩摩軍”なるもんも、この辺りの民にとっては腹の足しにもならん」

ぴしゃりと言つてのけた伊地知を前にして、川村が文句を口にするわけにはいかなかった。仕方なく、心のうちでやり切れない思いを咀嚼する羽目になった。

と――。

「川村殿、伊地知殿！」

二人の前に兵が一人歩み出た。隊列を少し乱しながら前に出たその兵は、どうやら薩摩者ではないらしい。言葉の端々に薩摩のものではない訛りが混じる。

腹立ち紛れに川村は怒鳴る。

「持ち場を離れうのじゃなか！」

「お待ちください！　今、先鋒がこんな立て看板を見つけました」
「立て看板？　ほほう」

伊地知は身を乗り出した。川村ではなく伊地知に向かって頷いたその兵は、背中に隠していたものを伊地知に向かって掲げた。

真新しい板に墨で大書されている立て看板。雨に濡れてはいたが、黒々とした文字ははつきりと読むことが出来た。その立て看板には
「此れより会津に候」

そう、書かれていた。

ここは未だ関東の大田原である。会津の勢力下どころか、白河の勢力下ですらない。そんなところにある会津の所有権を主張する立て看板。つまりこれは、白河城陥落後――つまりは奥州が新政府に反旗を翻した後――に取り付けられたものだ。

「おのれ会津！　薩摩を愚弄すうとは、許さあぞ！」

「落ち着け与十郎」

「これが落ち着かずにはいられますか！？」川村は伊地知に食ってかかる。「あの逆賊ばら、空城一つ落とすくらいで調子に乗いやがつて！」

「与十郎」

伊地知は馬の上から同じく馬に乗る川村の肩を叩こうとしたものの、川村は身をよじってその手を振り払った。眼を血走らせながら伊地知に向いた川村は、がちがちと歯を噛み合わせながら息を吐いた。

「俺はもう我慢なりもはん！　白河を今すぐ落としもす！　鉛の雨

を雨あられと降らせてやりもんぞ！」

もともと、白河城を奪われたことからして面白いことではない。しかも会津のみならず奥州の各家中までもが会津に肩入れして新政府と対峙することとてたまったものではない。その上白河の民たちは朝廷の威光に従わない、さらには傍若無人なこの立て看板は何だ――。元々短気な川村の堪忍袋の緒は、既にズタズタに切れていた。赤鬼のような形相の川村。立て看板を持ってきた兵もその川村の怒気に触れるや、恐れをなして下がっていつてしまった。

「頭を冷やせ、与十郎」

「なして伊地知どんはそげに心静かでいられるのでござるか！？もう俺は我慢出来ん！伊地知どん、俺に一軍を与えてくいやんせ！百で良かどから！」

川村には自信があった。薩摩兵の百は他国兵の千にも二千にも匹敵する。日の本一の機動力、日の本一の火力、日の本一の白兵、日の本一の胆力を持った薩摩軍が火の玉となれば、万の軍とて恐るるに足らず。事実、川村が見てきた戦のどれもがそうであった。エゲレスと戦った時にはさすがに兵器の性能に雲泥の差があり負けてしまったが、エゲレスの軍学を学んだのちに薩摩の負けはなかった。数に勝る徳川軍を新式銃で駆逐した。軍船で逃げ帰ったかつての征夷大將軍を追い、あと一步のところまで追い詰めた。甲州では旧幕府軍の残党たちを者の数ともせず撃破した。そして江戸の陥落後には関東を転戦して逃げる敵を追ってきた。

その薩摩兵たちが、負けるはずはなか。

川村にはそんな意識がある。

荒れ狂う奔流のような激情を隠さぬままで、川村は伊地知を睨みつける。視線で射殺そうとしているかのようにであった。ともすれば、伊地知の事を斬り殺さんと息まいているようにさえ見える。

だが、伊地知はその視線をものとしなかった。まるで子供の駄々に呆れるかのようにそっぽを向いていた。だが、何度も「伊地知どん！」と川村にせつつかれるうちに、ふうとため息をついた。

「……ああ、良か。ただし」

「ただし？」

「百五十。百ではなく、百五十を与ゆ」

百五十？ 川村は思わず顔をほころばせた。自分の言った数字よりも、五十も上乘せした数を与えてくれた。しかも、この伊地知軍において百五十とは全体の六割にも当たる。つまりは主軍を与えられたということだ。これらの事実が示すもの、それはつまり、伊地知が川村の戦略を追認したということに他ならない。

「あいがとごわす！」

頭を下げるや川村は馬をあおった。甲高くいなないた馬は川村の手綱さばきの通りに兵たちの脇に踊り出、兵たちを一人、また一人と抜いて行つた。

だが――。

「ちつと待て！」

伊地知に呼び止められた。

走り出さんとする馬の手綱を引いて、川村は伊地知に向いた。

「なんでごわすか伊地知どん」

「一つ、約束をしていけ」

「は、なんでもすか」

「たつた一つ、簡単なようできて難しかこつだ！」伊地知は声を震わせた。「かならず生きて帰つてきもんせ！ 何があつても生きて帰つてきもんせ！ 分かつたな！」

出撃前になんという縁起でもないことを――。

だが、それを口にしたのが伊地知竜右衛門だったということが、川村の心中に暗い影を落とす。己の軍略の師が自分に何を伝えようとしているのか、川村にはさっぱり判り兼ねた。

じゃっどん、いくら考えても分からんものは分かりもはん。

自分の心に忍び込んでくる弱気。頭を振ってその弱気を振り払つて、川村は伊地知に言った。

「出撃しもす」

蹄の音を高々と鳴らしながら、川村与十郎は行軍の最前列にまで飛び出した。そして百五十を本隊から切り離し、その行軍速度を少しずつ速めていった。稲妻のような川村の命令に身を震わせた兵たちは、川村の言葉のままにぐんぐん行動速度を上げていく。

それはそれで川村の用兵である。あまり士気の上がらなかった兵たちを怒号一つであれほど苛烈に動かす。川村には将たる器があるかもしれない。

じゃっどん。

伊地知はのんびりと口にした。

「将たるには、ちつと思慮が浅いかもしれん」

伊地知將軍！ 呼び声に、伊地知は向いた。そこには兵の一人、百人を束ねる士、小隊長が立っていた。

「我々は如何します？ 川村將軍と共に参りますか」

伊地知はへらへらと手を振った。

「その必要はありません。我々は別働しמוש」

「ハッ！」

「ただし、川村軍につかず離れず行軍しもんそ。行軍疲れせん程度にな」

ふう、とため息をついた伊地知は空を眺めた。いまだ霧のような雨が降り続いている。天下には未だあまねく日が降り注がない。仕方がないことだ。それに、この厚い雲を払い、日本中にあまねく日の光を注がせるのが政府軍の任務だった。徳川幕藩体制という、厚く暗い雨雲を。

そういえば。伊地知は小隊長に声を掛けた。

「いつ頃、俺どんは白河城に到着しもんそ？」

【11】

「そうですねあ」小隊長は空を眺めしばらく目を宙に泳がせてから、慎重に答えた。「明日、二十五日の早朝といったところでしょいか」

「そか、あいがと。……下がって良か」

小隊長を下がらせてから、伊地知は呟いた。

「正と出るか、奇と出るか。こればかりは分からん」

伊地知の独眼は、遠く白河に向いていた。

3

一方その頃、白河。

白河も雨の中に沈んでいた。その白河の中央に位置する白河城。

晴れの日ならば白の漆喰が美しい白河城だが、雨の中にあつてはくすんだ色を見せるばかりだった。

くすんでいるのは風景だけではない。人の心もくすみ始めている。「薩摩の兵たちが攻めてくる」

その情報に白河城下は揺れに揺れている。町人たちは戦火を恐れて家を棄て始めている。平時の白河城下は奥州の玄関口ということもあつて旅人たちで賑わう。だが、旅人で賑わうはずの白河城下には槍や銃を持った兵たちが慌ただしく行き来している。町人たちの持つ極彩色が姿を消し、代わりに武人の持つくすんだ色合いが白河を支配しようとしていた。

白河城を北に背負う丘の上では防塁の準備がなされていた。町人たちが棄てた家の畳をひき剥がし、家に残された箆笥を二人がかりで運んで障壁を作っていく。

その丘の上に、会津預かり・山口二郎やまぐち じろうが立っていた。己の率いる仲間たちに防塁の設置に関してあれこれと命令を下しながら、遠く関東を睨みつける。山や丘の向こうに控える関東。既にほとんど政府軍の手に落ちてしまっていると聞く。確実に政府軍はここを攻め

てくる。山口の野生の勘にも似た軍略眼はそう告げている。

この男、只者ではない。

元は江戸の御家人という。だが、諍いにより人を殺してしまったことから逃避行、たまたま草鞋を脱いだ京都で同じく武州の浪人・近藤勇らと知己となる。そして、そのまま近藤の世話になり、近藤たちが作り上げた京都治安維持部隊・新撰組に入隊する。

そして時は流れに流れ、怪我により戦列から退いている土方歳三に代わって新撰組の残党を取りまとめ、会津に身を寄せているのであった。

いや、それだけではこの男の紹介には足りない。

この男、新撰組時代に斎藤さいとう一いちと呼ばれていた男である。

新撰組という組織は極めて“身内”の意識が強い組織であった。近藤の股肱の仲間や同郷たちで要職を固められていたと言ってもよい。その中に在って、京都で知り合った言わば外様の山口二郎（斎藤一）は副長助勤などの要職を歴任する。その裏には、斎藤一という男の剣腕があった。

この男は強かった。「これがこの前何処そこで手に入れた刀剣云々」と、普段は刀漁りの趣味と刀剣談義を暇そうにしている新撰組隊士を捕まえてはとうとうと仕掛ける男だったが、いざ実戦となるとこの男は強かった。恐らくは新撰組の隊士たちの中でさえ、この男とまともにやりあえる者は少なかっただろう。

それに、何より任務に対して忠実であるその姿勢が近藤たちに愛された。或る時など、間諜という難しい任務を与えられながら、敵に気取られることなくその大役を果たしている。

だが、その近藤ももういない。

下総流山で布陣中、囲まれた際に敵方に投降したきり、何の音沙汰もない。

恐らくは身分がばれたのだろう。山口はそう思っている。

新撰組の近藤勇といえば、京では知らぬ者がない。薩摩・長州・土佐の者たちの中にも近藤の顔を知っている者も数多くいよう。そ

れに、新撰組はあまりに恨みを買いすぎた。恐らく、“新撰組局長”という身分がばれたら生きては帰れまい。

思えば、既に色々な仲間と生き別れた。

京の新撰組屯所で笑い合った連中のほとんどは、もうここにいない。ある者は死んだ。ある者は病氣にて戦列から離れた。またある者は袂を分かつて去っていった。

まあ、いい。

それでも戦える。

山口は後ろに控える新撰組隊士たちを見やった。関東で負けに負けてきたにもかかわらず、隊士たちの目には未だ狼のような獣じみた士気が宿っている。部下たちの士気に背中を押されるようにして、山口はまた関東に目を向けた。

山口が今着陣しているのは、白河城下から南に数里のところにある、白坂口である。やはり奥州街道沿い。白河は盆地の中にある。

元々平野ではない。小さな丘や山が林立している。平山城の白河城に籠っているばかりでは戦にはならない。結局白河城を守ろうと思えば、点在する丘や山に兵を置き、それらの兵を有機的かつ効率的に用いる必要がある。城の周りにある小山たちすらも防衛陣に加えるのだ。その点において、同じく白河城に入った会津の青龍隊も同意見のようだった。会津の壮年武士によって構成された青龍隊の中には戦に明るい者もいるようだった。「白河防衛は、ただ白河城を守るのみにあらず」。山口の提案に対し、青龍隊は同意を示した。

青龍隊のその言葉には、別の意味もあるらしい。

白河城は城の南に城下町がある。なので、ただ籠城してしまうと城下町がすぐ火の海となってしまう。南から侵攻してくる政府軍は、白河の疲弊を狙い城下町に火を放つだろう。そしてその火は容易く城にまで移ってしまうだろう。それは何としても防がなくてはならない。防衛線を広げ、城下町に敵兵が入らないようにしなくてはならない。

それに、数の利もあった。

白河城接收の際、会津は大規模な戦闘を予想していた。奥州鎮撫総督府の世良が死んだとはいえ、将兵たちが白河城を死守してくると踏んでいた。だからこそ、以前から計画のあった白河城奪取を、世良の死の間隙について行なったのである。

だが、意外にも白河城接收に伴い大規模な戦闘は起こらなかった。そもそも、奥州鎮撫総督府なるものの兵力はさして多くなかった。世良や大山などの下参謀についていた直属の兵は千にも満たなかった。奥州鎮撫総督府によって接收されていたといえば聞こえは良かったが、結局のところは総督府によって命令された仙台などの家中が白河城を接收していたのだった。

が、世良が死んで奥州鎮撫総督府が崩壊したことにより、白河城に入っていた仙台兵たちが撤兵し、ほとんど空城となっていた。その城を、会津兵が接收した。これが「白河城陥落」の実情であった。戦うつもりで進軍したものの何も戦闘が起こらなかったという肩すかしはあったが、おかげで兵力はかなり与えられている。会津兵、千。これならば、城に頼らずとも籠城が出来る。防衛線を広げることが出来る。

しかもこの雨。

山口は空を睨む。振り止む気配のない雨。

そして、山口ら新撰組の眼下に広がる田園風景もまた、こちらの地の利を告げている。まっすぐのびる奥州街道の両側に広がる田園。そしてその田園の海にぽっかりと浮かぶ丘や小山。

戦える。

山口は既にそう踏んでいる。

さらには、放った斥候からもたらされた情報も、こちらの有利を示している。

敵軍の数、二五〇。

はつきり言って、“ たった ” である。こちらの陣容千に比べ、はるかに少数。こちらの一部隊程度の兵力で、敵軍は千を相手に戦を張ろうとしているらしい。最初は斥候や先発隊かと疑ってもみたが、

斥候のもたらず見解はまったく違った。確かに先発隊かもしれないが、向こうが後続を期待している気配は無い。まるで敵軍を追撃しているかのような勢いで、白河に向かって進軍してくる――。

この状況が示すもの。

その先発隊は、後続を待つつもりがない。迅雷の如くに進撃、虚を突いて勢いで白河城を奪いに来る手はずを取っている。

「はは」

山口は思わず声を出して笑った。

「それが奴らの戦か」

なんと愚かな戦振り。なんと思慮のない戦振り。

確かに薩摩たちの武装とこちらの武装は比べるべくもない。会津兵の中には、戦国の頃に活躍していた火縄銃を抱えている者の姿さえある。片や向こうは元込め五発連射式の新式銃を装備していると聞く。しかも精度・威力ともに桁違いと来ている。

鳥羽伏見ではその兵装の差で泣きを見たが、この時ほど薩摩の最新鋭の兵装に感謝したことはなかった。

油断しているな。

それが、山口二郎の下した結論だった。

敵が斥候を放っている様子もない。いや、放っているのかもしれないが、その斥候の情報を活かそうなどという気はないらしい。でなくば、大田原から白河まで、あんな苛烈な進軍はしない。事を構えるに当たり情報を集める気ならば、時間稼ぎの意味もあってもう少しゆつくりと進軍してくるだろう。敵の進軍は、こちらの喉笛を引きちぎらんとする意図が見え見えた。

だが、そんな粗雑な戦が出来るのは大軍が小さな城を落とす時くらいのものだ。寡兵で出来る戦ではない。どうやら薩摩兵の連中は、ここに死にに来るつもりらしい。

「な、何が可笑しいのです？ 局長代理」

後ろに控える新撰組隊士・中島が山口に声を掛ける。すると山口はくるりと振り返り、新撰組隊士たち皆に向かって言葉を投げ放つ

た。その大音声は普段ぼそぼそと喋る山口にはない覇気があった。それがゆえに、山口の言葉は辺りに響き渡った。

【12】

「新撰組隊士！ よく聞け！ これから敵がここを死地とも知らずに飛び込んで来る！ 数は二五〇。新式銃を持っているだろうが、物の数にならん。将の首を取るぞ！」

オオ！

その言葉に新撰組隊士たちは唸り声を上げた。

あと、一刻もすれば夜が来る。

敵が白河まで、そしてこの白坂口にまで達するのは、恐らく明日二十五日の早朝だろう。

隊士・中島に防塁の構築が完了したら休んでいい、との命令を下した山口は、伝令を飛ばした。相手は味方の青龍隊。本隊は同じく白河城の南側の棚倉というところに、別働隊はここ白坂口の、新撰組の背後にある丘の上に陣を張っている。

山口は既に戦図を描いていた。頭の中に広がる軍略。それが相手に通じるか。否、必ず相手をその策の内に閉じ込め、撃滅しなくてはならない。

そのためには青龍隊との連携が不可欠だった。

あとは、青龍隊がその山口の策に乗ってくるか。

しばらくして、伝令が戻ってきた。

その伝令は、青龍隊の意思を代弁した。

“山口殿の策、苦しからず”

つまり、事実上の追認だ。

よし、獲ってやろうじゃないか。山口の心中が、焰のように一瞬揺らめいた。だが、そうやって溢れ出る闘争本能を無理矢理に抑え込んだ。

この思いを爆発させるのは、明日の朝だ。

京の頃から腰にあった刀の柄を撫でながら、山口はひたすらに夜を待った。

二十五日、夜明け前。

斥候から情報が入ってきた。

“薩摩軍、白河領内に入った模様！ 数は一五〇！ どうやら後方で軍を二手に分けた模様！ しかれども二軍どちらも奥州街道を北上中！”

伝令を下げさせた山口は、心のうちで呟いた。
来たか。

一睡もできなかった。どうも血が騒いで仕方がなかった。どうやら同類は何人もいるようだった。特に京の頃から新撰組にいた者たちは、それが顕著だった。例えば巨体で鳴らし「力さん」と隊内で呼ばれている島田^{しまだ}魁^{かい}などは、その巨体を横たえながらもらんとその目を輝かせている。池田屋事件の折にも功を上げた古い隊士、山口からすればもう五年もの付き合いになる。

山口はのっそりと身を起こした。

「斎藤さ……、いや、山口局長代理。敵が来たのか」

大きな身を横たえていた島田もすっくりと身を起こした。既に新撰組の兵装もすっかりその形を変えていた。鳥羽伏見の敗北を経て、新撰組は和装を棄てた。

もはや刀や鉄砲では戦は出来ねえやな――。

土方歳三はさる幕臣にそう語ったという。

それ以来、新撰組は西洋式、とりわけフランス式の兵装を取り入れようと努めた。そうして会津にいる頃には、重い鎧は廃され西洋式の軍服に、そして刀の代わりに銃が支給されていた。

かつては大鉢金に鉄小手鎖帷子に身を包んで大身槍と剛刀を引っ提げていた島田さえも、今は黒い詰襟の洋装に、西洋式の先込銃を手挟んでいる。腰にある剛刀だけが、往時の武者振りを示すばかりだった。

洋装に身を包む島田を見上げながら、山口は口を開く。

「おう。今日の朝には来るぞ」

「隊士たちを起こそうか」

「いや」山口は頭を振った。「寝かしといてやれ。寝不足で戦が出来ないなんて言われては叶わん」

「そうだな」

島田も同意した。力士と見間違うほどの巨体を揺らしながら笑う様は、なぜか周りに滑稽を与える。普段あまり笑うことのない山口にさえも、笑いをこみ上げさせる。

その笑いをかみ殺す意味もあって、山口は口を開いた。

「そうだ、力さん。お前さんに聞いておきたいことがあった」

「ん、なんだ、局長代理」

「何で、お前はここにいる？ お前は永倉さんに推挙されて新撰組に入ったんだろう？」

話に出た“永倉”というのは、かつて新撰組にいた“永倉新八”のことだ。だが一カ月ほどに近藤勇と袂を分かち、今や行く手は分らない。聞いたところだと、新たに旧幕府軍の兵たちと合流し一隊を作ったらしい。島田魁は、その永倉新八の紹介で新撰組に入った男だ。永倉について行ったとしても不思議ではなかった。

山口からすれば不思議だった。島田が未だに新撰組にすることが、だが、島田は目をまん丸にした。

「何言ってるんだ、お前。まあ確かに俺は永倉の推挙で新撰組に入っただよ、新撰組に入るのを決めたのは俺だ。で、どう身振るのかを決めるのも俺だ」

「そうか」

「それに」島田は言った。「俺には帰るところがねえ」話を促した。すると島田は続けた。

「俺は元々次男坊だ。帰る家もねえ。かと言って、俺らの殿様、徳川幕府ももうねえ。大樹公のお膝元にも帰れねえ。となれば、もう俺の帰るところは新撰組にしかねえよ」

帰るところ、か。

山口は呟いた。

俺には帰るところがあるんだろうか。

山口にだって同じことが言える。草奔の身、今更家には帰れない。幕府が崩壊した今、新撰組の働きによって下賜された禄さえもどうなるか分らない。山口も島田と同じだった。

俺もまた、新撰組にしか帰れないのか。

まあ、いい。

「なんとしても勝とうか、力さん」

「言われるまでもねえ」

島田は拳骨を山口に差し出した。山口はその拳骨に自分の拳骨を合わせた。ごっん、と鈍い音が一瞬走った。

と――。

「伝令！ 伝令！」

伝令兵が新撰組の陣に飛び込んできた。あまりの大音声に眠っていた隊士たちも目をこすりながら顔を上げた。その伝令兵は一瀬を見つけるやその前に踊り出て、身をかがめた。そして挨拶もそこそこに持たされた情報を山口に報告した。

「敵兵！ 白坂口に進軍中！ 早朝にこちらへ到着する模様！」

その言葉を聞くと、隊士たちは咆哮を上げた。

ウオオオオオ！

その唸りは辺りにこだまし、白河の明けきらぬ空に広がる。

が、その唸りの中、山口が怒鳴り声を上げた。

「静まれ！」

その一喝に隊士たちは上げていた声を抑え、首をひねり出していた。隊士・中島などは不満げな顔さえ晒していた。

ふう。ため息をついた山口は辺りを見渡す。隊士たちは一瀬を見つめている。その様を確認してから、山口はゆっくりと口を開いた。「我々は伏兵となる。お前たちの貯め込んでいる鬱屈、全て隠せ！」伏兵。つまりは軍の気配を消した上で騙し撃ちをする兵ということだ。

誰もが困惑する中、隊士の中島が前に踊り出た。

「局長代理。つまり我々に卑怯な戦いをしろと？」

卑怯。敵の後ろを取って戦うのは武士にあるまじ。

「中島、良く聞け」と、山口。「この戦いは負けてはならない戦いだ。無論、これまでの戦も負けてはならない戦いだ。だが、この戦いに負けてしまったら次は無いだろう。俺たちに帰るところがなくなってしまう。この戦、なんとしても勝たなくてはならない」

「それは分かっています！　だが、そんな卑怯な手を使わずとも――」

「使わなくては勝てない！」

山口はそう断じた。鳥羽伏見、甲州戦争という新兵器による戦争を新撰組の、――つまりは一軍の幹部として――、見てきた山口からすれば、それだけ薩摩軍の装備は驚異だった。

さすがの中島も、黙りこくってしまった。

それを見届けるや、山口は隊士たちを見渡した。どの顔も、一緒に死線を越えてきた仲間のそれだ。そして、山口の帰るところ、新撰組を為している者たちの顔だ。

「いいか。敵が来ても迂闊に撃つな！　こっちの装備は火縄銃だ。先に気取られればこちらが八チの巢になる。――しっかりと引き付けた上で行動する！　いいな、俺が良いというまで撃つんじゃないぞ！」

「ハイ！」

【13】

隊士たちは唱和した。そして持ち場に散らばっていった。
ふん。

ため息をついて敵のやつてくる南を向く山口。だが、すぐに横の
島田魁に肩をつつつかれた。

「おい、局長代理、あれ」

「ん？」

島田の指差したのは、後ろに立ち尽くす中島の姿だった。

一人持ち場に散らずその場で俯く中島。ぐっと歯噛みしながら下
を向いている。眼を細めてその様を見つめる山口は、中島に声を掛
けた。

「中島、君は何処の持ち場だ」

「——自分は抜刀部隊の小隊長です」

抜刀部隊。つまりは白兵戦を行なう部隊の事だ。銃砲部隊の支援
を受け、呐喊して敵を殲滅する役目となっている。とは言っても、
その実態は全二十人ほどの小さな部隊だ。中島はその剣腕を買われ
（というよりは京時代からの古参隊士ということもあって）抜刀隊
の小隊長を拝命している。

山口は頷いた。

「ならば中島。俺が一時的に抜刀隊小隊長をやるっ」

「は？」

「お前は今回、俺の席に座って戦全体を見渡せ。俺は一兵卒に落ち
る」

「な、何をいつてやがる！」その言葉に反応したのは島田魁だった。
「お前は土方さんから指揮を委ねられている身だろうが！ そのお
前が何で……」

「ならば力さん。あんたに一時指揮を委ねる」

「何だと!？」

スタスタと歩を進める山口は未だ下を向いたままの中島の肩を叩いた。そうして中島の脇をすり抜けた山口は、腰の刀の柄頭を撫でながら抜刀隊の持ち場に消えていった。

「まったく」顔を思い切り歪めて、島田は頭を掻いた。「昔からそうだが、どうもアイツはつかめねえところがあるよなあ」

だが、いくら考えても仕方がない。土方歳三に指揮を委ねられた山口二郎に指揮を委ねられてしまったからには、島田魁がこの場で指揮を取らなくてはならないことに代わりはない。とはいっても、既に山口から戦の手筈は聞いている。あとはその大枠を守った上で状況に合わせ臨機応変なる戦を描くしかない。

山口の後姿を見送りながら、島田は力なく笑う。
で――。

島田はボケつと立っている中島の背中を思い切り叩いた。

「おい中島！　しっかり見ておけ！　局長代理殿がお前に勉強しろって言うてるんだ！　局長代理代理の俺と一緒に戦の見物と行くか」
不承不承ながら、中島は頷いた。

「――はい」

「よっしゃ」

島田はまた中島の背中を力任せに叩いた。そして、大音声で隊士たちに篝火などの伏兵に邪魔な物を処分するように言いやった。その声が広がるうちに、新撰組が潜む丘は夜の闇の中に沈んでいった。銃砲隊に火縄の点火を命じておく。もちろん、火縄を外から見えないようにに隠匿した状態で、だ。

島田は空を眺めた。

運が良い。

昨日夜まで降っていた雨は、いつの間にか上がっていた。火縄がしけることはない。その上昨日からの雨で道の状態はあまり芳しくない。最初山口の策を聞いた時、正直島田は「そんなに上手く行くもんかい」と反発を覚えた。だが、今は違う。

もしかしたら、奴の策通りに事が運ぶんじゃないか――。そんな

予感が胸を掠めた。

「よし、全軍息を沈める！　だが気まで沈めるんじゃないぞ！」
島田の檄に隊士たちは無言で頷いた。

事が動いたのは、空が白み始めた頃のことだった。

「敵軍、南前方一里ほどのところを進軍中！」

斥候の報告が島田の耳に入る。

「ああ、本当ですね」

中島が遠眼鏡を使って南を凝視している。その遠眼鏡を島田はひたたくた。

確かに敵軍が進軍してきている。

数は約百五十。斥候の報告通り。どうやら歩兵が主らしい。砲は二つ。主力は鳥羽伏見でも見た揃いの制服、薩摩。だが、その中に薩摩の戦装束とは異なる格好をした者たちの姿もある。そして、部隊の中で唯一馬に乗っているのがこの軍の首魁だろう。

この状況が示すことは――。

敵軍には機動力があまりない。そして、薩摩が主力ながら、他の家中も加わる混成軍だということ。そして、火力もそこまで強くはないということ。

敵軍が近づいてくるにつれ、新撰組の中にも熱気が広がる。殺気と言い換えてもいい。いつ火縄銃の引き金を引いてもおかしくない顔を浮かべている。だが、島田はそれを必死で抑えた。

「まだだ、まだ引き付けるんだ」

敵軍百五十は奥州街道を竜の如く上ってくる。もしも前日が晴れていたなら砂塵が辺りに舞い広がっていたところだっただろう。未だ十町も距離がある。島田は心の内で敵軍との距離を数える。

九・八・七・六・五・四・三……。

一数えるごとに、島田の心臓が高鳴る。こちらの火縄銃の有効射程はせいぜい一町。向こうはその四〜五倍の有効射程を有している。如何に数で勝るといえど、弾が届かないのでは戦にもならない。逆

に言えば、こちらの射程に敵軍が入ってくれさえすれば、それでいい。

と。

迅雷のような音が辺りに響いた。まるで地面が割れたような音。

な、何だ！？

見ると、それは新撰組の後方の丘に陣を構えている青龍隊の砲撃の音だった。確か旧式の砲が二つあると聞いているが、その二台を交互に撃ち放っているらしい。

だが、その砲は敵軍に当たらない。距離は充分のようだが、的が絞り切れていないらしい。

ち、先走り過ぎたか。

青龍隊の砲撃は明らかに早すぎる。新撰組の伏兵を生かしたいなら、もっと敵が奥深く入ってから砲撃すべきだった。

事実、敵軍は即座に戦闘態勢に入った。新撰組の前方三町の辺りを進軍していた敵軍は即座に横展開し、青龍隊のいる丘に向いて銃撃を始めた。火縄銃の音とはまるで違う、乾いた音が散発的に響く。そうして青龍隊と敵軍との間に戦端が開かれた。

だが、島田は、——新撰組は——、動けずにいた。

何より青龍隊の発砲が早すぎる。火縄銃の有効射程はわずかに一町。三町の距離に展開している敵軍に用いるにはわずかに遠い。確かに撃ってやれないこともないが、それでは有効な打撃とならない。「島田さん！ 動かないんですか！」

中島が焦り出している。いや、中島だけではない。他の新撰組隊士たちも島田の事を血走った目で見つめている。痛いほど気持はわかる。だが、ここで撃っても無駄弾になるのは火を見るよりも明らかだ。

「おめえら、我慢しろ！ 機になったら撃ち方を命令するから、それまで黙っとけ！」

何より、島田が我慢できない。仲間が戦っているというのに、こうして傍観しているなど——。

しばらく戦闘が続いただろうか。その中で、ようやく敵軍は砲を運用し始めた。新式の砲だろう。聞いたことのない風切り音が響く。そして、その砲撃が島田の鼓膜を揺らし、最後には青龍隊の丘に突き刺さる。ビリビリと辺りの木端が音を立てる。

敵軍は二台ある砲を交互に打ち鳴らし、青龍隊の陣を攻め立てる。さらには新式銃の雨あられ。鳥羽伏見で見た、薩摩軍お得意の戦運びだ。火力を前面に出し、少しずつでも敵の疲弊を狙う。薩摩軍は既に弾幕に包まれて、その姿を明らかにしていない。朝日を反射する弾幕は薩摩軍の姿をおぼろげにする。鳥羽伏見の時もそうだった。弾幕によって敵の姿さえ明らかにならないままに、あの時新撰組は多数の死者を出した。

と――。

突然、青龍隊が沈黙した。さっきまで砲を撃ち鳴らし、銃撃を何度も繰り返していたにも拘らず。

え？

新撰組隊士たちのなかにも動揺が広がる。鳥羽伏見を経た隊士たちは顔を蒼白にしている。かくいう島田もその一人だった。

まさか、もう青龍隊が崩れちまったんじゃないだろうな！？

島田の脳裏に、銃によって駆逐されてしまった仲間たちの姿が頭を掠めた。鳥羽伏見で見た地獄。あの時見た光景が、青龍隊に重なる。

敵軍は展開したまま進軍を始めた。道から外れたところにいる兵たちは田に足を浸からせている。そのせいで進軍がままならないらしい。牛歩ながらも敵軍は陣を前進させる。

「ぬ……」

歯噛みする島田。

【14】

だが、ここで中島が叫んだ。

「島田さん！ 今が機です！ 今、敵軍は！」

その声によつて、ようやく島田は気づいた。

青龍隊が沈黙したことによつて安心したのか、敵は既に軍を不用意に進めていた。そうして気づけば新撰組の射程内にまで入っていた。

まさか——？

島田は青龍隊の陣を見つめた。

思わず島田は頬を緩める。なるほど、そういうことかい。ならば。

「中島」

島田は小首をかしげる中島に向いた。

「まだ、機じゃねえんだ。機は、奴らが俺たちに背中を見せ始めたその瞬間。分かったな」

「まだ、待つんですか」

「ああ」

薩摩軍はじりじりと前進しつづける。銃を構えた歩兵たちの視線は、青龍隊の陣へと釘づけになっている。馬に乗っている将さえ、青龍隊の陣にしか目が行っていない。新撰組が伏せている丘になど興味も持っていない。こちらへの威嚇射撃さえも無いところを見ると、まったくこちらの伏兵を察していない。

その敵軍は遂に新撰組に背中を見せた。つまり、会津の用意した陣深く入ってきた。さながら籠に自ら飛び込んだ鳥のように。

その瞬間、島田は右手を大きく上げて前に振り出した。

「よし！ よく我慢した！ 射撃隊、撃ち方始め！」

瞬間、新撰組の火蓋が切られた。切られたのは火蓋だけではない。ずっと我慢に我慢を重ねさせてきた、隊の殺気。その封印をも一緒

に切った。

オオオオオオオ！

虎の唸りのような関が白河の空に突き抜ける。そして、それと共に新撰組の砲も火を噴いた。

「おお！」中島は感嘆の声を上げた。「敵さん、滅茶苦茶混乱しますよ！」

中島の言う通りだった。

意識しないところからの攻撃ほど面喰うモノはない。突然（限りなく後方の）側面から銃撃・砲撃されたのだ。敵軍の混乱といったらなかった。敵軍は砲の内一台をこちらに向けようとしているようだが、田の中に砲の轍が浸かってしまっていて到底旋回など出来そうにもない。それどころか、歩兵とて田に足を浸けてしまっているせいで、身動きが上手く取れないようだ。

しかも。

沈黙していた青龍隊も動き始めた。

さっきまでの沈黙がウソのように、また砲台から砲撃を始めた。今度は精確な狙い。田の泥がはね、敵軍歩兵たちも宙を舞う。

そう。さっきまでの戦運びも全て計算だったのだ。

青龍隊が囷となった。わざと砲が敵に当たらないようにした。相手を油断させるためだ。戦下手を演じて見せたのだ。そうとも知らない敵軍は不用意に前進した。これを以って、新撰組の伏兵が効いたのである。

この作戦には別の意味もある。新撰組を始めとする会津軍には薩摩のように最新鋭の装備はない。新撰組のように、未だ火縄銃を使っている者さえいる。火縄銃と新式銃では射程・威力・連発力いずれにも雲泥の差がある。だが、これだけ敵と密着すれば射程・威力など比べる意味もない。こめかみに突き付けられている拳銃が新しかろうが古かろうが関係がないということだ。それに、運用できる兵力が連発力を補ってくれる。つまり、総合的な実力は互角。ならば陣を敷いて手ぐすねを引いている分、はるかに会津軍の方が有利

なのだ。

そうして完成した二正面作戦。

敵を叩くにおいて、基本的な陣構え。

そして――。

棚倉口に陣を構える青龍隊本隊から、こちらに軍が差し向けられる手筈になっている。つまり、三方向による包囲が完成するということだ。三方向包囲。これには別名がある。それは――。

中島は呟いた。

「せ、殲滅包囲」

古今東西の戦において、必勝の構えとされる殲滅包囲。全ての包囲を塞いでしまえば真の意味で殲滅包囲となるが、孫子以来そういつた“完璧な”殲滅包囲は戒められている。完全に囲まれた敵は追いつめられた鼠の如くに噛みついてくる。要は逃げ場があるように見せて安心させつつ、死屍累々の山を作るのである。

なんてこつたい。

島田は心の中で呟く。まさか、あの斎藤がこんな戦を描くとはな。どうしても、島田は山口の事をかつての名前、斎藤一と呼んでしまふ。だが、京都時代の“斎藤一”と、今ここで戦を描いた“山口二郎”が頭の中で結び付かない。京都時代の斎藤一は確かに卓越した剣客ではあったが、そこ止まりの男であった。一個の剣客。かつて島田が斎藤一に持っていた印象はそれ程度のもだった。だが、会津に入った“山口二郎”には、今までになかった将としての才がみなぎっていた。会津で新撰組を指揮する山口の顔は、良く見知った斎藤のそれなのだ。だが――。

この戦で、あいつには何かが宿った。

島田はそう見ている。

だが、戦場でそんな感傷に浸っている暇はない。島田は頭を振った。

見ると、敵軍は既に崩れかかっている。展開している敵軍の中には片膝をついたり田に突っ伏している兵の姿もある。既に砲兵は狙

撃され、二門ある砲は既に沈黙している。負傷兵が相当出ているようで、薩摩軍のあられのような弾幕も既に散発的なものとなりつつあった。

既に敵軍は軍の体を為していない。軍の命である指揮系統すらも麻痺しかかっている。

よし！

島田は大音声を発した。

「抜刀部隊！ 敵軍に殺到、殲滅しろ！ 銃撃部隊は抜刀部隊の援護射撃に回れ！」

銃砲火器に身を固めている新撰組ではあるが、やはり一番得意とするのはかつて京の志士たちを震撼させた刀での戦いである。勢い、何らかの方法で白兵戦に持ち込むのが新撰組の戦作法だ。

白兵戦に持ち込めば負けはない。

島田は勝利を確信していた。

そして、その勝利を抜刀部隊の臨時隊長、山口二郎に託した。

お前の描いた戦図、お前の手で完成させやがれ。

島田は射撃部隊に檄を飛ばし続けた。

一方、抜刀部隊・山口二郎。

「抜刀部隊！ 敵軍に殺到、殲滅しろ！ ——」

島田の指揮の声がここまで届く。俺なんぞより、奴の方がよっぽど大将に向いている。

まあいい。

「山口局長代理！ 突撃との指示が……」

「ああ、聞こえている。それより、旗を持て」

「はい！」

その隊士の手には、京に居た頃より新撰組を彩ってきた隊の錦旗があった。赤地に金糸で「誠」と刺繍された隊旗は朝の風にたなびいていた。確かこれは、池田屋や禁門戦争の折の勲功で買い求めたものだ。「新撰組はもう、浪士の集まりではない」。そう言って、

近藤勇が金に糸目もつけずに買わせたものだ。だが、その近藤はもういない。

この旗を振ってきた近藤はもういない。その近藤を支えてきた者たちの多くももういない。だが、俺は。

「戦う」

腰の刀をゆつくりと引き抜いた。数々の苦難を共に超えてきた刀は山口二郎、そして斎藤一自身の鏡映だった。未だに刃零れひとつない。まだ戦える。そう強がっているかのようにだった。

その刀をゆつくりと伸ばし、その切っ先を敵軍に向けた。

「抜刀部隊！ 敵軍に楔を打ち込め！」

オオオオオオ！

味方の鬨の声に圧され、一瀬も前に飛び出した。僅か二十人。だが、火の玉の如くに熱く、苛烈な一団が丘から駆け降りる。

敵軍は既に崩れかかっている。負傷兵を抱えたり介抱したり、あるいは散発的に戦う者の姿はあるが、もう組織的な戦闘は出来ていない。わずか一町ほど先に敵軍がいる。

「撃ち込まれてくる弾丸にだけ注意しろ！ その弾丸を超えればあとはこちらの勝ちだ！」

だが、その山口の檄も要らぬ心配だった。新撰組の陣からの援護射撃のおかげで、敵軍はこちらに発砲して来ることはない。抜刀部隊と敵軍の距離はもう半町もない。

敵軍がこちらに気付いたのは、四半町に達した頃だった。だが、敵軍の誰もが恐怖の眼差しをこちらに向けるばかりだった。手にある鉄砲のことを忘れてしまっているかのように、顔をひきつらせてその場に棒立ちになっている。

相手にする必要はない。

【15】

既に歩兵たちは兵としての体を為していない。ある意味でただの傍観者と化している。それが証拠に数に劣る僅か二十人の抜刀部隊に恐れをなしている。恐らくは少し脅してやるだけで逃げる。ならば、狙う戦果はただ一つ。

敵将の首。

仮にも一軍を任されているということは、その将は薩長土肥いずれかの出身者だろう。僅か百人程度を率いる将だが、討たれたとあれば向こうにとって痛手となる。討ち取っておいて損はない。

山口たち抜刀部隊が敵軍に殺到する、まさにその瞬間だった。

砲撃の音が白河の空に響いた。

旧式砲の風切り音ではない。明らかに新式のものだ。だが、会津には新式砲の装備はない。あるとすれば敵軍だが、敵軍が持ち込んでいる二門の砲は既に沈黙している。

「なんだ!？」

「報告します!」抜刀隊の一人が言った。「南方から敵軍! そちらからの発砲と思われます! 現在現在地から六百町辺りにおります!」

「数は?」

「約百!」

そうだった。山口は昨日の斥候の報告を思い出した。確か、敵軍は大田原で軍を二つに分かった筈。進軍路を同じくしているにも拘らず、である。そのためあまり気にしていなかったが、敵軍には後詰めもあった。

「如何しますか?」

「捨て置け!」山口は言った。「僅か百で何が出来! それより今は目の前の敵だ!」

「報告!」

「今度は何だ！」

「後方の敵軍、軍を二つに分かった模様！ 五十をその場に残し、五十がこちらに突撃してくる模様！」

ならば逆に好都合ではないか。山口は思った。

この地は新撰組と青龍隊の十字砲火が完成している。敵軍からすればまさに死地。新たな軍が入ってきたところでそれは同じこと。しかも、あと少しすれば棚倉口より青龍隊本隊の兵がやってくる。殲滅包囲が完成するのだ。飛んで火に入る夏の虫。

そんな山口の肉眼にも、こちらの「火」に飛び込んでくる連中の姿が目に入ってくる。銃を抱えながらやってくる同じ薩摩の制服の一団。そして、その最前列を率いるは騎兵一騎。どうやらあれが将らしい。どうやら白河に攻め上ってきた将たちは余程死に急いでいるらしい。騎將が歩兵たちの前に立つとは――。格好的ではないか。

だが、そうはならなかった。

騎兵など格好的にも拘らず、猛進してくるその将に被弾する様子は無い。見ると、どうやら新撰組の鉄砲隊がそちらにまで手が回っていないらしい。

何をしている、力さん？

だが、すぐに新撰組の鉄砲隊が置かれている状況が分かった。

六町ほど先に留まっている五十。これがただ留まっているわけではないようだ。新撰組の控える丘に向かって発砲を重ねている。そして時折その銃撃が止んだかと思えば砲撃の音が響く。六町先の五十が見事に援護射撃を行なっているのだ。横殴りに撃ちつけられる弾丸。そして丘を削っていく砲弾。嵐のような射撃のせいで、有効な反撃が出来ていない。それどころか、抜刀部隊への援護も出来ない状況におかれてしまっているのだ。

やはり、射程が違いすぎるか。山口は奥歯を鳴らした。

だが、青龍隊の援護射撃は止んでいない。十字砲火の態勢は崩れかかっているが、まだ動ける。

「進め！」

山口は前に駆け出した。それと共に、足を止めてしまっていた抜刀部隊も前に駆け出す。

ともかく、目指すはこの軍の敵将の首！

二十が錐となり、軍に突き刺さろうとするその瞬間だった。

「総員、軍を退け！」

辺りに竜のいななきのような雷声が鳴り響いた。一声聞いただけで分かる。薩摩訛り。

退く？ 心中でせせら笑う。曲がりなりにもここは死地。それを許すとても？

錐の最前、山口は敵兵に斬りかかる。このような場で技がどうの間合いがどうのなど意味がない。このような場では、相手を斬り殺さんとする意思の多寡が全てを決める。幾多の戦場を超えてきた山口はそれを知っている。恨み無き相手を憎み、その感情を刀に乗せる。次々に斬る。相手が死んだかどうかなど確認しない。もし殺し損じたのなら後ろの仲間が斬り殺せばよい。そうして二十人による錐は敵の中央、敵将にまで迫った。

そして。

「覚悟！」

踊り上がった山口は刀を振りかぶった。刃が一瞬だけほんのりと光を揺らめかす。そして馬上の将に向かい一撃を――。

が。

山口の剣閃はその将に届かなかった。

山口の剣は、狙っていた将のはるか遠くで止まっていた。豪壮な薩摩拵の刀によって。

いや、それだけではない。

狙っていた将と山口の間に、騎兵が一人滑り込んでいた。その騎兵が刀を抜き放ち、山口の剣を防いだのであった。

な、何だと？

山口は自分の剣を止めた騎兵の姿を見据えた。

左目に眼帯をし、馬の上からこちらを見据える細身の男の姿を。
その男は、山口に向かい言い放った。

「川村は殺^やらせもはん」

その男の独眼はギラギラと輝いていた。まるで竜の目の如く。

4

その少し前――。

「ちよつしもた！」

新政府軍前詰百五十の将、川村与十郎は己の浅はかさを悔やんでいた。

目の前に広がる戦図。戦の展開はすべて将帥の責任。つまりは将たる川村の責任。川村は一人、目の前に広がる惨状に我が身を焼いていた。

怒りのままに進軍を重ねてしまった。そのせいで「索敵」という基本をおろそかにしてしまった。結果、伏していた敵に気づくことさえできなかった。前方の丘にてこちらに仕掛けてきた一軍に氣を取られるうち、側面左側に伏せていた軍に攻撃される羽目になってしまった。川村にさえ分かった。二正面作戦。これは死地だと。

だからこそ、川村は自分の意地にも掛けて軍を立て直そうとした。そもそも新政府軍は最新鋭の武器をそろえている。負けるはずがないのだ。相手は関ヶ原の頃の武装でやってくる。だがこちらは世界の覇者・エゲレスの兵器たちなのだ。だが、そうはいかなかった。なぜか関ヶ原の武器たちによって味方は負傷していく。転回しようとしても田の泥に足を取られて上手くいかない。そうしてオタオタするうちに、川村の命令が上手く兵たちに伝わらなくなってしまった。

こげなこつ、初めてごわす。

そう、軍が自在に動かない。そんなことは軍を率いて初めてのことであった。今までは自分の命令が自在に士卒に届いた。自分の頭通りの動きをしてきていた。だが、今は違う。暴れ馬の如く統制が

効かない百五十は、何も出来ないままに少しずつ、確実に数を減らされている。いつの間にか砲は沈黙してしまっている。新式銃の銃口から火が噴かない。

しかも、側面の丘から呐喊兵まで出てきた。

しもた！

そう思ったが遅かった。薩摩の兵にも劣らない勢いと士気の呐喊兵。僅かに二十ほどだった。だが、兵たちはその二十にさえ恐れを抱いているらしかった。しかも、その二十の後ろではためくのは「誠」の一字が踊る旗。一度でも風雲の京に身を置いていた者ならば知っている。

新撰組の旗！

鳥羽伏見の戦で、新撰組への恐怖は既に粉碎したはずだった。風雲の京を揺らし、尊攘派志士たちを震撼させてきた新撰組の剣への恐怖は、鳥羽伏見でばら撒いた銃弾によって確かにぬぐい取ったはずだった。だが、こうして揺らめく新撰組の旗は川村に本質的な恐怖を迫ってくる。馬上の川村でさえそうなのだから、士卒たちの恐怖はさらに上をいくだろう。

「なんてこつ……なんて……」

確かにその瞬間、川村の思考が止まっていた。

と、その瞬間だった。

川村の耳に、天の助けの知らせが響いた。

新式砲の砲音。そして刹那遅れ、側面の丘に着弾した。

あいは！

思わず川村は後ろを見やる。

おお！

川村は安堵の声を上げた。

六町ほど後方に見える、百ほどの軍勢。間違いなく、伊地知軍本隊だ。

しかも、伊地知軍はこちらに兵を指し向けてくれている。五十ほどはその場に残して側面部隊への抑えとして用い、残り五十がこち

らに向かつてくれている。

助かりました！　これでまだ戦えます！

【16】

川村は突撃してくる伊地知軍に向かって手を振りたい気分だった。だが、仮にも戦場でそれをするとは出来ない。

やがて近づいてくるに従い、川村の目にもこちらにやってくる五十人の様子が見えてくる。だが、その姿は川村の想像したものとはずいぶんかけ離れていた。

なんと、将たる伊地知が最前列にいる。馬を飛ばしてこっちにやってくる。もはや馬が速過ぎて歩兵たちが追いつけていない。軍を率いる将としてやってはならない進軍。

どうしたのですか？

困惑を隠せない。

伊地知にはありえない。薩摩一の軍略通にして薩摩の将たちを育てた伊地知竜右衛門の行軍とは思えない。

やがて、伊地知一騎が本隊とすっかり離れてしまった。一騎駆けにてこちらにまで迫ってくる。無論、無謀だ。増援のおかげで側面丘陵上からの銃撃はないが、未だに正面の丘陵からは砲撃や銃撃があるのだ。

だが、川村を驚かせたのはむしろ伊地知の表情だった。しんと顔を青白く染めて、馬に鞭をくれている。長年伊地知を見てきた川村でさえ、このような表情を浮かべる伊地知を見るのは初めての事だった。

「い、伊地知どん」

川村の言葉に応えることもなく、川村の軍に到着した伊地知はがなり立てた。

「総員、軍を退け！」

え？ 川村の思考はまた凍った。

何も、凍りついたのは川村だけではない。一五〇の軍すべてが凍りついた。

馬をなだめながら、伊地知はまた叫ぶ。

「軍を退け！ 与十郎！」伊地知は川村に向いた。「分からんか、この状況！ 側面丘陵、前方丘陵に敵軍。ここにもし敵の援軍が来たらどうなる——」

促されるがまま、頭の中に戦図を描いてみる。左側方に敵軍。そして前方に敵軍。その二軍に挟まれて、事実上の二正面作戦となっている。その上さらに、敵援軍があつたなら……。

ようやくながら川村は気づいた。

三方面包囲が完成する。

左側面、正面に軍が展開している状況なら、右側面に軍を配置するのは目に見えている。そうなれば、劣勢は何かあつても覆せない。「分かつたか！ 分かつたら早く……」

川村が慌てて退却指示を出そうとした瞬間、味方陣形の端から悲鳴が上がった。だがそれは、さつきまで自軍が上げていた悲鳴とは明らかに種類が違う。その悲鳴を、かつて川村は嫌というほど聞いてきた。これは、刀で切りつけられた時に人が発する声。

声の方を見ると、やはりその想像通りの事が起こっていた。

自軍の左翼が敵軍呐喊兵によつて切り裂かれている。鋭い嘴のような陣を取った呐喊兵たちは狼のような咆哮を上げこちらの軍の陣形を崩していく。揺れる「誠」の旗がいとたやすくこちらに近づいてくる。

そして。

「覚悟！」

ついに、嘴の最前にいた兵が、川村の目前にまで達した。白刃を八相に構えるその兵は、馬上の川村に向かって飛ぶ。その間に手に在る刀を振り上げて。

「な」

馬上ではとつさの働きが難しい。川村も一瞬の事にたじろぎ、逃げることも防ぐことも叶わない。川村からすれば必死の刹那、刺客からすれば必殺の刹那。川村の眼前で生死が交錯した。

だが――。

その川村の前に、伊地知が踊り出た。

馬の腹を左足で蹴り上げながらも腰の刀を抜き放ち、刺客の刀に合わせた。伸びる剣閃、それはまさしく、薩摩の剛剣・薬丸自顕流の抜刀技、“抜き”だった。下から伸びる剣閃が振り下ろされる刺客の刀と交差し、一瞬火花を散らせた。

「川村は殺らせもはん」

刀を抜き払った伊地知は確かにそう言った。小さな体を楯にしなから川村の前に立つ伊地知の背中が、本当に大きかった。

だが、その刺客は止まらなかった。

声もなく刺客は動いた。必殺の剣閃をし損じたと知るや、ぐんとその身をかめて伊地知の死角に回り、そこから突きを放った。足の発条がよく利いた突きは唸りを上げて伊地知に迫る。だが、これは“地の利”が伊地知を助けた。馬に乗っていたおかげで、刺客の剣先は伊地知の鼻先をかすめただけだった。

ちっ！

伊地知はその場で馬を旋回させて刺客を牽制し、味方全軍に向かい叫んだ。

「全軍、退避！ 退避！」

その伊地知の言葉によって、ようやく味方の軍たちは今自分が置かれた状況に気付いたらしかった。銃を構えていた兵はその銃口を地面に向け、名残惜しげに白河城を望むや唇を噛んで背中を見せた。敵弾に倒れた仲間を看護していた者は、仲間を背負いながらその戦場から離れんとした。そうして一人、また一人と背中を見せ始める。

だが、川村に切りつけてきた刺客は叫んだ。

「させるか！ 抜刀部隊！ 追いつがれ！」

どうやらこの刺客、ただの一兵卒ではないようだ。たかが一兵卒の命令に、後ろの隊士たちが意を同じくして従う。もしかすると、この男が抜刀部隊の長なのかもしれない。

だが、その刺客以上の大声で伊地知が命令を下した。

「退却援護！ 敵軍を囲め！」

そう、伊地知が一緒に連れてきた五十に対する命令だった。伊地知の命を聞いた五十は、呐喊しながらも二手に分かれ、左翼を打ち崩さんとしている敵軍を囲みに入った。追いつぐところではない。敵軍はその五十の相手をする事となった。

戦闘の疲れがない伊地知率いる五十はよく動いた。そのみではない。数以上の働きを見せた。だが敵軍も負けてはいない。後退しながらも兵は減っていないようだ。つまり、ここで膠着が起こった。だが、結果としてそれが時間稼ぎとなった。その間に川村軍のほとんどもが敗走の態勢に入った。

その様を見届けた伊地知は馬を南に旋回させた。

「総員退避。五十は殿！ 心してつとめい！」

殿。つまりは退避の際に敵の追撃をかわす役割を負った兵たちの事である。追撃を仕掛けてくる敵ほど厄介なものはない。勝利の勢いをまとったまま、猛り狂った熊のように迫ってくる。敵が僅か二十とはいえ、その勢いは馬鹿に出来ない。それが証拠に、こちらの精兵五十に対して敵軍二十がよく持ちこたえている。勝利を目前にぶら下げられて勢いついている証拠だ。追撃戦において、殿が崩れて本隊まで崩れてしまった例など枚挙にいとまがない。

だが、その難しいはずの退却戦の中で、伊地知は笑って見せた。

独眼の眼は、さっき川村に斬りかかったあの刺客に向いていた。

「また会いもんそ。今度は借りを返しもす」

刺客の男もまた、にやりと笑って見せた。

やれるものならやってみろ。

そう言いたげに。

ふん。

鼻を鳴らした伊地知はぼけつと戦場を見下ろす川村に向いた。

「退避。ほれ、ぼさつとすな」

「は、はい」

川村もまた、白河城に背中を見せた。

その瞬間だった。側面丘陵、前面丘陵から歓声が湧いた。地響きのように聞こえる男たちの歓喜の声。川村からすれば屈辱の声。まるで雨のように降りしきる声は、川村の心をみじめに濡らす。

思わず、川村は振り返ろうとした。だが、それを伊地知は咎めた。「退避するときは他のこつを考えんほうが良か」

しばらくしてから、伊地知は続けた。

「今は耐える。まだ俺たちは負けておらん」

いや、これは負けでしかない。川村は唇を噛んだ。新政府軍の精鋭一五〇を与えられながら。薩摩の軍師・伊地知竜右衛門率いる兵の六割を任されたにも拘らず、敵にもてあそばれた揚句撤退の憂き目にあつた。負けた。その事實は揺るがしうがなかった。

その後、伊地知軍は何度も敵軍の追撃にあつた。だがそのたびに伊地知の殿軍指示により追撃をかわしまくつた。僅か百の殿はその倍を超える追撃軍を何とか押し留めることに成功した。そうして敵軍が追撃を諦めた頃には、士卒始め皆疲れ果て、とても戦闘が出来る状況に無かつた。

こうして、四月二十五日の戦闘は終わりを告げた。

新政府軍の敗北。白河城を奪われた上での、さらに恥の上塗りであつた。

白河から離れたところに陣を張つた伊地知軍は、現在の頭数を確認した。やはり、頭数が減っていた。二五〇いたはずの人員が三十人ほど減っていた。逃げ出して戻つてこなかった者もあるだろうが、殆どは死者、あるいは大けがを負つて戦列から離れた者だろう。さらに、残った人員の内、怪我人が三十人を超えていた。かすり傷程度の軽い傷ならば全員が受けている。もはや数えるまでもなかった。

【17】

軍の士気は最低にまで落ち込んでいた。

まるで亡国に際してしまったかのように肩を落とす者、虚ろな目をして地面に座っている者、けが人を介抱しながら眼の下に隈を作っている者。軍の中に広がる倦怠感、そして絶望感。

川村与十郎はこの感覚に覚えがあった。かつて、薩摩がエゲレスと一戦を交えたことがあった。まるで勝負にならず、薩摩は負けに負けた。その負け戦の時に、薩摩の中に流れた空気がまさにこの空気がだった。洞窟の中に生き埋めになったかのように詰まる息。出口の見えないもどかさから苛立ちが湧きおこる。そして、自分の力ではどうしようもないほどの絶望が押し掛かってくる。そしてさまざまな感情がないまぜとなって黒い炎となって立ち上り、各人の身を完膚なきまでに焼きつくす。

これまで、伊地知軍は勝ち続けた。

鳥羽伏見での戦いでは数の劣勢を跳ね返した。甲州では敵軍を子供同然に捻り潰した。その威に恐れをなした旧幕府・徳川家は干戈を交えることなく朝廷に屈した。そして宇都宮城さえも一気に下した。

勝ちに慣れ、酔っていた。

そこに来ての、敗北。それだけに痛い。

もちろん川村とて例外ではない。いや、むしろ他の兵たちよりもはるかに痛みを感じている一人だった。

“俺がこの最強の軍にミソをつけてしもうた”

その言葉が川村の中でぐるぐると回り続ける。その言葉を振り払うように川村は何度も頭を振った。だが、頭を振れば振るほど胸が押しつぶされるような感覚に襲われる。

「畜生」

川村が歯噛みした、その瞬間だった。

「おお、そげに怖か顔をすうな」

その声に川村は振り返った。振り返った川村の視線の先には伊地知が立っていた。

伊地知は無表情だった。元々顴の眼帯をしているおかげであまり顔の表情が出にくい。普段なら開いている右目が伊地知の感情を代弁するはずなのに、今ここにいる伊地知からはいかなる心の細波をも感じない。

歌うような口調で伊地知は続けた。どこかひょうひょうとして清々しげに。

「死人・逃散二七。この戦、大負けだな」

軍隊において総数の一割もの死者が出てしまうと軍としての体をなさなくなる。死んだ人間の倍は怪我人が出る。そしてその三倍、疲れをまとった兵たちが溢れる。現在、戦うことはとてもできない。伊地知の言葉の裏に在るもの。それは現在の伊地知軍が軍としての体をなしていないことを如実に表していた。

「今、江戸に向けて手紙を書いた」と伊地知。「もつと兵隊を送ってくれもんせ」ってな」

伊地知の言葉には、戦に負けたという悲壮感がない。

「伊地知どん、俺は何を間違うておったのでしょ。教えてくれりやんせ」

最初、伊地知は何も答えなかった。地面に転がる石を右手の杖の先でもてあそんでいた。だが、意を決したようにその小石を思い切り払った。石はころころと転がって草むらの中に消えた。

「与十郎、お前はここの戦の“質”を見損なっておったんだ」

「“質”？」

「鳥羽伏見から江戸までの戦は、言うなれば意地の戦じゃった」

意地。その意味を先回りしようとしたものの、川村にはその言葉の意味が分からなかった。“意地”という言葉はわかる。だが、伊地知がどういう意味を以ってその言葉を選んだのかさっぱり分らない。

伊地知は続けた。

「鳥羽伏見から江戸までの戦。あれはつまるところ徳川幕府の意地じゃったんではなかか。かつて日本中の大名を屈服させ、武門の第一位として天下を睨んでいた徳川家の矜持じゃったんではあうまいか？ 天下を三百年も治めてきた徳川家が干戈を交えることなしに負けられない。そういう徳川の、ひいては徳川に寄りかかっている者たちの意地が、鳥羽伏見から江戸までの戦の中核をなしていたのではなかか」

武家の意地。徳川家の意地。

思えばそうかもしれなかった。

鳥羽伏見の時点で、徳川幕府は既に存在しなかった。だが敵軍は“徳川幕府”という旗印のもとに結集した。そして、江戸までの戦いは“徳川幕府”という旗を掲げる者たちとの戦いだった。

「じゃっどん、これからの戦は違う」

「どう違うのですか」

「これまでの戦は意地の戦じゃ。じゃっどん、意地なんてもん、数の多寡と兵の強弱ですぐに折れるもんじゃ。事実、鳥羽伏見や甲州で俺どんは負けることはなかった」

「じゃあ伊地知どん、これからの戦はどげな戦でこわすか？」

伊地知は腕を組んで、遠く北を睨んだ。その視線の先は、はるか北に控えている白河の地、そして会津兵が控える白河城を捉えているのだろうか。短く息を吐いた伊地知は、ぼそりと、だが力強く言い放った。

「敵にとつて白河から北の戦は、自分の国を守る戦だ」

「国を守る戦？」

「ああ。己の育った国を。禄を貰う殿の治める国を。そして妻や子のいる国を。そして、自分が帰るところである国を守る戦になった」
言われてみればそうだった。これまで、鳥羽伏見から江戸までの戦にはその悲壮がなかった。鳥羽伏見の時は敵も味方も自分の故郷が関わらないところで戦った。甲州での戦とて、甲州には縁もゆか

りもない連中との戦いだつた。川村は気づいた。まだ自分は国を背後に背負つて戦う敵に遭遇してこなかったと。

伊地知は一つ頷いた。

「雀を庭先で追い払うのは造作もないこと。じゃっどん、雀の巣をつつけば、如何に雀は弱いとて攻撃を止めん。それと同じことじゃ」
淡々と言葉を述べる伊地知に、川村は反感を覚えた。こんなにも冷静に戦を語る目の前の男に違和を抱き始めていた。

だが、伊地知の組まれた手に目が向かった瞬間、川村は喉から出かかつていた言葉を飲み込まざるを得なかった。組まれている伊地知の腕。その腕に、伊地知の指が思い切り食い込んでいた。両の二の腕を握りながら、肩を震わす伊地知。無表情だったが、その独眼の奥に黒い炎がくすぶっていたのは川村の見間違いではない。

伊地知は口を開いた。

「与十郎。こん戦、必ず勝ちもんぞ。緒戦の敗北は俺のせいじゃ。

つけられたミソは俺がカタをつける」

「いや、そいは違いもんぞ！ 緒戦の敗北は俺・川村与十郎の――」

「いや」伊地知は苦々しげにつぶやいた。「最初から百五十では白河城は落ちんと思つておつた。じゃっどん、俺はお前を押し留めることが出来んかった。そいは俺の責任じゃ」

「そいを言つなら、無謀に兵を進めたのは俺でござす」

「そか。なら、俺どん二人の責任ということで良かか？ なら、二人の責任において、任務を全うしもんぞ。――与十郎、白河城は俺どんで落とすぞ」

川村もまた北の空に向いた。ガリ、と齒の奥を噛みしめながら、

川村もまた伊地知の言葉に頷いた。

次は破る。何としても国を守ろうとする強情なる心ごと。

万丈の気焰を吐きながらその場に立つ川村の姿を、伊地知はその独眼に納めていた。

江戸総督府に飛び込んできた伝令は、白河戦線での無様な敗北を告げた。四月二十五日の夕方に入ってきた知らせは総督府を駆け巡った。

「伊地知將軍率いる二五〇、白河戦線にて敗走！ 被害は甚大！」
また遅れて情報が入ってくる。

「伊地知將軍ならびに川村副官は無事との由！ が、兵力消耗著しいとの事！」

「白河戦線兵、二十余名が死亡！ 倍する数が負傷との事！」

最初、報告たちに際した西郷吉之助は、眉根一つ動かさなかった。飛び込んでくる情報が旗色の悪さを伝えるにつれ額に手をあてがった。悪夢でも見たかのような表情を浮かべ、苦々しげにつぶやいた。

「ちよつしもたあ」

しまった、どころの騒ぎではない。

派兵したうちの一割が死に、二割が負傷した。つまりは軍全体の三割が兵隊としての活動が出来ないということだ。三割の兵が動けぬ軍など、もはや軍ではない。つまり、伊地知軍二五〇は一日にしてほぼ壊滅といってもいい大敗北を喫したことになる。そして、これほどの敗北を経験したことが新政府軍にはなかった。

伝令兵を下がらせた後、西郷は横に座る大村益次郎に向いた。

「大村どん…… お聞きになられもしたか」

「ええ、聞いてますよ」

戦場から送られてくる報告書の束の端をそろえながら、大村は答えた。大村の目の前にある報告書には、越中での戦線の好調ぶり、白河戦線での苦境が見事に対照をなしていた。

「ことがここに至ってしもうたら、あとはもう決断するしかありません！」

「と、言いますと？」

「決まっております」西郷は言った。「関東の軍を結集し、白河を落とすほかありません！」

馬鹿か。大村は心の中で毒づく。

未だ関東の平定はなっていない。とどころで散発的に起こる親徳川家の武士連中との小競り合い。さらに、未だ江戸には彰義隊がいる。既にその数は三千を超しているという。しかも穏健派が去ってしまったことにより、彰義隊はいつ暴発してもおかしくないところに来ていて。そのような状況で関東から派兵などしたら何が起こるか。そんなこと、火を見るよりも明らかだ。

白河まで攻め上がるまではいいだろうが、北は会津、南は彰義隊に挟まれることになる。

だが、そんなことを説明してやるほど大村はお人よしでもなかった。

「無理ですね」

この一言で西郷の言葉を一蹴した。

だが、西郷はあきらめない。

「な、大村どんは薩摩を見殺しにする気でござるか。白河には伊地知・川村という有為の人材がおりもす。それに従軍しておる中には薩摩のもんが沢山おりもす。俺はなんとしても同じ郷の者を助けたいのでござす」

何も有為の人材は白河にいるばかりではない。ここ江戸にだっている。それが派兵の理由とはならない。それに、同郷の者を助けたいなどという理屈、通じるはずもない。少なくとも、大村益次郎に通じる理屈ではない。

「西郷殿、ならばあなたが行かれるといい」投げやりに大村は言った。「その代わり、薩摩軍だけで彰義隊を落としてから向かって頂きましょう」

そう言いやるや、西郷は黙りこくってしまった。

如何に戦下手の西郷とて分かっているらしい。肚の内で大村は笑った。

旧式の武器を集める数千人の一団。江戸に駐屯する新政府軍はそれに倍する数はいる。普通に考えれば負ける相手ではない。だが、その彰義隊相手に新政府軍は手を出せずにいる。それはひとえに、予想されるこちらの被害の大きさの故だ。

相手は上野山・寛永寺に宿所を置いている。おそらく戦となれば寛永寺に拠って“籠城”することだろう。そもそも戦において高所に陣を張ったほうが有利なのは自明の事だ。その地の利をもってしても新政府軍が負けることはあるまいが、まともに戦えばこちらに

も甚大な被害が出る。

新政府軍といえは聞こえがいいが、今江戸にいる軍は様々な家中からの寄り合い所帯に過ぎない。所詮は烏合の衆なのだ。己の家中が大事なのはどの家中でも同じ。己の家中に被害を出したくないという各家中の思惑によって、結局彰義隊の件は棚上げされてしまっているのである。

だが、いずれ潰さなくてはならない。

しかしながらそれが叶わない。

心中の思いを隠しながらも、大村は続けた。

「確かに白河は要衝です。が、江戸の方がはるかに重要な拠点です」とすると、あきれ顔を浮かべて西郷は呟いた。

「——大村どんは、冷たか男ごわすなあ」
冷たい男——。

少し胸が痛まぬでもない。まだ大村が医者をやっていた頃、患者によく言われた。医者をやっていると、どうしても手の施しようのない患者に出会うことがある。「なんとか治療してください！」と袖にすがってくる家族に向かって「如何な手を使っても無理だ、手の施しようがない」と宣告する時。さつきまで涙を目に溜めながら袖にすがってきた家族は幽鬼のような形相になり、「冷たい医者」と吐き捨てる。

だが、もう慣れた。

出来ないこともある。情にほだされては出来ないこともある。「申し訳ありませんが」古い記憶を振り払いながら大村は言った。「戦に感情は不要。あなたの“冷たい”という評に対しては、こうお答えするほありませんな、“然り”と」

不意に、西郷と大村の間に不穏な空気が滑り込んだ。西郷は西郷でもう剣は握れないと聞く。大村は大村で、元々武術の心得は無いだが、その二人の気が確かに部屋の中でぶつかり合い、ところどころで爆ぜた。ビリビリと揺れる空気、そして、ごわごわとした手触りの空間。

と――。

「伝令！ 伝令！ ……あ」

そんな部屋に伝令が飛び込んできた。部屋の不穏な空気を感じ取ったのか、最初は伝令兵の顔をして部屋に入ってきたその男はやがてバツが悪そうに眼を伏せてしまった。

だが、そこは西郷吉之助だった。一瞬にしてその不穏な空気を振り払い、この男特有の人好きのする笑顔を浮かべて伝令に向いた。

「おお、伝令でござるか。いかがしもんした？」

「は、はい！」伝令兵はほっとした表情で西郷に跪いた。「白河に着陣中の伊地知將軍からの伝令です！ 伊地知將軍からの書簡をお持ちいたしました！」

なに？

色めき立ったのは西郷だけではない。大村も椅子から勢いよく立ち上がった。その拍子に椅子が床に転がって盛大な音を立てた。

「で、伊地知將軍は何と？」

西郷の問いに、伝令は答えた。

「は、はい。『全ては書簡に書いておく故、そちらを照覧されたい』とのことでした」

そう言つて、伝令は懷から手紙を取り出した。とはいってもそれは西洋風のものではなく、武家が使ついわゆる文であった。

「伊地知さあらしいのう」

西郷はその文を受け取った。何も書かれていない表書き。文をひっくり返すと、その裏書に筆で伊地知竜右衛門の署名があった。

「御苦労、下がつて良か」

伝令を下げさせた後、西郷は文を広げて机の上に広げた。西郷の美点、それはさっきまで言い争いをしていた相手であっても、事が変わればそんなことを意に介さずに最善の手を打つところだ。おかげで大村も伊地知の言葉のまま白河の戦を眺めることが出来た。

その文には白河での敗北の経緯と、爾後の計画について書かれていた。

その文曰く――。

此度の大敗北の責任はすべて伊地知竜右衛門の軽率の致すところ。敵軍の情勢すら把握せずに敵軍に呐喊した拳句、総崩れに近い敗北を喫してしまった。敵軍は白河城南側の丘や小山に陣を張り、防衛陣を構えている模様。不用意に軍を進めた拳句、伏兵に気づかず囲まれてしまった。その結果、全体の一割に当たる二十余名が死亡。あまりに敵味方の軍が密着してしまったがために、新式兵器の利を生かせず――。

「なんと無様な敗北でござるか」西郷は天井を睨んだ。「これが薩摩の軍師・伊地知竜右衛門の描く戦でござるか？　なんたるこつ！」その西郷の言い分は半分当たっている。索敵活動を怠り敵陣内に突撃し、伏兵に囲まれて命からがら逃げ帰ったなど、恐らく後の世の兵法家はこの戦をさんざんにこきおろし、紙の上で嗤うことだろう。

だが、大村には分かる。戦というのは必ずしも軍師の心算通りには運ばない。戦は一人で行なうものではない。それにその場の状況もある。結局のところ、その場に居合わせた者にしか分からない“空気”が存在するのは純然たる事実だ。言い方を変えれば、この戦の責任はただ伊地知將軍一人に押し掛かるものではない。この場に居合わせた兵二五〇の責任であるし、あるいは敵として際した会津兵たちがあつぱれたったということでもある。

西郷を無視しながら、大村は文の続きを黙読し続ける。

そうして手紙が爾後の計画にまで筆が進むにつれ、思わず大村は頬を緩めてしまった。

はは、あの男らしい。

鳥羽伏見で出会った時の独眼竜。大村益次郎にとって、伊地知竜右衛門の印象はそれがすべてだった。だが、文に見える伊地知の印象はあの鳥羽伏見での勝ち戦の時と寸分も違わない。

この男は未だ折れていない。鳥羽伏見で出会ったあの独眼竜のままだ。自信たっぷり、余裕綽々に戦場を駆ける、あの男のままだ。

それがなぜか嬉しかった。

未だ天井を睨み続ける西郷に向かい、大村は言葉を向けた。

「西郷殿。白河に兵を送りましょう」

「は？」

天井から視線を戻した西郷は怪訝な顔を浮かべた。それはそうだが、さつきまで派兵出来ないと明言していた男がいきなりその前言をひっくり返したのだ。戸惑わない方がどうかしている。

机の上に置かれている伊地知の書状を叩いた大村は西郷を見据えた。

「この報告には増派の要請が書かれていました。宇都宮方面に展開している野津七左衛門率いる一軍と、宇都宮城を占領している兵、併せ五百余りを寄越して欲しい、と」

野津七左衛門というと、薩摩の砲兵を率いる精兵軍の隊長である。伊地知の下に属しているが、北関東で陽動を行なっている敵軍・大鳥圭介軍に対していたはずだ。そして宇都宮城占領軍もまた、伊地知の下にある軍である。つまり伊地知の増派要請は、自軍全てを白河に集めさせて欲しいというものだったのである。

ふん、さすがは伊地知殿といったところだ。

最初この文言を読んだ時、大村はとにかく感心した。

これでは断りようがない。江戸占領軍を送ってこいと言っているわけではない。あくまで自分の軍を手元に引き寄せたいと言っているにすぎない。もちろん、実際には宇都宮城の占領を誰かが続けなければならぬ為、恐らくは江戸占領軍の一部を割いて宇都宮に派遣しなくてはならないだろう。伊地知は一軍の将として要求できるギリギリのところを衝いてくる。

しかも、野津軍である。野津軍は現在、敵陽動部隊との戦闘を終えている。つまり、宇都宮方面の旧幕府軍追討作戦はほぼ終了したと言ってもいい。伊地知の書状は、宇都宮の情勢をも睨んで書かれていると考えるのが自然だ。

最前線の戦場にありながら、その背後の情勢にまで目の行く將軍。

見事としか言いようがなかった。
だが、ここで西郷が口を挟んだ。

「じゃっどん、五百なんかで足りもそうか」

「足りるでしょう」と大村。「恐らく伊地知殿は白河城を無理して落とす心づもりがないはず。恐らくは白河からの敵軍南下を水際で防ぐ軍勢が欲しいのでしょう。併せ七五〇。充分です」

そう。ここで大村は一つ勘違いをしていた。

伊地知竜右衛門はこれ以降慎重な戦運びをするはずだと。書状に見える戦は見事な敗北だ。書状には描かれていないが、軍の疲弊は甚だしかろう。仮に五百が与えられたとして、それが何の役に立つだろうか。それは伊地知自身が一番承知しているだろう。恐らくは奥州街道を封鎖し、敵の関東入りを防ぐ戦略を取るはず。

そのつもりならば、七五〇は妥当な数字だ。

だが、西郷は首をかしげた。

「じゃっち、あの伊地知さあが、そげな消極的なこつをすうだろうか」

「と、いうと？」

「これは伊地知さあに限ったこつじゃなか」と前置きして、西郷は続けた。「薩摩の武士は負けが嫌いにこわす。一度負けた相手には何が何でも借りを返す。それが薩摩隼人でこわす」

その言葉には、薩摩人であるという西郷の誇りが見え隠れしていた。豪壮武骨は何も刀の薩摩拵に限ったことではない。むしろ、豪壮武骨な武士たちの心象風景を写し取って、豪壮武骨な薩摩拵が腰にぶら下がっているのである。

「まさか」

大村はその言葉を一笑に付した。

だが、心の深奥で何かが疼くのも事実だった。

戦場で不敵に笑う独眼竜。あの男にとって、敗戦がどんな意味を持つだろう。

大村と伊地知。その人間的性質はまるで違うが、置かれている立場はよく似ている。二人とも家中の有力者に見込まれ家中の軍事を一手に収めている。二人とも元が軍学者から始まっている。武人としての働きよりも、己の心算で戦う男だった。

だからこそ、伊地知の心中が分かったような気がした。

そして、自分だったらどうするか――。

敗北。将にとってそれは恥以外の何物でもない。軍学者の矜持が揺さぶられることだろう。きっと伊地知の裡には黒い炎が揺らめいていることだろう。恥を雪ぐためには恥を消し飛ばしてしまうような功を上げるしかない。己の軍略を全て注ぎ込み、誰にも手の届かないような高みを狙うだろう。と、いうことは――。

まさか――。

取りつかれたように大村は北に向いた。白河は見えない。だが、遠く白河に立つ伊地知は、地に伏せる竜の如く己の牙を研いでいる。そして白河城を睨み、炎のような気を吐き続けているのではないか――。そう思えてならなかった。

だが、その考えを頭から追いやった。

「西郷殿、伊地知軍には五〇〇の派兵で済ましましょう。どちらにせよ、それ以上の派兵は出来ません。仮に前線部隊が何を考えているのだとしても」

不承不承ながらも、西郷は頷いた。

こうして、宇都宮近辺に遊撃していた野津七左衛門軍・宇都宮城占領軍の五〇〇が、白河に派兵される運びとなった。もちろん、江戸占領軍の一部を宇都宮に派遣したことは言うまでもない。

そして、この決定を境にして、大村の心中にはある決意が湧いた。何があっても、彰義隊を落とさなくてはならない。しかも喫緊に。

どんな策を取るのか分からない。どんな戦略を描くのか分からない。だが、何にせよ伊地知軍を一刻も早く救援しなくてはならない。そのためには、上野の山に籠る旗本たちの愚連隊など相手にしている暇はない。

大村は秘密裏に進めていた彰義隊に対する軍事行動計画の速度をさらに速めた。

間に合ってくれ。

一人、ランプの明かりを元に戦図を描きながら、大村は最悪の事態にならないことを祈っていた。カンテラの明かりの元、時折図を引く手が止まり思わず北の空を見上げてしまう。だが、手が止まっていることに気づきまた戦図に向かう。こんなことを幾度となく繰り返し、大村益次郎の四月二十五日は静かに激しく更けていった。

6

伊地知軍を退けた次の日である四月二十六日。奥羽越列藩同盟側に動きがあった。

「白河城は奥羽越列藩同盟にとり決して奪われてはならない橋頭保である。新政府軍の主力がいる関東からの軍を防ぐに当たり、白河はその第一の布石となる。よって、列藩同盟が一致協力し、白河城を死守すべし」。かような考えが奥羽列の各家中に共有されるに至り、各家中から白河に派兵がなされた。

そうして最初は千五百程度だった白河城下には、各家中、二千五百もの兵が揃うに至った。

さらには――。

白河城二の丸の廊下を歩きながら、山口二郎は横の島田魁に声をかけた。うんざりとした様子で。

「ふん、いつ敵が攻めてくるとも分らないのに城下に帰還命令とは。馬鹿げている」

「そう言うものでもないさ、斎藤……いや、山口局長代理」

「……力さん、いつも前は俺の名前に慣れてくれるんだ？」

「さあ」

島田魁は両手を広げてにやりと笑って見せた。その横を、奥羽越列藩同盟の一角・二本松家中の兵たちがすり抜けていった。ぱっと見ただけでもその武装の古さが目に付いた。もっとも、新撰組のよ

うに火縄銃を使っているわけではないが。

まあしかし。島田はうーんと背伸びをした。

「昨日の戦は上手くいったなあ」

そう。四月二十五日の戦、あれは上手く行った。ほぼ山口が立案したとおりの展開を見せた戦だった。山口の代わりに新撰組全体を率いた島田でさえ、勝ち戦の味に酔っている。聞けば、会津青龍隊などは宿敵・薩摩をねじ伏せたばかりに祝杯を上げに上げ、今日は皆二日酔いだとも聞く。

だが、山口は首を横に振って見せた。その脇を磐城平家中の兵がすり抜けた。

「いや、昨日の戦はまったく上手く行っていない。最低限の働きをしたただけ」

「何言ってるんだ」島田は巨体を揺らしながら苦笑いを浮かべた。「あれだけ相手をやり込めたんだ。先発隊としては最大限の働きをしたって言うてもいいじゃねえか。それに、相手はあの薩摩軍だぞ？ それを退けたのだから立派な勝ちだ」

適当に相槌を打った後、山口は心の中で呟いた。そんなわけがあるか、と。

昨日の勝ちはもちろんものと見るべきだ。ああいう伏兵策に二度目はない。相手も伏兵を警戒して、慎重な進軍を仕掛けてくるだろうからだ。であるからには、出来るだけ相手の戦力を削ぐ必要があった。少なくとも、将の首一つは上げておくべきだったのだ。だが、実際には将の首一つ上げること叶わず、敵兵を二十ほど討ち取ったに過ぎなかった。

顧みれば悔やまれる点は数多かった。例えば、あと少し早く殲滅包囲が完成していれば。あるいは、新撰組抜刀部隊が敵将の首を挙げていれば。あるいは「勝ち」と思える戦になっていたかもしれない。そして、自分で気づいていた。結局のところ、自分の刀の切っ先が、あの敵将に届かなかったこと。それがこの戦の負けの第一である。

無言になる山口を横目に、島田は言った。

「いや、あれは俺たちの勝ちだ。昨日の俺たちが時間稼ぎをしたおかげで今こうして白河城には守備兵がこれだけついたんだ。そうだと山口局長代理」

「……ああ、そうだな」

本当に島田魁という男には救われる。この男には何の二心もない。あるのは仲間に対する強い帰属意識だけだ。殺伐としたところでは、本当にこういう男は頼りになる。そして、強い。

「正味な話」山口はぼそりと呟いた。「俺なんぞより、お前の方がよっぽど局長向きだな」

「はっは、そう言ってくれるのはお前だけだよ」

島田は豪快な笑い声をあげた。すると廊下に居合わせた仙台兵たちは何事かとばかりに身を踊らせた。そしてその声の主が天を衝くような大男であるということに気づき、それはそれで驚きを新たにしていた。

白河城。かつては親藩大名家の居城であっただけに、その作りは堅牢かつ華やかだった。見たこともないような極彩色の襖絵が並ぶ廊下。恐らくこんな風雲の時代でなくば、山口や島田が見ることもかなわなかっただろう絵が目の前にあった。だが不思議なもので、何のありがたみもありはしなかった。山口にしろ島田にしろ、城はただの防御施設に過ぎない。高名な筆による襖絵だろうがなんだろうが、それは防御施設の一備品に過ぎない。黒々と磨かれた華麗かつ豪壮な廊下すらも、今はただ通り抜けるだけの場所ではない。

かつては南下してくる諸藩から関東を守る要として作られた城。だがその役割はいつしか逆転し、今は関東からやってくる北の諸藩を守るための城塞と化している。皮肉なものだ。そして、銃砲火器の発達によって最早城だけでは防御施設としての用をなさないにも拘らず、それでも恃みにされる白河城。さながらそれは、時代に取り残された老兵のようだった。

山口は頭を振った。

「島田。そういえば、局長から文は来ているのか？」

局長。つまり、先の宇都宮城攻防戦で怪我を負い、会津城で静養している土方歳三の事だ。新撰組の初期幹部のほとんどが離散した今、新撰組の旗を支えているのはこの男といっても過言ではない。

「いや、来ていない」

「そうか」

逆に安心するものがあつた。

あの土方という男はどこか斜に構えた風がある。おそらく「文がないのは息災の印」という伝で、手紙を寄越さないのだろう。筆まめな男だが、人を食っているようなところがある。頭の隅で、悪戯鬼のように破顔する土方の顔が浮かんだ。

つまり。

山口は心の中で呟く。

この戦いで、俺が新撰組を率いるわけだ。

実を言えば、山口の中には新撰組を率いることに関して肚に含んだものがあつた。自分はいくまで一兵卒の剣客であり、人を率いる才などない。土方の負傷によつて自分が代行をしているが、それは土方が帰るまでの仮処置のつもりだつた。だが、その土方から何も言つてこない。

——俺がいない間、頼んだぜ。 斎藤——

会津に向かう土方が山口 —— 斎藤 —— に残した言葉が蘇る。

気が引き締まる思いだつた。

そして、その思いを引きずりながら、山口はある襖の前に立つた。襖の前には会津兵が二人、棒を交差させて立っていた。味方にさえ気を許さない。山口が軽く会釈をしてもまるでこちらに合わせる気がないらしい。こちらの姓名を明らかにしてようやく眉根をようやく緩めてからようやく交差させていた棒を払つた。

その部屋は、この城が未だ誰かの居城だつた頃、家老の詰め所として用いられていた部屋であつた。十畳ほどの広々とした部屋。その部屋の真ん中に座布団を敷いて、その上に武家風の男が座つていた。四十がらみだろうか、目尻に多少なりとも皺がある。伝統的な戦装束に身を包んではいるが、さすがに鎧はつけていない。だが、烏帽子姿はやはり古法に沿つたものだ。恐らくは家伝なのだろう、絢爛たる青螺鈿拵の太刀を脇に添え、文立てにて何か本に目を通し

ていた。だが、襖が開かれたことによろやく気付いたのか、その武士は本から目を上げた。

「おお、山口二郎殿か」

一介のはぐれ部隊の、隊長代理の名前まで覚えているのか。いつも、この男を前にすると敬服の念が生まれる。自然、こちらもうやうやしい態度をとらざるを得ない。腰に差していた刀を引き抜いて、山口は男の前に正座にて座った。島田もまた山口に従う。

「まさか、あなた様がここにおいでになるとは思ってもいませんでした」

そう切り出すと、その男は真面目な顔をして応えた。

「ここは会津防衛のための最前線。我が家中としてなんとしても守りたいところだからな」

目の前にいる男のありようが分からないことがある。山口は常々こう感じていた。伝え聞くところだと武働きといったものに対し否定的な人だと聞いていた。だが、こうやって戦装束に身を包む様はやはり武士だった。

山口の前にいる男。この男は西郷頼母という。

会津の出身。三河以来徳川に従ってきた西郷家の傍流。会津の西郷家といえば、家老を輩出する名門の家柄である。事実頼母も家老職にあつた。

だが、会津が京都守護職を拝命するかどうかの際、強硬に反対論を述べたことにより主君・松平容保に疎まれ、さらに独断の風ありとして蟄居の目に遭っている。だが、鳥羽伏見の敗北を受けその蟄居が解かれ、家老職に復帰したのはごくごく最近の事だ。

新撰組時代、山口はよく会津の武士たちと無駄話に興じたものだった。新撰組を預かってくれていたのが京都守護職である会津だからだ。だが、そこでの頼母の評判は芳しくなかった。

『あれは腐れ武士だ』

誰も彼も、会津訛りで苦々しげにこう言い放った。

そんな評判の男が、今、戦装束にて戦場に立っている。

そんな頼母が白河城に入っただのは今日の事だ。

白河城にこれまで入ってきた中に、家中の家老格の者はまったく見受けられなかった。それこそ家中の一部隊を言い訳程度に超越してくる家中ばかりだった。だが、会津は違った。京都で治安維持、そして戦まで経験した会津兵と共に、西郷頼母は白河城に入った。

家老格が、戦場に入った――。

白河城が色めき立ったのは言うまでもない。大藩会津の家老が陣頭指揮を執るほど、ここ白河は重要な拠点だったのだ――。重ねて白河の地、つまりは今自分が立つところの重要性を知った諸家中兵たちは、これでもかというほどに士気を上げた。

その家老・西郷頼母が今、元は一介の浪人であった山口の前にいる。

頼母は何度も細かく頷いた。

「しかし山口殿、よくやってくれた。敵軍を防いだそうだな。しかも、相手はあの伊地知竜右衛門だということではないか。あの伊地知に土をつけたのだから大したものだ」

「伊地知？」

正直なところ、山口は誰と戦っていたのかさえ分かっていなかった。元が一兵卒である山口からすれば、あまり興味が湧くところではなかった。

「おや、知らないのかね。伊地知竜右衛門というのは」

頼母曰く。

火力を絶対視するという基本戦術で異彩を放つ薩摩の兵法・合伝流。その継承者にして薩摩軍最強の軍師。負け戦である薩英戦争にあつてもなお軍功を上げた。禁門の変においては薩摩における軍事大権を務め、長州軍を火力で圧倒。そして鳥羽伏見では、倍する幕府軍を打ち崩した薩摩を指揮した男――。

そこまであまり興味を持たずに話を聞いていたのみだった山口だったが、次なる頼母の言葉に目を見開いた。

「でな、かの男、“薩摩の山本勘助”と呼ばれておる。なぜなら――

閃いた物のあつた山口は口を挟んだ。

「頼母殿！ 一つ、お聞きしても」

「な、なんだね。ああ、結構だとも」

「その伊地知とかいう男、眼帯をしてはおりませんか」

すると、頼母はああ、と声を上げた。

「お前の言うとおり、眼帯をしているとの噂だ。 “薩摩の山本勘助” という渾名だって、独眼ゆえのものだろう」

山口は昨日の戦闘を思い出した。馬に乗り、剣閃を防いだあの男。竜のように鋭く光る独眼。細身ながら全身から溢れ出る気。

そうか、あの男が将だったのか。言われてみれば納得できる事ばかりだった。あの男が戦列に参加するや、あれほど崩れていた軍に規律が戻った。援護、救援、退却。すべてが計算し尽くされていた。あれほど浮足立っていた兵たちを大喝一つで収め切り、見事に退いて見せた。あれは確かに名将の類でなければ成せないことだっただろう。

山口は悔しい思いを隠さなかった。肩をわななかせながらその場に座る。

「すいません。その伊地知を取り逃がしました。あと数寸のところにまで刃が届いていながら」

「いや、詮なきことだ。それに、お前の戦果は敵に恐怖を与えただろう。恐らく、しばらくは積極的には打って出てこないだろう」

「し、しかし……」

食いさがらうとする山口の言葉を、頼母は遮った。

「斥候からの報告だ。敵は板倉口にまで後退しているとのことだ」
板倉口といえば、白河よりは大田原に近いところに立地している。白河に対するにはあまりに遠い。敗北から未だ一日程度しか経っていないとはいえ、この距離の取り方は随分と消極的に過ぎる。そこから見える敵情。恐らく、少なくとも数日の間、攻撃を仕掛けてくるつもりがない。

「まあ、向こうもかなり斥候を放っているようだが、積極的に打って出ようという気はないらしい。恐らく、お前や新撰組、青龍隊の働きに恐れをなして、手をこまねいているのだろう」

そうだろうか。山口は自問する。

なにせ、山口は聞いている。あの独眼竜・伊地知の言葉を。

『また会いもんぞ。今度は借りを返しもす』

あれは捨て台詞だとばかり思っていた。だが、それが薩摩随一の軍師の言葉となってくれば記憶の中での響き方まで変わってくる。本当にあの独眼竜は借りを返しに来るのではないか。そんな気がしてならなかった。

「敵の士気を挫いたのは、確実にお前の戦果だ。誇ってもいい」

そんな頼母の言葉さえもあまり耳に入らない。

山口の中に渦巻いていたのは、恐怖にも似た強迫観念だった。

奴はまた来る。しかも、本気で。

首を振った山口は短く息を吐いた。そして、なおも自分を褒め続ける頼母の言葉を遮った。

「家老殿。過ぎたことを言うのは止めましょう。それよりも、我々がやらねばならないのは未来のことでは？」

すると、頼母は苦々しげながらも頷いた。

「正論だな」

そうして聞く姿勢が出来た頼母に対して、山口はいきなり本題を切り出した。

「家老殿。青龍隊と新撰組の撤退命令を取り下げて頂きたい」

そう。頼母が白河城に入ったその日、白坂口を守る新撰組に命令が下った。西郷頼母名義の命令であった。「白坂口防衛を中止し、白河城下への防御へ回るべし」。白坂口は白河城の南に立地している。ここを抑えておけば随分と戦が楽になる道理である。防衛線は幾重にも編んでおくのが防衛の基本だ。にも拘らず、最前線で防衛線を張る新撰組に退却命令が下ったのだ。奇妙としか言いようがない。

照会してみると、同じく白坂口に陣を張った青龍隊にも同様の命令が下ったらしい。青龍隊の部隊長もその命令に対し納得がいかなかったらしく、何度も首をかしげていた。

【21】

そこで、青龍隊とも協議して、西郷頼母に撤退命令を取り消すべしと進言することになったのだった。そこに、頼母から出頭命令が下った。渡りに船。そうして山口と島田はこうして頼母の前にまかり参ったのであった。

最初、その申し出に対して頼母は何の反応も見せなかった。巖のように代わりない表情を浮かべ、山口を見据えていた。

だが、山口も負けてはいない。その頼母から目をそらすことは決してしなかった。

その睨み合いに負けたのは頼母だった。

「ああ、それも考えたのだがな。それは不味い」

「不味い？ 何故？」

「ああ、それは――」

と、頼母が口を開こうとしたその瞬間、この場にいる誰のものでもない声が響いた。明るく響くその声が、ビリビリと襖を揺らした。

「決まっておろう。戦を膠着させるためよ」

頼母の背中側にある襖が勢い良く開かれた。そしてその先にその男が立っていた。

戦場である白河城にいるにも拘らず、その男は平服をまとうていた。だが、豪奢にも総絹地の平服。それを見ただけでもその男が特段の地位にあることが分かる。また、腰に差したる大小の拵も下級武士のもののように粗末なものではなく、漆を何度も塗り込んだ末に黒光りを見せるいかにも名物そうなものだった。

反射的に山口は頭を下げた。

突然入ってきたこの男は会津家中家老・横山主税である。よこやま ちから立場的には西郷頼母と同格に当たるが、白河防衛に当たっては頼母の下につく形になっている。つかつかと部屋を歩き回る横山はやがて思い出したかのようにその場にどっかりと座り、未だ頭を下げたままの

山口に言葉を投げる。

「お前たちのような下っ端には分からだろつが、この戦に勝つことになど意味はない！ よしんば白河で勝ったとしても何の意味もない！ 我々が狙っているのはあくまで引き分けよ」

「どういう、意味です」

はん。横柄に鼻を鳴らした横山は続けた。

「我々が狙っているのは、あくまで奥州の地位の安堵に過ぎん。そのためには、あくまで引き分けの中で戦を終えなくてはならん」

横山主税の言うところはこうだ。

もう既に徳川幕府は存在しない。そして、会津を始めとした奥羽越の諸家中もそれに関しては詮なきことだと諦めはついている。時代は徳川から薩長土肥を中心とした新政府のものとなる。時代の趨勢に逆らうつもりは毛頭ない。そして、奥羽越諸家中はそれに従う準備がある。

だが、新政府は会津を滅ぼす算段でいる。会津のみに苛烈な罰を与えようとしている。さらに新政府軍は他の奥羽越家中を軽んじている。だからこそ、ここで一戦交えてこちらの威を示し、相手の態度の軟化を狙う。白河戦線を膠着させることにより、優位な条件で講和を結べば、後々来る新時代において我ら奥羽越諸家中の生き残る道が開けるのだ。

なるほど。

山口は心の中で頷いた。

つまり、この白河での戦は新政府を交渉の席に引きずり出すための手段でしかないということだ。兵たちの骸の上に講和の席を設けようというのだ。

島田が声を上げた。

「引き分けを狙う相撲なんて聞いたこともねえ」

「小隊長如きが家老を愚弄するか」そう一喝した横山主税は山口に向いた。「山口。お前ならば分かるだろう？ 会津が、そして奥羽越家中が生き残るためには、これしか手がない」

山口も横山の言に同感だった。

どう頑張っても、会津を始めとする奥羽越諸家中が新政府軍に勝てる見通しなど立たない。狙えるとしてもせいぜい引き分けまでだろう。しかも、局所的な引き分け。すなわち、奥州の玄関口である白河に全兵力を集中させ防衛することで新政府軍との戦を長引かせる。戦が長引くと困るのは向こうだ。新政府軍と名はついているが、実際には薩長土肥、その他家中の寄り合いに過ぎない。戦を続けるための資金や資材は己の属する家中から捻出するしかない。やがて敵も疲弊する。そしてやがて厭戦気分が広がるだろう。そうなれば講和への道が開かれる。

理屈では分かる。だが――。

山口は頭を下げたまま口を開いた。

「古今の例を引けば引き分けはいくらでもあります。しかしながら、それらの戦は結果として引き分けたに過ぎません。実際には互いに死力を尽くしてようやく引き分けにまでこぎつけたのでしょうか」

「言葉の先が見えんな。前置きはいいい。早く言え」

「引き分けを狙うにせよ、死力を尽くさなくてはならないはずですよ。そして死力を尽くさんがため、白坂口での前方防衛を献策しているのです」

その瞬間、横山の眉がピクリと上がった。ようやく山口の言わんとするところが分かったのだろう。顔を真っ赤にした横山は、懐からゆつくりと扇を引き抜いた。そして。

「貴様も会津家中家老を愚弄するか！ 貴様に意見など求めておらんわ！」

大声一喝と共にその扇を山口に投げつけた。くるくると回りながら迫る扇は山口の頭に当たり、音もなく落ちた。しかし山口は微動だにしない。

「たかが預かりの軍の隊長が大きな顔をするな！ 馬鹿者が！」

そう吐き捨てるや、横山は立ち上がり、ドスドスと足音を立てながら部屋から出て行ってしまった。

部屋に残される三人の間には気まずい沈黙がたれ込めた。誰も口を開かぬまま、無為な時間が過ぎ去っていく。この空気に倦んだのか、最初に口を開いたのは西郷頼母だった。

「すまぬ。どうも横山殿は癪癪持ちでな。気難しいところがあるのだ。——だがな、実は私も、横山殿と同意見なのだ」

「え？」

島田が声を上げる。そして、その島田の前に座る山口も思わず顔を上げた。

頼母殿まで、白坂口を捨てるといえるのか？

だが、頼母の口から飛び出たのは、横山の理屈とは少々色合いの違う理屈だった。

「白河城の防衛に、現在二千程度の兵が入っている。恐らくはもう少し増えて最終的には三千程度の兵力になるだろう。数だけを聞けば確かに防衛線を広げるのは有効策に思える。だが、この三千というのが曲者なのだ」

遠くを眺めながら、頼母はため息をついた。

「この白河城には仙台・二本松・磐城平を始め奥羽越の家中の兵が寄り合って入っている。だが、この混成軍の中で、全体を見通すことのできる者がいないのだ」

「全体を見通す？ どういうことですかい」

島田の怪訝そうな顔に向いて、頼母は続けた。

「仙台兵たちに命令を下すことが出来るのは仙台の殿様だけだ。磐城平兵たちを動かすことが出来るのは当家中の殿様だけだ。会津の兵を動かすことが出来るのは、殿が大殿様、あるいはその信任を受けた者だけだ。一応私は会津の白河城防衛の責任者としてここに入っているから会津兵の指揮は出来る。だが、仙台兵や磐城平兵といった他家中兵を指揮する権限は持たされていないのだ。そしてこの白河城には、此処に拠る全軍を指揮できる権限にある者がいない」

話の先が見えてきた。

この城に拠る兵たちの中で指揮官に一番近いとされるのは西郷頼

母だろう。この城に、他の家中の家老たちは入っていない。格式からいって西郷頼母が指揮官だろう。だが、その指揮官であるはずの頼母は、会津の兵にしか命令を下せない。他の家中兵に対しては命令ではなく要請という形でしか意思を伝えることが出来ない。

頼母は苦々しげに続けた。

「他の家中兵たちには、白河城近くの防衛をお願いするしかない。“この持ち場を死守してください”と頭を下げるしかない。そうなると、仮に防衛上問題が上がった時に対応できない。遊撃兵が欲しいのだ。有体に言えば、私の意になる兵たちを手元に置いておきたいのだ」

つまり、西郷頼母の頭にあるのはこういう戦術だ。

白河城近くの要衝に各家中の兵を置く。それらの兵にはあくまで持ち場の死守を要請する。もちろん、配置上手薄になったところには会津兵を配置する。そして城近くに防衛陣を敷いた後、予備兵力として会津兵を温存しておく。そうすれば、戦力を投入したい時や危急の対応に迫られた際に、西郷頼母の意のままに動く兵たちを創出できる。

だが、この戦術は――。

頼母は山口の想像のままに口を開いた。

「この戦術はあまりに消極的に過ぎる。守ってばかりの厳しい戦となるだろう」

各家中兵に防衛を要請する。となれば、あまりそれらの兵を前に配置することは出来ない。あくまで防衛を“お願い”しているのだから、城に近いところに布陣させないと文句が出る。かといってそれらの兵は意のままに動かすことが出来ないのだから、結局城から近いところに持ち場を設定してやって、防衛をお願いするしかない。そして、その防衛陣の補佐に会津兵が回る形となる。そうすると自然、白河城防衛の陣は小さく纏まったものとなる。まるで天敵の攻撃におびえる亀のような布陣だ。

山口は口を開いた。

「果たして、亀が竜を退けることが出来ますかね」

「竜だろうが虎だろうが、退けなくてはならない」

西郷頼母の言葉には嘘がない。吐き出される言葉の一つ一つに頼母の覚悟が滲んでいる。亀のような防衛陣を戦場に描いた指揮官、されどその心の内はまさしく虎だった。

「……かしこまりました」

【22】

三つ指をついて頭を下げた山口は刀を拾い上げてその場を辞した。慌てて島田もそのあとを追った。

かくして、新撰組と青龍隊は前線防衛線である白坂口を棄てて白河城下に入る事となった。なにもそれは白坂口だけのことではない。少数の密偵・斥候を除いて、前線にて防衛線を張っていた軍は全て白河城下に集められた。こうして白河城は守りを専一とする大楯と化した。

が、楯には牙がない。

7

板倉口に兵を置く、新政府伊地知軍。

四月二十七日になってもその場から動こうとしない。いや、動きがない。さながら甲羅干しをする亀の如く板倉口に陣を置いている砲兵たちは命からがら持ち帰ったせいで泥にまみれる大砲の掃除に明け暮れているし、兵たちはやることがないのか銃を何処かに置いたままその辺に屯して遊戯に興じているようだ。どこか牧歌的な空気が軍に漂い始めていた。

そんな軍の状況に顔をしかめたのは川村与十郎であった。

「こげなこつで、良かのだろうか」

無論、いいわけがない。幸いにして敵軍が攻めてくる様子はないだが、こんな空気の中でもう一度白河城に攻め上がる事など出来るのだろうか。

不安ばかりが川村を締め上げる。そうして自然、川村の足は伊地知竜右衛門の方に向かう。

伊地知は板倉口の民から供出された小屋にいる。元は物置小屋だったらしい。しかももう何年も使っていないようで、ところどころ穴が空いていた上に埃が舞っていた。どう見ても民は協力的ではな

い。だが、その民たちに対して「こげな良かところ、使わして貰つてよかど？ 感謝しもんす」と伊地知は村長の手を握った。いやがらせのつもりでこの小屋を供出したのだらう村長は、変な顔をして固まっていた。

果たしてその小屋が川村の目の前に現れた。

相変わらずのボロ屋だ。風が吹けば今にも倒壊しそうだ。しかも板壁には大きな穴がいくつも空いていた。小屋というより、むしろ廃墟と言い換えた方がしっくりくる。

「伊地知どん、入りもす」

声を掛けて川村は入口の戸をくぐった。

「おお、与十郎か」

やはり、そこには伊地知がいた。どこから調達して来たのか分からない大きな机の脇に立つ伊地知の手には筆があった。そして、机の上に広げられている大きな紙と睨めっこをしていた。昼間だというのに灯されているランテラの炎の揺らめきが伊地知の独眼の瞳に反射して赤く揺らめいた。

「何をしておられもすか？」

「書き初めをしているように見えうか」

そう言つて伊地知は笑った。

伊地知は机の上に山積みになっている文に目を通し始めた。そして、「ふむふむ、ここが奥州街道で、ここに丘があるんか」と一人ごちながら、机の上の大きな紙に筆を踊らせ始めた。一畳ほどの大ききがある大きな紙に一点の大きな丸が描かれた。

そうして見るうちに、ようやく川村にも伊地知が何をしているのかが分かった。

「伊地知どん、もしかして、白河の地図を書かれておりもすか？」

「ああ」

川村と伊地知の眼前には、墨で描かれた白河の地図が広がっていた。どれも同じ筆跡。しかもひどく癖があり、読めたものではない。だが、この字に見覚えがあった。この字は間違いなく、伊地知竜右

衛門の字だ。

「これを、二日で書かれたんでござるか？」

「そうじゃ」地図から目を離さずに伊地知は頷いた。「じゃっどん、これを書くために随分と斥候に骨折って貰ったがのう」

「え？ 斥候？」

「知らんほいならったんか、お前は」伊地知は苦笑いを浮かべた。

「二十五日の敗走ん時、既に斥候を放っておいたんだ。お前も随分とのんびいとした奴だな」

四月二十五日の敗走の時。あの時川村は命からがら戦場を離れるのに精いっぱい、周りに注意を配る暇なんてまったくなかった。それ以上に身を焼き焦がさんばかりの悔しさで、周りの状況になど目が行っていなかった。

だというのに、伊地知はそんな状況の中で斥候を放ったのである。

「斥候・密偵、併せて二十。今日を期日にしておったんだが、その全てがもう帰還しじ。普通、斥候・密偵の類は敵に見つかって殺されるんが一割は居る筈だが。うーむ」

「え、それ、本当の事もすか」

「嘘をついていけんすう」

伊地知の言う通り、敵情や戦場の地形に関して情報収集をする密偵・斥候は、当然敵兵の攻撃の対象となる。戦を有利に運ぶには、密偵や斥候の類を如何に駆除するかにかかっている。斥候の生き残った数で、戦の勝敗がきまると言っても過言ではない。

にも拘らず、敵はこちらの斥候に手を出していない。全員帰還という事実が、それを如実に物語っている。

「与十郎」伊地知は紙の上に描かれた白河城をこつこつと指先で叩きながら口を開いた。「お前はと思う？ なんて敵はこちらの斥候に手を出さん？」

「……そ、そいは……」

言い淀む川村を尻目に、伊地知は言った。

「一つ目の可能性は“油断している”可能性だ。この前の勝ちに胡

坐かいて、戦場の基本・斥候斬りを怠つとう可能性。じゃっどん、俺どんを追い詰めたあの連中が油断しているとはあまり考えられんと思う」

その通りだ。誠の旗を揺らめかしてこちらを敗走させたあの連中には、確固たる戦術眼があった。事実、あの戦術眼にして壊滅寸前のところにまで持つて行かれたのだ。そのような連中が“油断”などするだろうか。

「二つ目の可能性は、“斥候を斬る必要のない戦をするつもりだから”つつ可能性だ」

「斥候を斬る必要のない戦」

川村は考えた。そんな戦、あったかと。

そもそも、作戦として敵斥候を斬り捨てるのは敵に情報が渡るのを恐れるが故だ。例えばこちらの布陣が敵に漏れてしまえば、伏兵が用をなさなくなる。例えば地形図が敵に渡つてしまえば、本来なら生かせるはずの地の利を上手く生かせないだろう。

つまり、斥候を斬る必要のない戦とは、そもそも伏兵や進軍をせず、地の利に頼らない戦の事だ。そんな戦はただ一つ。

川村は震える口を開いた。

「まさか——籠城？」

城に拠つて戦う。進軍も伏兵もなく、地形も関係ない。ひたすら敵兵の攻撃に耐える。

「うん、ご名答」伊地知は頷いた。「まあ、白河城は北への守りに特化しとることらしいから、正確には城近くの丘に兵を配して戦うつもいなのだろうがな」

「じゃっどん、そいは」

「うむ。こいはあくまで俺の想像に過ぎん。じゃっち、こいを裏付ける証拠がある」

伊地知は机の上に積み上げられている文から数枚を引き抜いて、それらを川村の前にひらりと投げ遣った。

その文はやはり斥候の報告だった。敵陣近くにまで潜り込み、現

状を伝える斥候の報告は、所々がかすれていて筆致も乱れている。中には端に血糊がついているものさえあった。

それらの報告を端から端に読んでいく。

「二十六日、北より会津兵が入城、数は三百。また同じく仙台兵が二百、さらに二本松が百。その後、会津の行列二百が入城。会津家老西郷頼母・横山主税両名が入城の由」

「二十六日、白坂口の新撰組・青龍隊撤兵。白河城に入城。また、新撰組などと同じく防衛線を造っていた各部隊、丘を棄て白河城下に集結」

「二十七日、最後まで前線の丘に拠っていた純義隊、遂に丘を棄て白河城に入城」

「二十七日、布陣の開始。城を背後に陣を構えたり」

これらの報告は全て、敵の籠城を伝えるものだ。

何より意外だったのは白坂口に陣を張っていた新撰組・青龍隊が兵を引いたことだ。白坂口はこちらにとっては白河城攻めにおける本陣を張るのにちょうどいい位置にある。陣を張り、白河城を望むのに最適なのだ。そんなこと敵にだってわかつているだろう。にも拘らず、敵は白坂口をいともたやすく棄てた。

「まあ、白坂口を棄てたのには別の理由があるかもしれん」と伊地知。「敵もさすがに柳の下のだじょうは狙っておらんだろ。もう少し後退して伏兵を配するつもりかもな。じゃっどん、向こうの基本戦術は籠城で決まっとる。そげに考えるのが自然だろうと」

籠城とは。

唸りながらも川村は口を開く。

「というこたあ、長引きもすね、この戦」

そう、古今東西籠城戦には時間がかかる。そもそも、籠城という消極策が狙うもの、それは戦争の長期化による壁兵力の疲弊化なのである。それに、東北の戦という状況が、さらにこの籠城策の老獪ぶりを浮き彫りにする。

「そいだけじゃなか。白河城で足踏みしとる間に、東北には冬が来

る。白河はそんなに雪が降らんつつこつじゃち、会津はそうはいか
ん。冬になったら雪景色だろう」

「あ！」

川村は声を上げた。

【23】

新政府軍にとり白河城は通過点でしかない。そして、奥羽越列藩にとつてすら白河城は玄関口程度の意味しかない。新政府が攻め上がりたい、裏を返せば奥羽越列藩が何としても守りたい郷土。それは白河の先にある。もし白河城の陥落が遅れ、冬がやってきたら……。

「そいは軍事的な失敗だな」

鳥羽伏見より始まった戦は、何としても早く終えなくてはならない。立場は違えど、それが薩長土肥の雄藩による統一見解だった。何より諸外国がこの内戦に目を向けている。諸外国は「日本の内戦には直接介入せず」の姿勢を取っているが、いつその態度を崩してくるか分かったものではない。諸外国が高みの見物を決め込んでいるうちにこの戦を終えなくてはならない。それに、この戦の軍資は各家中から捻出されている。いかに日本有数の雄藩といえど、何年も戦を支えるような蓄えはない。

もしも戦が長引けば、ある種の妥協を求められることだろう。

具体的に言えば、会津を始めとする奥羽越列藩と講和しなければならぬ。つまり、政治的な解決である。だが、軍事的解決で以って当たるべしとされたことが果たせないとなれば、軍人としてこれ以上の屈辱は無いだろう。

「もし白河を落とさんと会津攻めは成らず」伊地知は呟いた。「そして俺どんは会津攻め頓挫の原因を作った愚将つうこつになるな」

「い、伊地知どん！」

「そう、うるたゆっな！」伊地知は笑みを浮かべた。「だからこそ、増援を頼んだんだらう。それに、もうそろそろ到着すうはずだが？」と――。

不意に、表が騒がしくなった。

おお！ おお！

どうやら、騒いでいるのは仲間の兵たちらしかった。皆思い思いに声を上げている。鬨の声とはまた違う、暴風のような歓声だった。この軍の中で歓声を聞いたのは随分久しぶりのような気がした。

「おお、来たか」

伊地知は机に立てかけていた杖を取り表へ足を向けた。その後ろについて、川村も表に出る。

ひどい快晴だった。まばらにしかない空に太陽がぽっかりと浮かんでいた。太陽があたりにぼんやりと陽炎を作る。そしてその陽炎の波間から、待ちに待っていた者たちが浮かんで見えた。

二列でゆつくりと歩いてくる一団。全部で数百人はいるだろうか。見える顔のどれもが精悍そのもの。新式の銃を背負ってやってくる。中には新式大砲を五人がかりで運ぶ姿もある。

やがて、その二列の中から騎兵が二人踊り出た。薩摩揃いの制服姿。そして薩摩者である印、薩摩拵の刀を帯びる二人組は馬を操って伊地知たちに迫る。まるで速度は落とさない。それこそ馬でこちらを跳ね飛ばそうとしているのではないかと疑いたくなるほどの速度で。だが、二人は目前で馬を旋回させて伊地知たちの直前で止まるや即座に馬から飛び降りて伊地知に向かって頭を下げた。

「遅れもした参謀殿！ 野津七左衛門、只今参りもした！」

「先生、今参りもした！ 大山弥助、只今参上！」

頭を下げる二人に対し、伊地知は手を横に振って応じた。

「いや、頭を下げるのはこちらだ。ゆうと来てくれた、七左衛門。

弥助！」

野津七左衛門と大山弥助は、共に満面の笑みを浮かべた。

来ちまいやがった。

そんな川村の言葉は誰に聞こえることもなかった。

馬がいなく。

ここまで誰ともすれ違わなかった。所々に畑や田が見えるが、それの手入れをしている人の姿がない。おそらくは戦果を恐れて皆田

畑を棄てて逃げてしまったか、あるいは戦に合わせて徴発されているのかもしれない。雨が止んでしばらく経っていることもあって、道のぬかるみはほとんど消えていた。

そんな中を、伊地知・川村ら四人が馬のかしらを揃えて歩いていった。

「それにしても、随分と負けが込みましたね、川村さま」

馬の手綱を引きながら大山弥助がそうやって川村のことを茶化すと、野津七左衛門は噴き出しながらもその大山を抑え込む。

「まあそう言うな。川村はあれで精一杯なんだ」

「そうでもすね。あんまり虐めるのも悪かど」

はっはっは。まるで兄弟のようにお互いの言葉に笑いあう大山と野津。その二人のやりとりを眺めながら、やっぱり始まりやがたと川村は心の中で毒を吐いた。

この二人はいつもこうだ。いつも川村をつかまえてはバカにする。だが、川村に反論が出来ない。何せ、二人の経歴はあまりに飛び抜けている。そして、その経歴を裏打ちする実力があるだけ、論戦では必ず負ける。

まずは川村と年格好の変わらない野津七左衛門。この男は伊地知軍の中にあつて唯一、伊地知竜右衛門と比肩しうる男である。元々が砲術家。薩摩家伝の天山流砲術を学び、精妙の域に達した。薩摩軍の大砲部隊を一手に支えている男である。つまり、野津七左衛門は砲術の技術長なのである。確かに歩兵や大砲の運用法を決めるのは伊地知竜右衛門だが、実際に大砲を操るのは野津なのである。かねがね、伊地知もこう言っている。『野津が居らんと俺はただの張り子の虎だ』と。伊地知竜右衛門のこれまでの勝利は、野津七左衛門の砲術によるところが多分にあつた。そういう意味でこの軍の中で唯一伊地知に比肩できる男なのである。

そして、川村より十歳ほど年若の大山弥助。これがまた鼻持ちならない。薩摩の出身。砲術を幕臣・江川太郎左衛門に、兵法を伊地知竜右衛門に学ぶ。この経歴だけでも弥助の俊英振りは分かるところ

るだが、さらに弥助を有名にしたのは海外から輸入された四斤山砲の改良という実績であった。これが新政府軍で使用されるに至り、新政府軍の主力大砲・四斤山砲改は“弥助砲”と呼ばれるようになったほどだ。

だが、野津と川村は立場上同輩、弥助に至っては部下だ。こんなにも馬鹿にされて黙っているのももどかしいが、この二人が組んで川村を茶化しにかかっているとどう返そうが最終的には切り返されてしまう運命にある。悔しいが、ここは耐え忍ぶしかない。

見るに見かねたのか、伊地知がそんな三人に割って入る。

「こら七左衛門、弥助、与十郎。お前たちには緊張感がなかか？」

野津と弥助はしゅんとしよげかえる。その様に納得したかのように頷くと、伊地知は馬を操る鞭を前方に差した。

「お前たち、見ゆつか？」

伊地知の差す先、はるか遠く、丘と丘に挟まれた平野の中に鼠色をした一帯が見える。恐らくは瓦葺の建物が密集しているのだろう。そしてその奥に、石垣と白漆喰で作られた城が見える。

「あれが白河城だ」

あれが――。はるか遠くに見えるあれこそが、東北の玄関口にしてこの戦一番の要衝・白河城。

そう。四人は今、白河城を望む白坂口にまで来ている。「将たるもの、敵情視察くらいできないと困る」と伊地知が言い出したことにより実現した、将官のみによる敵情視察。普通司令官が敵情視察をするときには護衛をつけるのが道理だが、その道理を伊地知は堂々と破って見せた。「護衛？ そげに大人数で行ったら、逆に目立つこつただろう。身軽に四人で行くぞ」と押し切られてしまった。ここまでの道中、川村は心穏やかではなかった。白坂口。二十五日に大敗を喫したところ。ふと見れば二十五日の戦の痕跡は沢山残っていた。大砲を牽いた轍の跡。倒れた稲は恐らくそこに薩摩兵が立った証拠だろう。さすがに死体は残っていなかったが、稲葉に赤い血がこびりついているものもあった。そうした後悔の念を秘めながら

も多数の死者を出した田んぼの脇をすり抜け、敵軍の一隊が陣を張っていた丘に登ったのであった。

実際に見ると、白河城はかなりの地の利を有しているようだった。丘の上から辺りを眺めると、それが手に取るように分かる。

白河城下に達するには、道が三つある。

南東から入る道、南から入る道、南西から入る道。大きく分けるとこの三つである。だが、この道を進むとそれぞれ雷電山、稲荷山、立石山が控え、白河城を囲むように立地している。北への守りに特化した城と聞いていたが、南への防御にも隙がない。その三山を砦として用いれば強力な守りとなる。

しかも東北へ向かうには、この道のいずれかを通らなければならぬ。東北に達するためには、とにかく白河城を抜かなくてはならない。

「さて、ここでお前たちに一つ問題を出そう」

振り返った伊地知は白河城を指したまま続けた。

「白河城には現在二千の兵がいうと聞く。こちらの兵力は七〇〇余り。では、俺どんが白河城を攻めるにあたってどういう戦術を取うべきだ？」

問われた三人は白河城を睨みながらそれぞれに考えを巡らせる。

敵兵の数が二千。こちらが七〇〇。相手が守城の構えを見せている。つまりは攻城。それらの示す状況は一つの結論へと三人を導く。三人は同時に応えた。

「味方増援を待つ！」

そう。二千対七〇〇の籠城対攻城ではお話にならない。今は大した軍事行動を見せず、敵との衝突を極力避けるべきだ。それなりに戦を学んでいる三人は同じ結論を出した。

正論である。だが、この場ではその正論が通じない。味方増援を待てば待つほど、冬の足音が近づいてくる。如何に最新兵器で武装する新政府軍といえども冬將軍にはなすすべもない。

その結論に不満だったらしい。独眼を光らせながら、伊地知は川

村に向いた。

「もし、今すぐこの軍勢で敵を破るとなったら、どついつ戦術が良かど？」

その言葉に応えたのは、大山弥助だった。

「兵力の一カ所集中戦術！」

川村も同感だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6841x/>

竜の人～伊地知竜右衛門異聞～

2011年12月16日20時53分発行